1969年6月20日第三種郵便物認可・2024年11月1日発行・毎月1回1日発行・第56巻第14号

ミュージック・マガジン

MUSIC MAGAZINE

11
2024
NOVEMBER

特集
竹内まりや

特集 ヴィンテージ・ソウルの現在地

小西康陽　バッドバッドノットグッド　メロウ・ローファイ30選

Takeuchi Mariya

CamScannerでスキャン

特集
竹内まりや

デビュー45周年を迎える竹内まりやが、10年ぶりのオリジナル・アルバム『Precious Days』のリリースと、11年ぶりのアリーナ・ツアー"souvenir 2025"を行なうことを発表した。「プラスティック・ラブ」の世界的なバズなどを経て、彼女の音楽は世代や国境を越え、現在さらに数多くのリスナーに届いている。本人のロング・インタヴューを core に、45年の活動を振り返りつつ、その普遍的な魅力に迫る。

CamScannerでスキャン

竹内まりや
ロング・インタヴュー

自分がどんな心境になっていくのか、
それを面白がりつつ歩いていこう

プレシャスな気持ちを込めた10年ぶりの新作を
発表した彼女がいま考えること

天辰保文

CamScannerでスキャン

昨年11月にデビュー15周年を迎えたせいもあるのだろう、竹内まりやの話題がいつになく賑やかだ。2025年4月からの、11年ぶりの全国ツアーも発表された。そんな中でも、もっとも大きな話題となると、やはり、『TRAD』以来10年ぶりの新作『Precious Days』ということになる。そのアルバムについて話をきいた。アルバムに関することだけでなく、彼女がどういう思いで音楽と向き合ってきたか、そういったことにまで話が及んだ。それもまた、このアルバムが日々を照らす光に深みや豊かさをもたらしてくれるのではないか、そんな気がする。

日常がいかにありがたく尊いのか

――今回に限らないんですが、CMのタイアップとか、TVドラマの主題歌とか、たくさんありますよね。それらをアルバム一枚にまとめるというのは大変ではないかと思うんですが、キーワードというか、まりやさんがその時々の思いを託したような歌が必ずあって、ちゃんとアルバムとして着地する。たぶん、意図してなさってるんだろうとは思うんですが、今回の『Precious Days』に関しては特にそうで、最後の〈May Each Day〉が、アルバムを見事に締めていて、ああ、いま、こういうことを思っているんだろうな、言いたいんだろうな、というようなことが伝わってくる。

「結果的にそうなりましたね。〈May Each Day〉は、昔からずっとカヴァーしたかった曲で、今回、このタイミングで、服部隆之さんに編曲をお願いできたのも大きいですし、考えてみたら、ずらっと並んだ曲の軸になるテーマはそこにあるのかな、という感じですね。洋楽カヴァーにもかかわらず、〈May Each Day〉がアルバムを総括しているようだと、そういう風に捉えていただけたんですね」

――もちろん、他にもまりやさんの思いがいろんな形でちりばめられていますけどね。

「そうですね、でも、一番最後にこれを持ってきた意味というのは、自分なりにあって、1曲目の〈Brighten Up Your Day〉が〝おはよう〟だとすれば、これは1日を終えて〝おやすみなさい〟でもあるんです」

――なるほど。改めて〈May Each Day〉の素晴らしさは、どんなところに感じてらっしゃいますか。

「もともと、凄く好きな曲だったんです。子供の頃観ていた〈アンディ・ウィリアムス・ショー〉で、最後にいつもアンディが歌っていたテーマ・ソングですが、当時は歌詞の深い意味なんてわからずに、良い歌だなと思ってました。その後、どんな歌詞だったっけ、と辿っていくと、シンプルなのにとても深い歌詞であることに気づいて、ぜひ皆さんに紹介したかった。この曲のオーケストレーションを服部克久先生に依頼しようと思っていたら、その矢先に亡くなられて。でも、(服部)隆之さんにお願いしたら、〝ぼくやりますよ〟と言ってくださったんです。その結果、見事に克久先生のフレーヴァーがありながら、隆之さんならではのセンスも感じられる素敵な音に仕上がって、本当に感動しました。服部先生でやりたかったこの曲のアレンジを息子さんが引き継いで下さり、〈アンディ・ウィリアムス・ショー〉を私と一緒に観ていた父はコロナ禍に亡くなりましたが、その父と聴いていたこの曲を、服部先生の息子さんと一緒にできたことで、先生にも、父にも感謝を捧げることができたような気がします。『Precious Days』を締めくくるのにふさわしい曲になりました」

――ぼくも、〈アンディ・ウィリアムス・ショー〉の最後で流れてたのは涙ぬと覚えていたんですが、改めて聴いて、つくづく良い歌だなと思いました。殊に、コロナ禍

CamScannerでスキャン

があったり、大切な人が旅立っていったり、普通であることの大切さ、平凡であることの大事さを痛感するんですが、そういったことへの祈りのように聞こえてきますね。

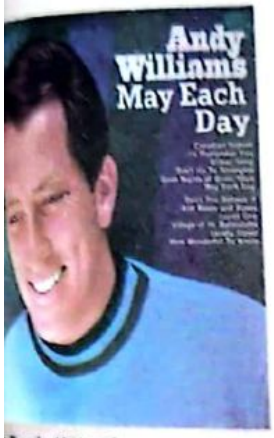
「そう、まさにこの歌は祈りなんですよね。私はもともと、日常への想いを好んで書いてきた人間ですが、自分の年齢や、人生の残り時間に対する想いとか、旅立っていく人への想いなど、さらに体験を積んだことによって、1日1日がつつがなく終わるというのは、当たり前のことじゃなくて、普通に日常が営まれていることがいかにありがたく尊いのかを改めて感じているわけで、その想いを、伝えたかったんです」

――最近は、こちらの年齢もあるんでしょうが、世の中が落ち着かなくて、ことにそういうのを感じさせられますよね。

「ええ、戦争だとか、紛争だとか、地震や災害とかを含めて、普通に暮らせるって、当たり前じゃないんだと。まあ、わかってはいるんですが、それを、より実感した10年だったので、このタイトル、『Precious Days』になって、なおかつ、〈May Each Day〉をどうしても入れたくなったんです」

――おっしゃったように、日常の、平凡な暮らしの中でのちょっとしたときめきとか、その瞬間に光をあてる、そうやって日常を描くというのは昔から変わっていませんね。今回は特にアルバム全体にそういう思いが感じられるような気がする。

「そこはずっと変わらないですね。そんな自分らしいテーマだと思って歌ってきたものがここで集約されたような気もしますし、いろんなタイアップ曲があるんですけど、ドラマとか、映画とか、その依頼がくるたびに〝世の中が元気になるような曲にしてください〟とか、そういうリクエストが、この10年、すごく多かった。例えば、〈歌を贈ろう〉は、TVドラマ〈素晴らしき哉、先生！〉の主人公を励ますとか、〈旅のつづき〉だと、（映画『最高の人生の見つけ方』の中の）天海祐希さんと吉永小百合さんの二人の旅を祝福するような曲



ディ・ウィリアムズ
ay Each Day"

Here〉のポケモンでさえ、疲れたポケモンを癒すための島で働くハルさんという主人公を励ます歌ですからね。そういうリクエストが多いというのは、世相というか、時代を反映しているかなと思いますね。恋愛ドラマを書いてくださいというのはあまりなくて、不倫を書いてくださいというのは一つもなかったです（笑）」

――（笑）。そういうのが1枚のアルバムとしての統一感を出しているんでしょうね。

「結果的にそうなりましたね。その都度その都度、与えられたテーマに沿って別々に書いてきた曲なんですけど、集合させてみたら、どこかにそれぞれ共通する何かがありましたね」

あと何枚アルバムが作れるんだろう

――『TRAD』から10年ぶりの新作ということですが、この間、ぼくらは新型コロナによるパンデミックというまさかの体験をしました。どんな過ごし方をして、どんな思いで日々送りましたか。

「時間の過ごし方としては、私たちは普段から家にいることも多いし、家で曲作りをしてるから、外へ出られないことへのフラストレーションはそんなになかったんで

CamScannerでスキャン

人と会えるということが凄く嬉しいことなんだと再認識しましたよね。それが創作にどんな影響をもたらしたかはわからないけど。時間をもらえたという意味では創作活動に役に立ちました。例えば、山下達郎はツアーに出られないので、その間に11年ぶりの『SOFTLY』というアルバムを完成させることができたし。私はその間、杉（真理）さんとかBOXのみんなとレコーディングしたり、服部隆之さんにオーケストレーションを頼んだりしていました。スタジオではマスクをしたりとか、環境は少し変わりましたけど、音楽活動に向かうという意味では、外に出かけていろんなことができないぶんだけ、集中できたかなと思います。ただ、世の中的には大変なことも多くて、例えば、私の場合、宿泊業である実家の旅館に関していえば、普段通りにいかないこともいろいろありました。特に、コロナ禍に最愛の父親が亡くなることで、初めて肉親の死というものに向き合い、そこで感じたことが、作品の何処かに反映されているかもしれません。そんな3年間でしたね」

――2021年には予定されていた全国ツアーが中止になりましたよね。無観客でのライヴで、配信という形になりましたが。

「はい、それが凄く残念でしたね。ずっとリハはしていたので。代替案として、無観客で配信ライヴをやりましたが、あれはセットリスト通りではないし、一つの体験として意義はありましたけれど、無観客でやって配信するというのは最初で最後だと思うし、やっぱり、お客さんにいてほしいな、と思いました。TVショーをやっているような感覚でしたから。来年2025年に11年ぶりのツアーをやりますが、ようやくそのリヴェンジが叶いそうです」

――音楽仲間も旅立ちましたよね。

「坂本（龍一）さんとか、（高橋）幸宏さんとか、会えなくなった方がいっぱいいて。とっくん（中野督夫）とかもいなくなっちゃって、友だちがいなくなるのももちろん淋しいけど、一緒に音楽を作ってきた仲間がいなくなるのは本当に淋しいですね。そういう年齢になってきたんだなあ…と。自分のメンタリティーはそんなに変わっていなくて、大学生のときのままのくせに、状況は刻々と変わってきてるわけで。〈人生の扉〉を書いたときは51歳で、〝満開の桜や色づく山の紅葉をあと何度見ることになるだろう〟と歌っているんですけど、〝あと何枚アルバムが作れるんだろう〟と、ふと思いました」

――皆さんと、一緒にやられてますもんね。

「ええ、特にとっくんとはデビューから一緒だったんで、彼と一緒にやったJDサウザーの〈ザ・ラスト・イン・ラヴ〉とか、イーグルスの〈ニュー・キッド・イン・タウン〉のカヴァーはどうしても音源をCDで残したくて、シングル〈歌を贈ろう〉のカップリングに入れました」

――アルバム『Turntable』でも、〈テキーラ・サンライズ〉をセンチメンタル・シティ・ロマンスと一緒にやってますよね。

「ええ。今回のもサンソン（〈サンデー・ソングブック〉）のオンエア用に録っておいた音源ですけど、ちゃんとミックスして、形にして収めれば、きっと、彼も笑って聴いてくれてるんじゃないかと。とっくんの声が入るコーラスは本当にいいんですよ。アコースティック・ギターの音色も美しいし、何もかもが懐かしい。でも、一緒にやった音がそうやってずっと残っていく、それが音楽の素敵なところだなと思うし、救われますね」

――センチメンタル・シティ・ロマンスは、やはり、特別な存在ですか。

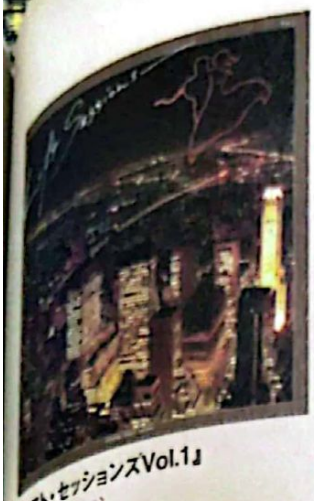
「特別ですね。彼らとのセッションが私のスタート地点なので。（鈴木）茂さんの〈8分音符の詩〉をセンチとレコーディン

CamScannerでスキャン

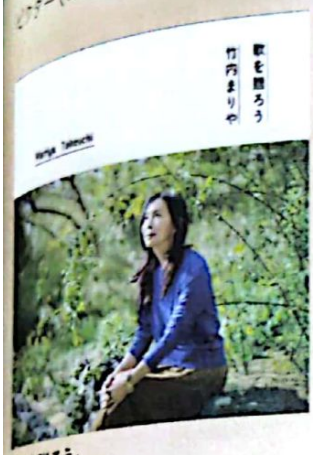
グしたことで、私はこの仕事が好きだと感じて、最終的にそれを選んだ。本当は、音楽雑誌の編集者になるために就職を考えていたんですけど、杉真理さんがプロになって、その杉さんのコーラスを手伝いにビクターにアルバイトで行ったときに出会ったのが、川原（伸司）さんや牧村（憲一）さんです。そうした業界の人たちと知り合って、その後『ロフト・セッションズVOL1』という企画アルバムに参加しませんかという話になり、アマチュアとしても歌は残せるのなら面白そうだからやってみよう、ということになったんです。〝でも、プロにはたぶんなりませんから〟と。そして、ビクターのスタジオでセンチが一緒にやってくれて、そのプレイバックを聴いたとき、〝プロの歌手になったらこんなに面白いことができるんだ！〟と思ったわけです。そして、結局この道を選び、デビュー・アルバム『BEGINNING』をセンチと合宿しながら作った。そんな仲間でしたからね。音楽を共有できる楽しい仲間がいてくれたことが、私にとってはプレシャスだったなあ、とつくづく思いますね」

――本当にそうですね。

「松木（恒秀）さんもそうでした。凄く可愛がっていただいて、何かがあるとすぐに〝おっ、姫、元気か〟って電話がかかってきた。ジャズを歌わせてくださいと、『Turntable』に入れた〈Fly Me To The Moon〉や〈(I Love You) For Sentimental Reasons〉などを一緒にやっていただいたとき、ご病気も落ち着いて、すごく元気になられてたんです。ポンタ（村上秀一）さんや、ダイブツ（高水健司）さんが、〝まりやがセッションすると言ったら、松木さん元気になるみたいだから、もっとセッションに誘って〟と。それでいろいろ録音しましたが、それが終わって間もなく亡くなられて。でも、ご一緒した音が残っているというのは嬉しいことですね」



『ロフト・セッションズVol.1』
ビクター(1978)



「歌を贈ろう」
ワーナー(2023)

誰かと一緒に歌うって楽しいです

――〈歌を贈ろう〉では、生田絵梨花さんと一緒に歌ってますよね。こうやって、ちょっとしたというのも変ですが、楽しそうなアイディアがお好きだし、それで作品を昇華させるのが見事ですよね。

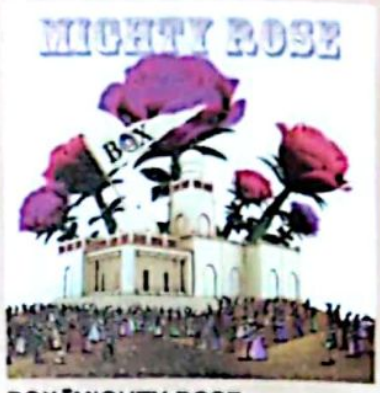
「ドラマ主題歌の話があったとき、絵梨花さんの声はきれいで歌もうまいな、と感じていたので、主人公を励ます歌だとしたら、彼女が参加することで、より意味のある〈歌を贈ろう〉になると考えたんです。スケジュール上、無理だろうと思っていたのに、都合をつけて来てくださって、本当にありがたかったです。〈元気を出して〉で薬師丸ひろ子ちゃんがコーラスしてくれたように、一緒に作ることで歌の意味が増すような、そういう必然性のあるコラボって好きなんですよ。誰かと一緒に歌うって楽しいですしね」

――〈Watching Over You〉では、杏里さんと一緒にやってますね。

「コロナ禍に杏里から〝どうしてますか〟って、電話がかかってきたんですね。同期デビュー仲間の彼女とは時々電話で近況報告したりするんですけど、そのうちに一緒

CamScannerでスキャン

松原みき
「真夜中のドア〜stay with me」
シーソー／ポニーキャニオン（1978）



BOX『MIGHTY ROSE』
ユニバーサル（2012）

一緒に何かできたらいいね、とか話していたら、その後まもなくTVドラマ〈和田家の男たち〉の主題歌の話がきて、私に曲を書いて歌ってください、というオファーだったんですけど、達郎は彼自身の仕事が入っていて編曲できる時間がなかった。だったら、彼以外の編曲家を探さなくては、と思ったんですが、あっ、ちょっと待てよ、杏里と何かやろうと考えてたんだ、杏里とやるんだったら、林哲司さんがいいんじゃないか、と閃いたんですよ。その頃、〈真夜中のドア〜Stay With Me〉の世界的な人気で、林さんの話題を見聞きしていたから。（杏里の）〈悲しみがとまらない〉と、（私の）〈SEPTEMBER〉を書いてる林さん、この3人でコラボしたら面白いものになるんじゃないかと。ドラマのかたに、こういう形で杏里さんと一緒でもよろしいですか、と訊いたらOKが出て、即やることになったんです。林さんに素敵な曲を書き下ろしていただき、私が詞をつけて、シティ・ポップ・ライクな感じを目指してできたのがこれです。林さんのメロディーを歌うのは、アルバム『PORTRAIT』で、〈僕の街へ〉を歌ったのが最後でしたから、40年以上経っているんだけれど、それも面白いなと思って。だから、杉さんも、林さんも、達郎もそうなんですけど、デビュー・アルバム『BEGINNING』で書いてくれた人たちの曲を、またこうやってもう一度歌える喜び、純粋な歌手としての楽しみを再び見つけた気分です。自分のメロディーじゃない楽曲を歌うのが、今でも好きなんですよね。もともと、シンガーとしてデビューしてますから」

――昨今、話題のシティ・ポップというか、80年代というか、そのシンボリックな方たちが集まって、サウンドも、当時を匂わせるものになっている、それは意図したことだったんですね。

「はい、私と杏里がやるんだったら、そこを目指したほうが面白いと。シティ・ポップ・ブームの後追いというわけじゃなくて、今の時代に林哲司さんが作編曲したものを私たちが歌うという、ちょっとした洒落だと思っているんですよ。杏里と林さんが会ったのも30年ぶりとかだったらしく、一緒に昔話などができたことも含めて、とても楽しい作業でした」

――〈TOKYO WOMAN〉は、杉さんや松尾（清憲）さんたち、BOXとの共演ですね。

「これが入ったBOXのアルバム『MIGHTY ROSE』の完成試聴会で聴いたときからのお気に入りで、この曲をいつかやろうとずっと思ってました。達郎も自分の仕事で忙しいときだったので、BOXにお願いしたら即集まってくれて。私が男性ヴォーカリストとして歌うようなスタイルなので、ビートルズをカヴァーする時の感覚に近いですよね。こういう曲が入るとアルバムの幅が広がる気がします」

――昔はあったけど、最近ないような感じで、新鮮でしたね。

「そこがね、BOXの真骨頂だと思います。そういうブリティッシュ・ポップスというか、マージー・ビートというか、イギ

CamScannerでスキャン

リスの匂いがしつつも、でも独自のJポップという感じが、杉さんや松尾さんたちが生み出すマジックなんですよね。あの面子で、あの演奏で、あのエンジニアリングじゃないと、この音にはならないんですよ」

――BOXも、まりやさんにとって、センチとは違った意味で大切な存在ですか。

「もちろんです。私のイギリス的な趣味をBOXが満たしてくれて、私のアメリカ的な趣味をセンチが満たしてくれる。その両輪でやってきたのが大きかったですね、特に洋楽をカヴァーする際は」

――〈遠いまぼろし〉は、その杉さんとの共作の、ボサノヴァですね。

「杉さんは凄く多作な方で、常に曲を作ってるんですよ。で、良いのができると時々聴かせてくれるんですけど、これもその一つ。コロナ禍のある日、〝バカラックをずっと聴いてたら、こんな感じのが出来ちゃって、聴いてみてくれる？〟と音源を送ってくれました。杉さんにしては珍しいボサノヴァで、聴いた瞬間に、あっ、この曲に歌詞をつけて歌いたいな、と思ったんです。歌ってもいいかなときいたら、どうぞ、ということになりました。デモの編曲も既にこんな感じで出来上がってたので、その後ギターとか、生の楽器を入れて仕上げました。歌詞はあっという間に書けましたね。昔の恋への未練をテーマに決めて、ジョビンやジョアンの名前を入れるのも面白いなと思いながら。〈TOKYO WOMAN〉のほうは、いかにも杉さん&松尾さんらしいメロディーじゃないですか、それに対してちょっと毛色の違ったタイプを書いてくれたおかげで、ここでもヴァリエーションが広がって有難かったですね」

シンガーとしての喜び

――そのいっぽうで、先ほど触れた生田絵梨花さんを含めて、若い人たちとの共演も多い。

「生田絵梨花さんが歌を歌わない人だったら、お声がけはしなかったと思うんですが、ディズニー映画の主題歌〈ウィッシュ〉とか凄く上手に歌ってらしたから、一緒に歌ったら良いコラボになるだろうなと思って。これまでも、そうやってきましたし。例えば、松浦亜弥ちゃんの〈Subject:さようなら〉も、亜弥ちゃんの多重コーラスが入ったら素敵だろうなと思って打診したら、〝家で、子育ての合間をみて必ずいれます〟と快諾してくれて、実に素晴らしいコーラスを入れてくれました。早見沙織さんのセルフ・カヴァー、〈夢の果てまで〉にしても、歌が上手な人なので、違和感が入れたコーラスのカウンター・ラインに、私と彼女がサビの言葉をハモるという、そんな束の間のレコーディングを楽しんでくださいました。今回は、そうやっていろんなコラボができたことも大きな収穫でしたね」

――そう考えると、生田さんといい、早見さんといい、若い人たちと我々のような世代との橋渡しでもあり、また邦楽と洋楽との橋渡しというか、そういう存在としても貴重ですね。今回のシングル〈歌を贈ろう〉にしても、JDサウザーの〈ザ・ラスト・イン・ラヴ〉とイーグルスの〈ニュー・キッド・イン・タウン〉の2曲をセンチと一緒にやっているというので、ぼくらの世代には興味をもったファンは少なくないと思いますよ。

「なるほど。昨日、生田さんのラジオ番組に出たんですけど、彼女が〝〈ザ・ラスト・イン・ラヴ〉を初めて聴いて、YouTubeで、サウザーの他の曲も聴きました〟と言ってくれて、ああ、そういうことなんだと」

――カヴァーはいろんな形でやり続けていますよね。

「ええ、それはもう、ライフ・ワークと

CamScannerでスキャン

いうよりも、本来の趣味の課外活動（笑）。ずっとやりたいんです」

――その理由と繋がるかどうかわかりませんが、まりやさんがカヴァーをやるとき、その歌や歌手、それを生んだ背景となるもの、時代でもいいんですが、そういったものへの追悼じゃないけど、それに近い感情が伝わってくる。

「ああ、確かに、それはありますね。例えば、今回の〈ニュー・キッド・イン・タウン〉にしてもそうなんですが、出来るだけ完コピに近づけて、グレン・フライのようにそのままのフレーズで歌いたいんですよね。本当の意味でのカヴァーというのは、それを自分のものにする面白味や違いを出す意義があるはずですが、ビートルズのカヴァーにしてもそうだけど、私はできる限りオリジナルに忠実に歌いたい。と言うのも、そのオリジナルがベストだと思っているので、それは到底超えられないから。忠実に歌うことで、自己満足かもしれないけど、その人をリスペクトしていることが少しは届いてほしいと思っています。だから、そのように感じていただけるのは嬉しい。自分のオリジナルというのがあって、そのいっぽうでカヴァーがあって、そこに自分のルーツを感じてもらえる。そういう両輪を並行してやってきてる。達郎もそうで、ビーチ・ボーイズをやったり、50年代のスタンダードやドゥワップを歌ったりすることで、彼の中にある音楽の幅をわかってもらえるというようにね。そんな気がします。それは、洋楽をずっと聴いてきたリスナーとしての喜びであり、それをやれていることが、シンガーとしての喜びでもあるから」

――その振り幅があるから先に一歩進めるのかもしれませんね。

「確かにそうですよね」

――ドゥワップといえば、〈Coffee & Chocolate〉がありますが。

「ええ、そろそろ完パケしなくてはいけないという頃に、今回は、ロッカ・バラードを入れていないことに気づいて。必ず、アルバム1枚に1曲は意識的に入れてきたんですよ。例えば、『Denim』では〈ラスト・デイト〉とかね、それでどうしようかなと考えていたんですが、〈サンソン〉で達郎のドゥワップ特集を聴いたこともあって、あっ、ドゥワップで仕上げればすぐにできると（笑）。ドゥワップにピッタリくるような、ちょっとオールドタイミーで短めの耳休め的な曲を作って、〝締め切りが迫っている〟という状況をそのまま歌詞にしてみました（笑）」

――達郎さんと言えば、〈Daydream Love〉のように、彼のメロディーを歌うというのは、随分久しぶりではないですか。

「『PORTRAIT』での〈ウエイトレス〉以来なので、実に43年ぶりですね。そう言えば、私が書いて達郎が歌ったのは、〈Mighty Smile（魔法の微笑み）〉とか、〈寒い夏〉とかあったのに、私が彼のメロディーを歌ったのは、〈不思議なピーチ・パイ〉のB面の〈さよならの夜明け〉とか、〈ウエイトレス〉とかだけだったから、これはこれで久しぶりで新鮮でしたね」

――達郎さんとのデュエットと言えば、〈Let It Be Me〉が定番ですが、今回は、同じエヴァリー（・ブラザーズ）でも、〈All I Have To Do Is Dream〉ですね。

「2021年のツアー用にエヴァリーのこの曲をやろうと、ずっとリハーサルしてきて、バンドのアレンジも固まってた。でも、ツアーが流れちゃったんで、折角リハしたんだから、このままレコーディングしちゃおうか、と一発録りしたものです。デュエットのヴォーカルをダブルに重ねたのは、新しいやり方でしたね。今回、いろんな人とのコラボを入れたので、いつもの達郎との洋楽カヴァー・デュエットもやっぱりほしいなと思って少し気楽な感じで入れ

CamScannerでスキャン

ました」

――いまさらながらですが、達郎さんとのデュエットはどうですか。

「皆、デビューした頃に、山下達郎と何かデュエットするんだったら、この〈All I Have To Do Is Dream〉をやりたいなと思ってたんですよ。だから、デビューした頃に考えてたことを、45年経ってやってるんだなと、あとで気づいて、妙に感慨深いものがありましたよ」

――改めて、アルバムのタイトルについて、教えてください。

「私自身が一番大切にしている、日常の中にあるささやかな喜びや、何気ない日々への想いを込めたのと、〈Brighten up your day〉〈Smiling Days〉〈Days of Love〉〈今を生きよう（Seize the Day）〉〈May Each Day〉というように、曲名に『Day』という単語が入っているのが5曲もあって、だとしたら、『Days』というのが、アルバム・タイトルにふさわしいけど、その『Days』の前に何を付けるか、『Beautiful Days』なのか、あるいは『Wonderful Days』なのか、となると、やはり、『Precious』でしょう、と、最後の〈May Each Day〉で決定的でしたね」

――アルバムを作り終えて思うことは何かありますか。

「そうですね、あと何枚アルバムが作れるんだろうなと、いつもそう思うんですが、今回はもっと強くそんな思いがしました。それと、11年ぶりに来年はツアーをするので、それに向けてどんなセットリストを皆さんが望むのだろうか、そんなことを考えられる日が来たというのが凄く嬉しい。それに向けて準備をしていきたいなと思います。

そして、これからもこんな感じで、マイペースで、続けていくんだろうなと（笑）。日々、自分の日常を面白がって生きていく、たまに、膝が痛くなったり、身体のいろんな不具合が出れば、これが先輩の皆さんがいうところの老化現象なんだなぁとか、抗うことも含めて、年をとって自分がどんな心境になっていくのか、それを面白がりつつ歩いていこうと思ってます。そうやって、面白がっていけば何か良い出来事に出会えると思っているんですけどね。とにかく、普段の何気ないことを有難いと思えることが有難いんです。別に綺麗ごとじゃなくてね、それを実感しているからこそ、このアルバムを通じて、歌を通して、少しでもそんなプレシャスな気持ちを共有してもらえたら本望なんですけどね」

ロビー・ロバートソンとの会話

――最後になりますが、これは、どうしてもうかがっておきたかったんですが、ロビー・ロバートソンが亡くなりましたよね。

「とても残念です。ロビーがいないというのは、淋しいですよね。本当にいい人でした。最後にお会いできたのは、2018年に映画『souvenir the movie』の撮影でロサンゼルスに行ったとき。バースデイ・メールは毎年送っていましたが、ロスに到着後、ふと思いついてメールしたら、〝晩ご飯を食べるぐらいの時間なら作るよ〟と返事が来たんです。その日の撮影が終わったあとに、2時間ほど空けてくださって、このレストランを予約したからと連絡いただいたんですね。そこは、私が『Love Songs』のときにディレクターの故・宮田（茂樹）さんたちと行ったのと同じお店で、凄く懐かしい場所でした。映画『ラスト・ワルツ』の頃の話や、ヴァン・モリソンと新しい曲を今作ってるんだよとか、近況を教えてくださったりしてね。そしたら、なんと、お店にランディ・ニューマンがいるのを彼が見つけて。〝あそこにランディがいるよ〟と、呼んでくれて。彼の〈セイル・アウェイ〉という曲を大学時代にやって

CamScannerでスキャン

いたので、ランディがその歌詞の意味を説明してくれたりして、一瞬夢を見てるんじゃないかという光景の中にいましたね。それが、最後でした。そのときは健康そのもので、元気な笑顔のロビーさんとそのままサヨナラしたのがご褒美のような気がしています。たまたまね、ロサンゼルスで撮影がなければ会えなかったし、残念だけど、彼が残した偉大な曲の数々がある限り、ずっと生きているという感じがします」

――『Passage』でザ・バンドの〈アウト・オブ・ザ・ブルー〉をカヴァーしてましたよね。

「その〈アウト・オブ・ザ・ブルー〉の話が出たとき、ロビーが、〝あれはね、本当はリチャード（・マニュエル）が歌うはずだったんだけど、約束の時間になっても彼が全然スタジオにこなくて、エンジニアと待ちくたびれて、しかたなく自分が歌うことになった〟と。リチャードが歌っていたら、それはそれで素晴らしいものになってただろうけど、私はロビーが歌ってるのも切なくて大好きだった。このエピソードはたぶん私しか知らない（笑）」

――『Passage』のライナーでそのことを書かれていたので、何処でこの情報を得たんだろう、と思ってました。

「でしょ（笑）」

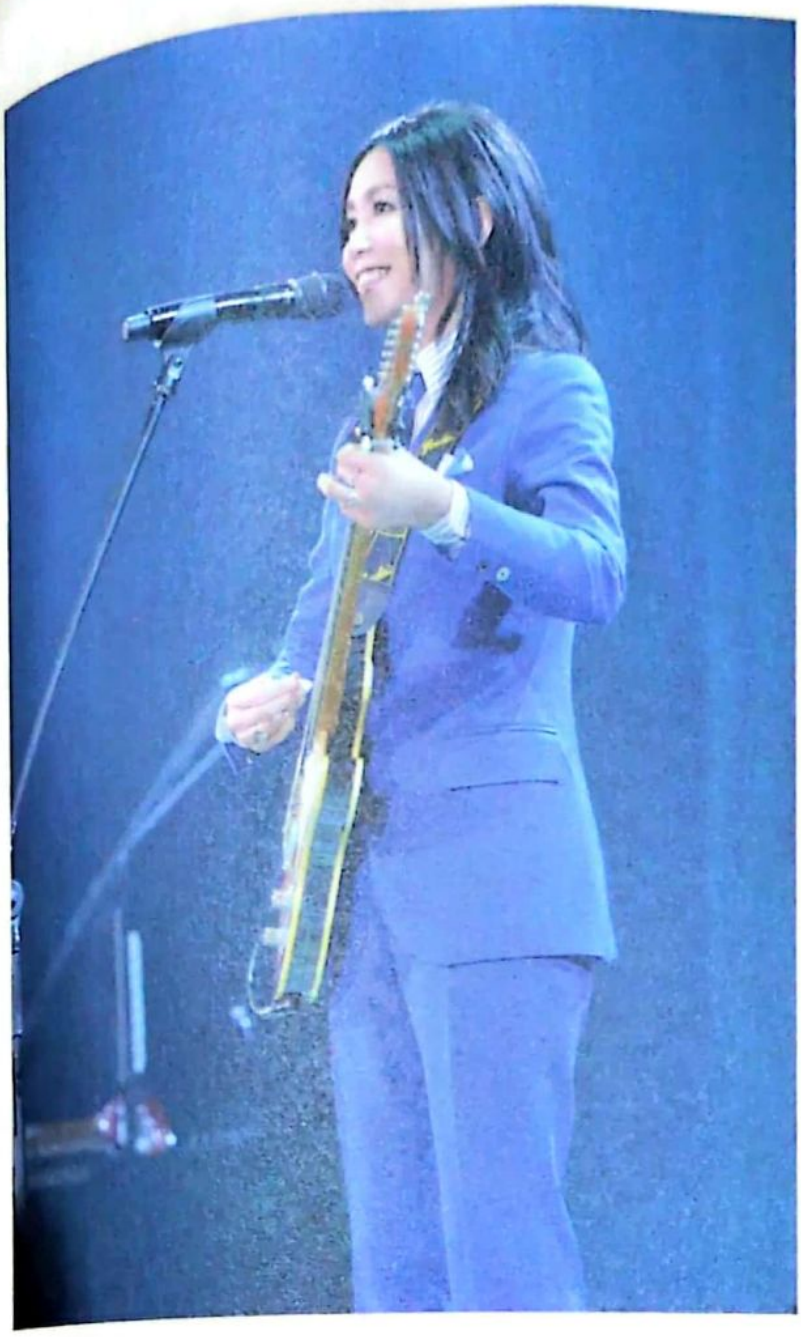
（9月6日　六本木・ワーナーで）

CamScannerでスキャン

最新作『Precious Days』を紐解く

〝オールディーズ〟と〝ギター〟が、竹内まりやの音楽の重要なキーワードであることを再確認した

渡辺亨



10年ぶりの新作『Precious Days』

竹内まりやの『Precious Days』は、2014年9月10日にリリースされた『TRAD』から約10年ぶりのオリジナル・アルバムだ。全18曲の大半は、すでに放送されたテレビ・ドラマや公開済みの映画の主題歌、CMソングなどの24年の最新ミックス。また、松浦亜弥に提供された「Subject:さようなら」と、早見沙織に提供され、17年11月に公開されたアニメ映画『劇場版 はいからさんが通る 前編～紅緒、花の17歳』の主題歌になった「夢の果てまで」のセルフ・カヴァーもある。僕自身はインターネットはよく利用するものの、もう20年以上も前からテレビ受信機の類を持っていないこともあって、前記したテレビ番組関連曲やCMソング等のほとんどを、新曲として

CamScannerでスキャン

聞いた。しかし、『Precious Days』に収録されている曲自体は、竹内まりやの熱心なファン以外の方々を含めた、多くの人たちの耳にすでに届いているのだろう。

そうした『Precious Days』の中にあって、7曲目の「遠いまぼろし」は、今回初めて発表されたオリジナル曲だ。作詞は竹内まりや、作曲は竹内にとって慶應大学時代の音楽サークル時代からの先輩でミュージシャンにあたる杉真理である。

「遠いまぼろし」は、"ラジオからふとこぼれた／懐かしいそのボサノヴァ"という歌詞で始まり、その後には、"あの人のそばで／いつも聴いたジョビン"、そして"夜明けまで愛し合って／鳴り続けたジョアンのギター"という一節が出てくる。あえて書き添えておくと、ジョビンはアントニオ・カルロス・ジョビン、ジョアンはジョアン・ジルベルトのことだ。もちろん「遠いまぼろし」は、音楽的にボサノヴァを基調とした曲。編曲も往年のボサノヴァに準じていて、ナイロン弦を張ったギターや生ピアノなどに加えて、流麗なストリングスが加えられている。

『Precious Days』には、洋楽のカヴァーが3曲収められている。3曲目「ベイビー・マイン（日本語ver.）」、16曲目「All I Have To Do Is Dream（Duet with 山下達郎）」、そしてアルバムの最後を飾る18曲目「May Each Day」の3曲。このうち、「All I Have To Do Is Dream」と「May Each Day」は、今回が初出だ。

「ベイビー・マイン（日本語ver.）」は、ディズニー映画『ダンボ』（2019年）の日本版のエンディングを飾った同曲のカヴァー。『ダンボ』は、ティム・バートンが監督を務めたことでも話題となった実写映画だ。しかし、もともと「Baby Mine」は、41年に初公開されたディズニーのアニメ映画"Dumbo"の挿入歌である。

「All I Have To Do Is Dream（Duet with 山下達郎）」は、ビートルズやサイモン&ガーファンクルにも大きな影響を与えたエヴァリー・ブラザーズが58年に放った全米ナンバー・ワン・ヒットのカヴァー。エヴァリー・ブラザーズのオリジナルは、「夢を見るだけ」という邦題でも知られる。竹内まりやは、「All I Have To Do Is Dream」をパートナーの山下達郎と一緒に歌っているが、二人はラジオ番組やライヴ等で、この曲をデュエットしてきた。その証拠に、後述する『Precious Days』のデラックス盤に付く映像作品には、二人のデュエットによるライヴ映像が収録されている。なお山下達郎は、「All I Have To Do Is Dream」を、師匠筋の大瀧詠一とラジオ番組でデュエットしたことがある。

「May Each Day」は、アンディ・ウィリアムスが歌った曲のカヴァー。63年4月にリリースされたアンディのアルバム"Days Of Wine And Roses And Other TV Requests"の収録曲だ。「May Each Day」は、アンディ・ウィリアムスがホストを務め、米国のNBCテレビで62年から71年にかけて毎週放送されたヴァラエティ番組'The Andy Williams Show'のクロージング・テーマとして使用された。'The Andy Williams Show'は、日本でも66年から69年にかけて、「アンディ・ウィリアムス・ショー」としてNHK総合テレヴィジョンで放送された。だから、この番組を同時代に見て、レギュラー出演していたオズモンド・ブラザーズ（後のオズモンズ）の姿とともに記憶している日本人も少なからずいるに違いない。おそらく竹内まりやもその一人だからこそ、「May Each Day」のカヴァーで、『Precious Days』を締め括ったのだろう。

映像作品『Precious Live Collection』

『Precious Days』のデラックス盤には、

『Precious Live Collection』と題された全17曲入りの映像作品（ブルーレイおよびDVD）が付属している。

『Precious Live Collection』は、竹内まりやにとって初の配信ライヴにあたる“LIVE Turntable”の10曲と、その後に10年から14年までの未公開ライヴ映像6曲を加えて配信された“LIVE Turntable Plus”を中心としたものである。

“LIVE Turntable”は、竹内まりやが久しぶりにリアルなライヴ ハウスでコンサートを行なうということで、話題を集めた企画だった。ところが、新型コロナウイルスのパンデミックのため、コンサート自体が残念ながら中止に。その代替企画として、“LIVE Turntable”は20年11月20日に、無観客という環境のもとでゼップ東京で収録され、21年2月に限定配信された。

『Precious Live Collection』は、そのゼップ東京での無観客ライヴの1曲目、クリスタル・ゲイルの「瞳のささやき（Don't It Make My Brown Eyes Blue）」のカヴァーで幕を開ける。ケンタッキー州出身の女性歌手、クリスタル・ゲイルが1977年に放った全米ヒット‘Don't It Make My Brown Eyes Blue’は、もともとジャジーなカントリー・ポップ。よって日本では、オランダのジャズ系女性歌手ローラ・フィジーが1991年に発表したファースト・アルバム“Introducing”に収録されているカヴァーも、わりと知られている。『Precious Live Collection』には、この「瞳のささやき」に加えて、ピーター・ポール&マリー（PPM）によって広く知られている「悲惨な戦争」（“LIVE Turntable”より）、そして前述した通り、山下達郎とのデュエットによる「All I Have To Do Is Dream」（同）といった計3曲の洋楽のカヴァーが収録されている。このように『Precious Days』と『Precious Live Collection』には、それぞれ洋楽のカヴァーが3曲ずつ含まれている。また、後者の中には、竹内まりやがエレクトリック・キーボードの弾き語りで、数々の懐かしのオールディーズの曲名を引用したオリジナル曲「すてきなヒットソング」を歌う映像もある。洋楽の曲、それもポップ・スタンダード的な曲のカヴァー、およびオールディーズ風の曲作りは、ミュージシャンとしての竹内まりやの音楽志向を示す一つの要素だ。

『Precious Live Collection』には、山下達郎が野外での音楽フェスティバル“SPACE SHOWER SWEET LOVE SHOWER 2012”で行なったライヴに、竹内まりやがスペシャル・ゲストとして登場し、「家に帰ろう」と「元気を出して」を歌った映像も収められている。桑name丸ひろ子への提供曲のセルフ・カヴァーにあたる後者は、今回が初映像化だ。このライヴでも山下達郎率いるバンドでギターを演奏している佐橋佳幸は昨年、竹内まりやと山下達郎の両方のバンドからの“卒業”を発表した。『Precious Live Collection』では、両バンドにおける佐橋佳幸の勇姿を見ることもできるので、その点でも貴重だ。

『Precious Live Collection』にライヴ映像が収められている「家に帰ろう」は、竹内まりやが作詞・作曲、山下達郎が編曲とプロデュースを担当したオリジナル曲。もともとは92年10月のアルバム『Quiet Life』の収録曲で、同年11月にはシングル・カットされた。「家に帰ろう」は、60年代前半の英国のマージー・ビートと、その後に米国で勃興したフォーク・ロックに相通じるギター・サウンドおよび曲調を特徴とする。先に触れたライヴ映像では、山下達郎がマイク内蔵のアコースティック・ギター、佐橋佳幸がエレクトリック・ギターを弾いていて、佐橋のソロも聞くことができる。ちなみに『Precious Live Collection』には未収録だが、“LIVE Turntable”

CamScannerでスキャン

では、竹内まりや自身がエレクトリック・ギターを弾きながら、ビートルズをはじめとするマージー・ビートへの想いを描いたオリジナル曲「マージービートで唄わせて」を歌っていた。また、『Precious Days』の10曲目「TOKYO WOMAN」は、BOXの曲のカヴァーだ。BOXは、マージー・ビートがルーツの一つである杉真理が同じような音楽志向を持つ松尾清憲らと結成したバンド。「TOKYO WOMAN」は、2012年にリリースされたBOXのアルバムの『マイティ・ローズ』の1曲目で、竹内まりやはそのオリジナル曲に参加していた。「TOKYO WOMAN」は、もちろんギター・サウンドが主体の曲。なお竹内まりや版の「TOKYO WOMAN」は、昨年放送された同名のテレビ・ドラマの主題歌になった。

山下達郎の横顔

ここまで記述してきたように、僕は『Precious Days』と『Precious Live Collection』を通じて、〝オールディーズ〟と〝ギター〟が、竹内まりやの音楽の重要なキーワードであることを再確認した。

『Precious Days』の13曲目「Days of Love」の、作詞は竹内まりやだが、作曲は山下達郎。この新作の中で、唯一の、山下が作曲した曲だ。「Days of Love」にはアコースティック・ギターが織り込まれているし、間奏ではエレクトリック・ギター、それもオールディーズぽい曲調に合わせて、トゥワンギー・ギターのようなトーンのソロが披露される。こんな「Days of Love」は、山下達郎が竹内まりやが歌うことをあらかじめ想定して作った曲だろう。もちろん山下個人のソロ作品にも、ギターがフィーチャーされた曲がたくさんある。が、少なくとも、この「Days of Love」のような曲は見当たらない。こんな「Days of Love」や「家に帰ろう」を聞くと、これは山下のソロ作品ではあまり感じることがないことだが、元エレクトリック・ライト・オーケストラ（ELO）の英国人、ジェフ・リンのイメージが彼に重なる。ビートルズやフィル・スペクターに精通していて、ギター・サウンドを好み、88年にはジョージ・ハリスン、トム・ペティ、ボブ・ディラン、ロイ・オービソンとともに覆面バンド、トラヴェリング・ウィルベリーズを結成したシンガー・ソングライター／プロデューサーだ。竹内まりやの音楽に関わったときには、こんな山下達郎の横顔が浮上する。しかも同時に竹内まりやの、いわば座付き作家のようなプロデューサー、アレンジャー、作曲家としての側面も。『Precious Days』と『Precious Live Collection』の聞きどころは、こんな点にもある。

『Precious Days』
ワーナー
WPZL32154〜5（デラックス盤CD+ブルーレイ）
WPZL32156〜7（デラックス盤CD+DVD）
WPZL13607（CD）
WPJL10222〜3（2LP）
WPTL10005（カセット）
10月23日発売

① Brighten up your day！②小さな願い（2024 New Remix）③ベイビー・マイン（日本語ver.）④君の居場所（Have a Good Time Here）⑤Smiling Days（2024 New Remix）⑥Watching Over You（Duet with 杏里）⑦遠いまぼろし ⑧Subject:さようなら ⑨夢の果てまで ⑩TOKYO WOMAN ⑪旅のつづき（2024 New Remix）⑫Coffee & Chocolate ⑬Days of Love ⑭歌を贈ろう ⑮今を生きよう（Seize the Day）（2024 New Remix）⑯All I Have To Do Is Dream（Duet with 山下達郎）⑰今日の想い（2024 New Remix）⑱May Each Day

『Precious Live Collection』
＊デラックス盤のみ収録のDVD
①瞳のささやき ②待っているわ ③September ④五線紙 ⑤悲惨な戦争 ⑥Oh No, Oh Yes ⑦静かな伝説 ⑧幸せのものさし ⑨All I Have To Do Is Dream ⑩すてきなヒットソング ⑪家に帰ろう ⑫元気を出して ⑬みんな一人 ⑭PLASTIC LOVE ⑮駅 ⑯人生の扉 ⑰いのちの歌

CamScannerでスキャン

クリス松村が選ぶ竹内まりやの10曲

本当にぴったり「聴きたかったの！」っていう歌を出してくれるんですよね

70～80年代ポップスへの深い愛情を感じさせる、マニアックなレコード・コレクターとしても広く知られるタレント／ディスク・ジョッキーが語る

宗像明将

タレント／ディスク・ジョッキーとして活躍するクリス松村は、大の竹内まりやファンとして知られる。竹内との親交も深いクリスに、あえてシングル縛りで10曲を選んでもらった。悩みながらも竹内の魅力を語るクリスの言葉は熱を帯びていった。はたしてクリスの選んだ10曲とは。

①「戻っておいで・私の時間」

（詞・安井かずみ／曲・加藤和彦／1978年）

この歌は、最初に聴いた時に衝撃が走りました。

〈手をのばせばそこに／私の時間が広がる／ちょっと気ままで優しい／Oh Dear, Dear, today〉

大学生の女の子が自分の時間について、イキイキと前向きに歌っているって…。それをまりやさんに話したら笑われてしまったのですが。1978年当時としては革命的な歌詞だったと思います。若い女性のおしゃれで力強い前向きな歌詞に初めて出会った感じでした。歌詞にあるような〈電話してキャフェオレ〉とか〈ちょっと素足でヴェランダ〉なんてなかなか聴けないフレーズ。

夢見る少女とか、男性に従います的な女性、ファンタジーにSFの世界はあっても、

自分の時間を大切にして楽しむ女性という内容は私は聴いたことがありませんでした。男女の差別もまだまだ目立った時代でしたし、歌謡曲や演歌主体の日本の音楽界で「カッコイイ新人女性歌手が出てきた！」ということ自体が凄く新しかった。まりやさんはアイドル雑誌にもよく登場なさっていましたが、海外ホーム・ステイ経験ということもとても新鮮な響きでした。そういうバックグラウンドがあって、グラビアのファッションも見てしまったので、よりいっそう新しい〝アイドル〟時代の訪れを感じていました。

申し訳ないのですが、新人、学生、女性とあれば、イコール…〝アイドル〟と考えるのは自然な時代だったといえましょう。だから、この曲はもの凄く印象深いですし、

「戻っておいで・私の時間」

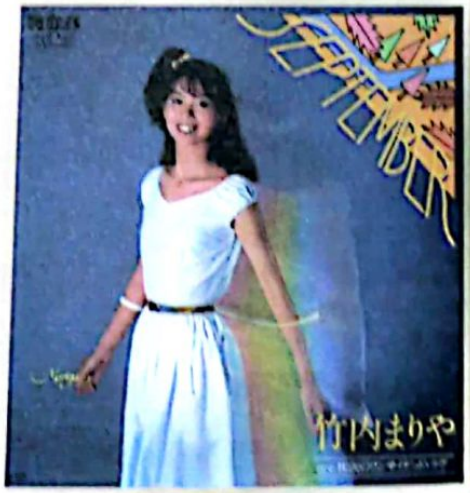
今までにいないタイプの歌手登場！でしたから、まずはこの曲ですね。

安井かずみさんもまりやさんと会って、まりやさんの海外経験を知った上で、英文の歌詞を組み込まれたのだと思います。その発音も、素晴らしかった！　若者には憧れのアメリカという時代ですから、大学生を中心にまずは、まりやさんの人気が広まっていったと私は思っています。〝シティ・ポップ〟というジャンルもなかったし、デビュー曲にして初期の〝竹内まりや〟というジャンルの最初を作った曲だと確信しています。

②「SEPTEMBER」

（詞・松本隆／曲・林哲司／1979年）

デビュー曲の次に「ドリーム・オブ・ユー〜レモンライムの青い風」があるわけですが、この「SEPTEMBER」は、当時、数多く存在したテレビ放送された音楽祭でまりやさんがもっとも多く歌った印象深い曲です。〈SEPTEMBER さよならの国〉という歌詞の部分をはじめ、この曲の歌詞に違う曲が提供されたら悲劇的、シャンソン的になってしまったかもしれません。それを林哲司さんがイントロからカッコよく作られて、まりやさんが歌ったことによって、失恋の歌の世界のアプローチが広かったと思います。失恋の歌をこのメロディーで英語で〈SEPTEMBER〉と歌って、〈さよならの国〉と歌って、これはシティ・ポップの原点かもしれません。歌謡曲ではまずない世界でした。



「SEPTEMBER」

まりやさんご自身も、「この曲は完璧！好きな部分、良い部分が全部つまっている」とラジオでもおっしゃられていましたが、曲のイメージ自体を林哲司さんと話しあわれているので、当時のまりやさんらしさが出ている曲ともいえると思います。その一方で〝芸能活動〟という本意ではないことで悩まれた時期でもあったわけですが、結果的には良いこと、好まない活動の両方があったことが現在につながっているのかもしれません。

CamScannerでスキャン

「不思議なピーチパイ」

③「不思議なピーチパイ」
（詞・安井かずみ／曲・加藤和彦／1980年）

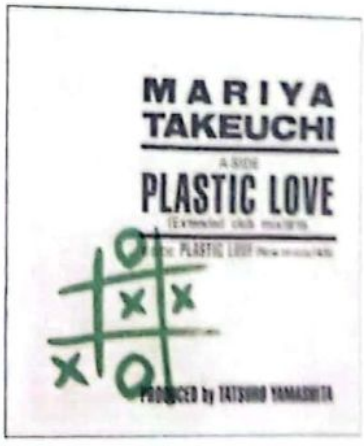
この曲こそ、まりやさんの存在を世に広めた代表曲ですし、この曲の大ヒットがキッカケで、アルバムもナンバー1になりましたから。化粧品のキャンペーン・ソングだったことはもちろんですが、安井かずみさんがまりやさんにピッタリだと思って書かれた詞と加藤和彦さんの素晴らしい曲だと思います。今でも、レコード宣伝用のポスターを飾っているぐらい私も大好き。〝ヒット曲〟って、やはり大切だな…と思います。

④「もう一度」
（詞曲・竹内まりや／1984年）

「コンサートのオープニングに歌っていただけたら嬉しいです！」と個人的リクエストをするぐらい好きです。なぜかって言ったら、84年からちょうど40年、まりやさんがやっと自由になって、解放されて、曲が書けるようになって、「PLASTIC LOVE」も同時期だけど、やっぱり印象的なのは「もう一度」なんですよね。もう一度復活するっていうまりやさんの気持ちと、達郎さんのコーラスとアレンジの素晴らしさがすごくよく出てて、絶対外せないな、って思いました。

「僕の街へ」が、1度表舞台から去る、という意味合いの歌だとしたら、こちらは、タイトルどおり戻る決心をされた気持ちがよく表われていると思います。達郎さんが一緒にコーラスやって、プロデュースしてるわけです、お互いをリスペクトし合う素晴らしいタッグですよね。アルバム自体、達郎さんがまりやさんをミュージシャンとしてより強く感じられた作品ですし、新たなスタートを飾るファンにとっても印象深い作品ですから、もちろん！「PLASTIC LOVE」もそうです。

「もう一度」



「PLASTIC LOVE」

⑤「PLASTIC LOVE」
（詞曲・竹内まりや／1984年）

こんなカッコイイ曲はないです！

まりやさんも今までにないダンサブルな曲を作ろうと取り組まれたわけですが、この曲こそがアルバム自体をまりやさんの作品だけの作品にするキッカケになった曲で、達郎さんもコンサートで歌われるのがよくわかります。

CamScannerでスキャン

今では、世界の若い方々からの支持が絶大で、それがヒットとは関係ない、素晴らしい結果だと思います。

⑥「恋の嵐」

（詞曲・竹内まりや／1986年）

河合奈保子さんに提供した「けんかをやめて」があって、結局戻っていくとハチロクの「涙のワンサイデッド・ラヴ」から「恋の嵐」につながっていく。

でも、歌詞の世界はどんどん変わっていくわけです。メロディーと歌詞は違うんですよ。

同じハチロクって言ったって、「けんかをやめて」と「涙のワンサイデッド・ラヴ」と「恋の嵐」じゃ歌詞の内容がまるで違うので、一緒にはできないんですけど、だけど〝まりや節〟っていうのは、シングルで言うと、ここがひとつだよね、って。「恋の嵐」は、まりやさんの歌詞がもう真骨頂ですね。

「恋の嵐」

⑦「駅」

（詞曲・竹内まりや／1987年）

あまり最近語られないんですけど、「駅」っていう曲は、中森明菜さんがいなければ書けなかった曲で、中森明菜さんを想像したから書けた曲なんです。実はシングル・ヒットとしては、「駅」は「シングル・アゲイン」の大ヒットへの、まりやさんの大事な布石なんです。

「けんかをやめて」の大人ヴァージョンをまりやさんが書きだすわけです。たぶん「駅」っていう歌は、10人が恋をしていたとしたら、たぶん同じぐらいの数の人がみんな共感できる歌詞なんです。別にレインコートじゃなくても何でもいいんだけど、やっぱり別れた人とどこかで出会うことってある、私が「駅」を大好きなのはそこなんです。

「駅」

自分の世界にも入っていけるし、誰でも入っていけちゃう。全部に見覚えがあって、もうストレートに胸に来るわけですよ。だから名曲でもあるし、誰もが共感できる曲は、もしかしたらこの曲が初めてぐらいじゃないかな、って思うんです。まりやさんは妄想って言ってるけど、妄想恋愛ソングがここら辺から始まっていくんです。

シチュエーションは違いますけど、「シングル・アゲイン」の大大ヒットにつながっていくんですね。まりやさん自身も、明菜さんに提供した曲があって、「火曜サスペンス劇場」につながっていくわけです。80年後半から90年代のイケイケのバブリーな時代、「もう自分たちヒロインでございます」っていう女性がいっぱいいて、まりやさんは「駅」や「シングル・アゲイン」で、自分とはかけ離れた、完全に妄想の世界に入っていく。

「駅」はセルフ・カヴァー曲だけ

CamScannerでスキャン

れど、それをはるかに上回るぐらいインパクトのある作品です。「シングル・アゲイン」に続くまりやさんの新しい世界を打ち出した素晴らしい作品です。

それを作るきっかけとなる中森明菜っていう像がなければ、「シングル・アゲイン」までつながっていかないわけです。結果論として、みんな有名な曲ばっかりなんだけど、後からまりやさんの曲が振り返って見られて、名曲だと言われるようになったんです。そのためには「シングル・アゲイン」が必要だったんですよ。ここで爆発的なヒットになるんです。

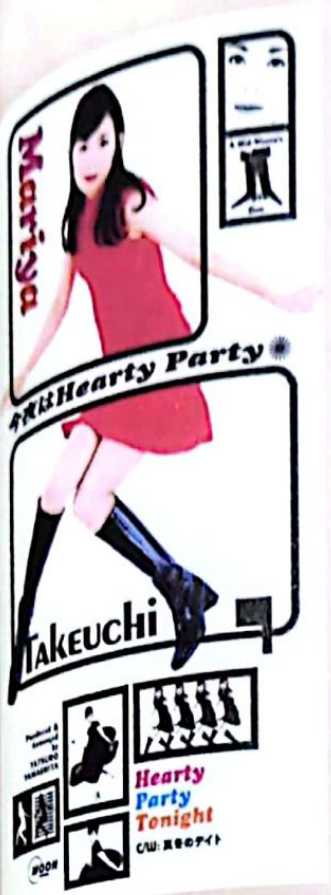
⑧「今夜はHEARTY PARTY」

（詞曲・竹内まりや／1995年）

「駅」や「シングル・アゲイン」とはまた違う、明るい曲で大好きなんです。やっぱりメリハリが利いている。これが出て嬉しかったんです、「不倫路線で行くのかな？」と思ったら、さらに平成になって自由になって。

トレンディ・ドラマが大ブームで映画でも『私をスキーに連れてって』とか『彼女が水着にきがえたら』とか、若者たちが一緒に楽しくやるっていうブームがあったんですよ。「JR SKISKI」とか、若者主役の90年代っていうのがあったんですよ。それにぴったり合ったのが、この「今夜はHEARTY PARTY」で、若者が主役。若者たちが、みんながこぞってスキーに行くのがブームになって、大学生も若い会社員もみんな行きますっていう時代にぴったりのパーティー・ソングが生まれたっていうことが嬉しかったし、良かったなって思いました。

この曲の歌詞も、悩んでいて、はっきりしない。リゲインのCM「24時間戦えますか」っていうのが、私達のサラリーマン時代の、今じゃ考えられない姿勢なんですよ。でも、「今夜はHEARTY PARTY」は、どこかに疑問を持ってる若者たちに寄り添ってる歌だと思うの。〈フラれることは覚悟していたけれど／いざお別れと言われたら 泣けてきた〉という歌詞をあのメロディーで歌うわけですよ。それに〈私の良さがわからない なんて不幸なヤツだろう〉！ これはね、私にとっては「元気を出して」より元気ソングなんですね。でも、〈ひとりきりの夜は長くて〉って、ちゃんとメリハリが利いてるんですよ。自分は素



「今夜はHEARTY PARTY」

「ノスタルジア」

「チャンスの前髪」

CamScannerでスキャン

晴らしいんだっていうことを信じて元気を出そうという歌詞が、男女のことから、広い世界に変わっている。だから「今夜はNO SLEEP, NO SLEEP」はまさに時代に合った曲だなって思いますよね。

⑨「ノスタルジア」
（詞曲・竹内まりや／2001年）

ボッサですごく好きなんです。「ノスタルジア」は大人っぽい歌で、こういう曲を出してくれることがすごく嬉しかったんです。LPの中の1曲でもいいかもしれないけど、これをシングルで出してくれるっていうところが、やっぱすごいなって思いましたね。こういう雰囲気の歌を歌われるまりやさんも素晴らしい！　洋楽でもアメリカン・ポップスだけではなく、世界中の音楽と触れあわれているまりやさんだからこそ、書ける曲ですね。

⑩「チャンスの前髪」
（詞曲・竹内まりや／2007年）

原由子さんとのコラボレーションも最高の作品です。これも背中を押してくれる元気ソングで、ここら辺から始まってるんです。これは明るい歌なんだけど、個人的には中年の心にグサッときて、〝若いやつにはわかるまい〟っていう感じの歌詞。「旅のつづき」でも〈限りあるもの〉とか、正直に言ってるんですよ。恋愛だろうが夫婦の歌だろうが、一言一言の言葉の意味を私なりに解釈しちゃうから、そこら辺のメッセージ性が最近ずっと強烈に出てきてると感じるんです。

『Precious Days』は実は前半がそうなんですよね。そういうふうに私は受け取ったんですよ。まりやさんをずっと追ってる私達の世代の成長に合わせた…って、ちょっとおこがましいんだけど、全部自分の人生も投影できるようになっているから、「SEPTEMBER」や「不思議なピーチパイ」の頃からの長いファンもついていけるというか、本当にぴったり「聴きたかったの！」っていう歌を出してくれるんですよね！

〔9月22日　編集部で〕

CamScannerでスキャン

Night Tempoインタヴュー

まりやさんの声には、歌詞、人種、言葉関係なく、響く何かがある

新作『Connection』を発表した韓国人プロデューサー／DJが語る

西澤裕郎

2016年にYouTubeで公開した竹内まりやの〈PLASTIC LOVE〉をリエディットした〈Plastic Love (Night Tempo 100% Pure Remastered)〉がヴァイラル・ヒットを生み、シティ・ポップ・ブームの火付け役となった韓国人プロデューサー兼DJ、Night Tempo。角松敏生とダフト・パンクをこよなく敬愛し、昭和のカセット・テープのコレクターでもある彼は、昭和ポップスを現代にアップデートする『昭和グルーヴ』シリーズを定期的にリリースしながらも、現在は米国と日本を中心に、ますます活動の範囲を広げている。

〝繋がり〟をテーマに80～90年代の日本、韓国、台湾、香港といった東北アジアの情景を音で表現したインスト楽曲中心の作品『Connection』をリリースしたばかりのNight Tempoに、同作のことから、竹内まりやの魅力についてまで話を訊いた。

超S級の楽器だと思います

――竹内まりやさんを特集したNHK-BSの番組で、土岐麻子さんと一緒に〈PLASTIC LOVE〉のカヴァーをされていましたよね。Night Tempoさんにとって、どんな存在の楽曲なんでしょう。

「僕自身、最初は音楽活動を趣味的な感じでやろうとしていたんです。でも、この

CamScannerでスキャン

楽曲のリミックスがネットで伸びて、いろんなところに広まり、自分の30代後半の人生がまるごと変わってしまった。すごく影響された楽曲だなと思います」

――楽曲のどういうところにいちばん魅力を感じたんでしょう。

「一言でいうと〝雰囲気〟ですよね。この楽曲がバズった理由は、多分言葉ではないと思うんです。実際に日本語がわからない海外でバズったので。まりやさんの空気感、雰囲気が8～9割を占めていると思います」

――若い人たちにとっても聴きやすいようリミックスされている部分もあると思うんですけど、どういう部分をアップデートしようと意識されたんでしょう。

「僕は、アップデートしたとは思っていなくて。この曲って教科書的な曲だと思うんですよね。その教科書の上に落書きしている感じというか。ポップ・カルチャー的なものにするつもりでやっていました。リヴァーブをかけて、サイドチェインもいっぱいかけているので、音楽的に見るとすごく破壊的なものだと思うんです。聴いて好きって言ってる人たちも、それが楽しかったんだろうし、みんなエモーショナルだと言ってくれていて。そういった部分でいちばん合致したんだと思います」

「Plastic Love (Night Tempo 100% Pure Remastered)」のYouTube (https://www.youtube.com/watch?v=ZE4Q_yIGiwM) から

――Night Tempoさんは、ヴォーカルの歌声を楽器のように捉えている部分もあると思うんですけど、まりやさんの声質はどう感じてらっしゃるんでしょう。

「超S級の楽器だと思います。最初の頃、僕は全然日本語の歌詞がわからず聴いていたんですけど、声を聴いた段階で波及力がある声質だなと感じていました」

――波及力があるっていうのは、歌の上手さとはまた違うものなんでしょうか。

「もちろん上手いと思うんですけど、響きの部分というか。すごく難しいんですけど、例えば、ユーミンさんの声って日本人にはすごく響く声だと思うんですけど、逆に海外に行くと、あまり伝わり切らないんですよね。日本国内ではみんなの心を動かす声ですけど、今のシティ・ポップの流れとして聴かれていないというか。まりやさんとか松原みきさんは、声質だけで海外でも伝わっている。そういった部分で、歌詞、人種、言葉関係なく、響く何かがあるんだと思います」

――まりやさんの楽曲の中で、個人的に好きな楽曲をほかに挙げるとしたら？

「〈夢の続き〉と、牧瀬里穂さんの歌手デビュー曲で、ご本人のセルフ・カヴァーもある〈ミラクル・ラブ〉ですね。〈PLASTIC LOVE〉と流れがけっこう似ている編曲で、その辺りの楽曲は全部好きですね」

――日本語を勉強されて、歌詞がわかるようになって感じたことはありますか。

「こんなに分かりやすい日本語で書いているんだって。日本の楽曲の歌詞って、表現を難しくするものが多いなと思っていて。僕は作詞家の中で売野雅勇先生が好きなんですけど、シンプルに書くんですよね。それがすごくかっこいい。まりやさんもすごくわかりやすい日本語で書いているのが素敵だなと思うんです。あと、ツアーでアメリカに行ったとき、面白かったのが、〈PLASTIC LOVE〉の最後に〝I'm just playing games I know that's plastic love〟って英語の歌詞があるんですけど、そこだけ大合唱が起こるんです。部分的にみんな分かるから、すごい盛り上がるんですよね」

CamScannerでスキャン

“繋がり”をテーマにした新作

――Night Tempoさんは近年、アメリカでのライヴも数多くされていますよね。

「アメリカ・ツアーで、最新アルバムに収録している〈Possession〉という曲をかけたとき、最近作ったトラックの中でいちばん盛り上がって。アルバム後半の盛り上げ曲として入れた曲だったんですけど、海外での反響がすごく大きくて意外でした」

――アメリカではどんな音楽の反応が大きいんでしょう。

「シティ・ポップの次に何が来るのかという部分でいうと、今、UKガラージが海外ですごく来ていて。BTSのジミンが出した〈Who〉に“Shibuyakei Remix”があったりもするんですけど、そこで採用されてるのもUKガラージに近くて。2ステップ・ガラージとか。僕の新作に収録している〈Hyper Experience〉も、そういったものを意識して作ってみたんです」

――最新作『Connection』は、2021年のアルバム『Concentration』の続編で、“繋がり”をテーマに作られたそうですね。

「『Concentration』は、日本で仕事をはじめたばかりの頃、日本の高度成長期に興味があって、歴史資料をいっぱい探してみたり、いろんな勉強に夢中だったので、自分が集中してるものを、ただただ全部入れてみたんです。今回は、日本で活動して5年くらいになるので、その間、知り合った方たちのことや、自分の経験したこと、過去の自分との向き合いとか考えをまとめたんです。なので、すごく個人的な作品集というか、自分日記というか。自叙伝って言うんですかね」

――過去の自分との向き合いみたいなものが、音に変換されている。

「例えば、初めてインターネットを使った時の感想とかも繋がっていて。繋がりって、いろんな意味があると思うんですけど、今回の漢字表記は“連結”を使っていて。参加していただいてるアーティストの方たちも、元々縁がある方たちにお願いしています」

――〈Hyper Experience〉にダイヤル・ネットの懐かしい音が入ってるのも、連結を表現しているのを感じました。

「初めて電話線をモデムに繋げて、青い画面にテスト画面が出た時、自分が他人と通信をしてる感動があって。そこから掲示板に文字を書いて、返信をもらったりした時の楽しさとか新鮮な経験を音にしています」

――〈New Age〉では空港の音も入っていますよね。

「あれは成田空港の音ですね」

――最終曲前に、海外と日本を接続する場所の音を入れたのには、どんな意図があったんでしょう。

「これからもっと海外の活動を中心にしていこうと思っていて。日本から出ていく場面を表わしています。日本やアジアの中だけじゃなく、もっと広い世界に旅立つっていう意味で入れました」

『Connection』
ビクター VICL66013
10月23日発売（配信中）
① Foreword ② Lil Bit (feat. Asako Toki) ③ Truth? (feat. Ami Nakazono) ④ Hyper Experience ⑤ End Point ⑥ Digital Detox ⑦ Sunset in Tokyo [Interlude] ⑧ Deep Breath (feat. Ryoko Hirosue) ⑨ Sigh ⑩ Breezy ⑪ Sweet Lies (feat. Miyu Takeuchi) ⑫ Regret ⑬ Rainforest (feat. Yoko Minamino) ⑭ Possession ⑮ New Age ⑯ 404

『Concentration』
ネオンシティ NT2101
（2021年）

CamScannerでスキャン

――旅立った後、〈404〉という曲で終わります。接続できないっていうタイトルが面白いなと思うんですけど。

「もう僕は旅立ったから、繋がらないよという(笑)」

――こちらが接続した時に、見つからないという意味なんですね。確かにすごく個人的な作品になってるなっていう意図がすごく伝わってきます。今作には広末涼子さんと南野陽子さんが参加していますが、ナレーションでの参加にされた理由は。

「最初は歌でお願いしようかなと思ったんです。ただ、演技が上手いお二人なので、そっちにフォーカスしてみたかったんです。歌で時代を感じさせるのは歌詞の部分が大きいんですけど、演技のトーンとか喋り方の癖でけっこう、時代が出るんですよね。南野さんはトレンディ・ドラマの空気感を演技していただいて、広末さんは現在お母さんの役とか、いろいろな役をやってらっしゃるんですけど、本人の青春時代の声を真似して表現してもらっています」

――土岐さんとのコライト楽曲〈Lil Bit〉は、1年以上、温めてきた曲だそうですね。

「元々は広末さんが僕のアルバムで歌う予定の曲だったんです。土岐さんは、たまに自分で仮歌を入れたものを聴いてらしたみたいなんですけど、ツアーで飛行機に乗っていた時に聴いて、すごくよかったようで、〝いつぐらい出せると思う?〟って連絡が来て。僕もちょうどオファーしようと思っていたので、運命だと思って、土岐さんに歌ってもらって入れさせてもらいました。あと、最後の曲の〈404〉を聴いた後、ちょっと待っていると、広末さんが歌ったヴァージョンもちょっとだけ入っていて。本人がすごく好きな曲って言ってくれていたので、ナレーション録りのとき歌ってもらったんです」

――〈Sigh〉は、Night Tempoさんが韓国語でラップされています。どんなことをラップされているんでしょうか。

「こういった取材でちょっと言いづらいんですけど、マスメディアについてラップしていて。何年か前までメディアは一方的に情報をコントロールしていた。例えば、テレビ局と提携してるアイドル・グループが国民的アイドルみたいな感じで何十年も伝えられているうちに、逆に日本の若者はみんなKポップを聴くようになっていた。そういったところで〝悔しい〟とか言ってるんじゃなくて、もっとレベル・アップした方がいいですよっていうことを表現してみたんです。〝弱い日本〟をあまり信じたくない人も多いじゃないですか? 実際のところ日本の文化はそんなに弱いわけではないと思うんです。ただ、海外に追従するような感覚が強いと思っていて。例えば、シティ・ポップもそうなんですけど、アメリカや欧米で盛り上がったからすごい!みたいな言い方をしている記事がいっぱいある。シティ・ポップ・ガイドとかを読んでいると、実際に海外でDJをしたり見たりしていなくて、ちゃんとした体験や経験がなく、そういう証言をしたり書いたりしているものがとても多い。そういうことに対する部分も含めてラップしています」

――実際、海外での体験をしているNight Tempoさんだからこそラップできることですね。

「現場で色々経験しているからこそ、言えることが多いと思うんです。ただネットで検索して専門家ぶるんじゃなくて、実際に目で見て体験したことを伝えたほうが、もっとカルチャーが長く生き残れるんじゃないかな、と考えていて。スイカの皮を舐めるだけじゃなく、ちゃんと中身を伝えていくことが大切なんじゃないか、と僕は思います」

〔9月24日　外苑前・フジパシフィックで〕

CamScannerでスキャン

オリジナル・アルバム・ガイド

文＝井草七海、岡村詩野、小川真一、
柴崎祐二、萩原健太、松永良平

BEGINNING

1978
RCA／RVC

当時、同時期デビューの杏里、堀川まゆみ（いずれも他社）と共にメディアにプロモーションしていたという。でも、竹内だけは全然違う、と小学生だった筆者でも感じていた。英語の流暢な現役慶應大生という触れ込み以前に、アメリカ人が日本語で歌っているように聞こえたからだ。無論、リー・リトナー、ジム・ケルトナーらも参加したLA録音（一部）、作家陣は加藤和彦、林哲司、細野晴臣、高橋幸宏、山下達郎、杉真理，は今となっては鉄板だろう（が、当時はそこはほとんど強調されていなかった記憶）。そもそもこのファースト時から既に'媚び'が

ひたすらカッコいい。日本にいながらにしてアメリカ西海岸の空気が味わえるような歌。LAあたりに絶対に留学したくなる歌。それだけで十分だったのだ。高橋／細野によるドゥーワップ調の4曲目を除くと全体的に当時のAOR〜フュージョン色が強いし、歌詞もラヴ・ソングばかりだが、何を歌っても甘くならないのはやはり声質ゆえ。本人が曲作りに直接関わっているのは10、11曲目だけだが、特に作詞作曲を自ら担当した「すてきなヒットソング」は彼女のオールディーズ指向が全開。きっとこのタイプが本来の持ち味なのだと後年気づいてから、筆者はますますまりやを好きになった。（岡村）

UNIVERSITY STREET

1979
RCA／RVC

お茶の間に届いた初ヒットはサード・シングル「SEPTEMBER」（79年）や「不思議なビーチバイ」（80年）と思われがちだが、キリンレモンのCMソングだった「ドリーム・オブ・ユー～レモンライムの青い風」のほうが半年ほど早い。デビュー・シングル「戻っておいで・私の時間」同様に加藤和彦作曲・瀬尾一三編曲できらびやかに仕上がった、いわゆる"サヴァンナ・バンド歌謡"。しかし、それはシングル・ヴァージョンの話で、本作収録のアルバム・ヴァージョンは山下達郎のアレンジによって、ぐっと落ち着いた雰囲気に。おそらく山下版のほうが普段の彼女に近いイメージなのだろう。L

特集　竹内まりや

A録音も行うなど豪華な陣容を揃えた前作に対して、実際に大学卒業から間もなかった彼女自身の立ち位置を、"大学通り"を歩いていたカジュアルな等身大に近づけるアプローチがここにはあった。

大学時代からの旧友である杉真理、ほどなく生涯のパートナーとなってゆく山下達郎。緊張を伴う職業作家ではなく、素直に話しあえる相手が作編曲にかなり関与したことで、のちの竹内まりやにつながるシンガー・ソングライター像も結果的に浮かび上がる。その最良の例が、竹内（作詞作曲）・山下（編曲）コンビによる初めての楽曲「涙のワンサイデッド・ラヴ」だ。

（松永）

LOVE SONGS

1980
RCA／RVC

78年のデビュー・アルバムから続く、初期竹内まりやのポップ路線の集大成といえる作品集。キャロル・ベイヤー・セイガー／ピーター・アレンという最上級のポップス・コンビの曲からスタートする構成が楽しい。この曲のバックにはリーランド・スカラー、ラス・カンケルのリズム・コンビが参加し、ジーン・ペイジがアレンジを担当している。

「不思議なビーチバイ」「SEPTEMBER」といった華麗なヒット曲に挟まれて目立たないが、林哲司が作曲した「象牙海岸」や、竹内まりや自身が作詞作曲を手掛けた「待っているわ」「恋の終わりに」など、佳曲が多く収められたアルバムだ。

その中でも、安部恭弘が作曲し、松本隆が詞を書いた「五線紙」は名曲だといえる。杉本喜代志のジャジーなギターとフィンガー・スナップングだけというシンプルな伴奏で歌われていくが、竹内まりやのヴォーカルとバック・コーラスとの掛け合いが素晴らしい。このコーラスには、作者の安部恭弘、ソロ・デビュー前のEPO、それにプロデューサーの宮田茂樹が加わっている。

この作品集を最後に竹内まりやは、アイドル的な路線を卒業し、本格的なシンガー・ソングライターとして再スタートをきっていくこととなる。その分岐点となったアルバムでもあるのだ。

CamScannerでスキャン

Miss M

1980
RCA／RVC

LAと東京の豪華2拠点録音体制を敷いた4作目。TOTO～エアプレイ一派が参加したA面は、当時全盛を迎えていた米西海岸のAORサウンドを、考えうる最高のクオリティで具現化したような出来栄え。もはや〝シティ・ポップス〟というドメスティックな文脈を帯びた語彙には収まりきらないスケールの大きなサウンドとなっている。冒頭の「SWEETEST MUSIC」や「EVERY NIGHT」の英語歌唱も実に堂に入ったもので、本場西海岸の空気と相まって、彼女がリンダ・ロンシュタット等の系譜を次ぐ存在として注目されていた事実を、改めて想起させてくれる。山下達郎の提供曲で、後に彼自身のアルバム『FOR YOU』でリメイクすることになる名曲「MORNING GLORY」の瑞々しさも、アルバム全体の明るいカラーを効果的に演出している。

B面も魅力いっぱいだ。特に、林哲司作曲・竹内作詞の「二人のバカンス」の多幸感ときたら。ドゥービー・ブラザーズ等、様々なリファレンスを想像しながら聴くのも楽しい、和製AORの名曲だ。戸塚修による編曲が儚くも美しい「遠く離れて」のアトモスフェリックな質感は、現代のリスニング感覚にもピッタリとハマるだろう。同曲をはじめ、竹内自身のソングライティングにもいよいよ磨きが掛ってきた。（染崎）

PORTRAIT

1981
RCA／RVC

RVC時代のラスト・アルバム。山下達郎との結婚を控え、ここから3年間の休業に入るという節目の作品でもあった。ほんの2～3年前のことなのに〝キャンバス〟も〝ピーチパイ〟も、すでにここでは過去のものになっている。時代の変化が速かったとも言えるが、竹内まりやというシンガーが、時代のアイコンではなく私自身であることを選択したがゆえの、至極真っ当な年齢の重ね方でもあると感じる。流行を追い求め、時にはキャラクターを離れた表現に固執することも必要とされる音楽の世界にあって、竹内の強くしなやかな自然体は、静かに異彩を放っていたのではないだろうか。

この作品から、彼女自身もプロデュースに名を連ねた。そしてこれまで最多の9曲を作詞（作曲は4曲）。楽曲のアレンジにもセカンド『UNIVERSITY STREET』以来の山下を起用（5曲）。全曲が自作、山下アレンジの次作『VARIETY』（84年）まではまだ2年半あるが、アン・ルイスに提供した「リンダ」のセルフ・カヴァーなど、楽曲によってはすでにプレ『VARIETY』と言ってもおかしくない雰囲気をしっかり纏う。それは同時に彼女を育んだデビュー以来のプロダクションへの別れのあいさつでもあり、この瞬間を記録した〝ポートレート〟というタイトルは言い得て妙だ。（松永）

CamScannerでスキャン

VARIETY

1984
ムーン／ワーナー

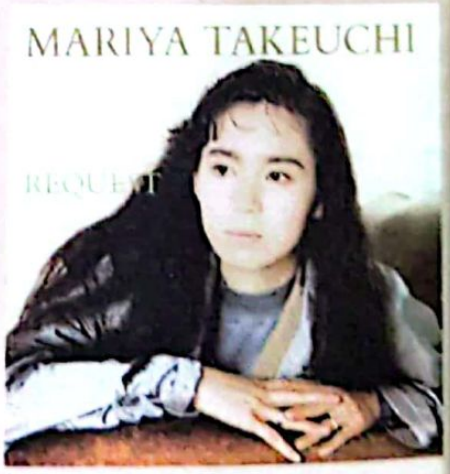
ネット・ミームで世界的バズとなった「PLASTIC LOVE」が収録されていることでシティ・ポップに数えられることが多い竹内だが、それは違うと正直思う。ほか5、7曲目などそれっぽい曲もあるが、この人は…少なくとも本作は、日本版オールディーズ・ポップの大傑作だ。冒頭から山下達郎のコーラスが炸裂する「もう一度」は彼女のそんな本来の嗜好の集大成的な1曲で、山下による愛情溢れるウォール・オブ・サウンド。〝もう一度〟を〝Once more〟ではなく〝Let's try again〟と解釈するポジティヴな歌詞が彼女の原点を鮮やかに伝える。その点で、荘厳なパイプ・オルガンによる結婚行進曲を導入とするドゥーワップの3曲目、ビーチ・ボーイズへの愛が感じられる10曲目（いずれも坂本龍一が参加）、フィル・スペクター風の6曲目、ビートルズへの思慕が込められた8曲目など、ティーンエイジャーの思い出に対するオマージュとも思える曲の方が輝きを放つ。結婚、休業によって心のゆとりと充実を取り戻した彼女が全曲作詞作曲に挑み、自身の音楽ルーツに立ち返らせたことは一目瞭然。まだ山下と作業していなかったデビュー当時との連続性は確実にある、音楽的ブレのなさを知らしめた重要作。セーラー・カラーが初々しい女子高生のようなジャケットもその点で象徴的だ。（岡村）

REQUEST

1987
ムーン／ワーナー

冒頭の「夢の嵐」で聴けるシンセサイザーの3連符。このオープニングだけでも、1987年の空気がふんわり香ってくる。デジタル・テクノロジーの急激な進化と、多忙な育児生活の交点で3年ぶりに制作されたのが本作だが、その実、書き下ろし曲は少なく、他歌手への提供曲や映画等のテーマ・ソングのセルフ・リメイクがほとんどを占めている。だからといって急造の感があるかといえば全くそんなことはなく、巧みなプログラミングを交えた山下達郎の編曲を得て、見事、1枚のオリジナル・アルバムとして高いクオリティを誇る傑作となった。「PLASTIC LOVE」の路線を受け継ぎながら大幅にサウンドをアップ・デートしたデジタル・ブギー・チューン「夢の続き」を筆頭に、80代リヴァイヴァルが浸透して久しい昨今の感覚から最も興味深く聴きことができるのが、ずばり本作かもしれない。

一方で、一瞬の安らぎを提供する「元気を出して」の人肌感・清涼感もひときわ目立っている。山下とオリジナル歌唱者の薬師丸ひろ子を迎えた多重コーラスが聴けるコーダは、まさに絶品。プロのソングライターとしての確かな実績を経て発表された作品だけに、全編に確かな作家的な個性が刻まれているのがわかる。ライフ／ワーク・バランス型ポップスの先駆けにして金字塔だ。（柴崎）



CamScannerでスキャン

Quiet Life

1992
ムーン/ワーナー

フル・アルバムとしては5年ぶり。とはいえ、全12曲中、87年以降のシングル曲が8曲という半ベスト盤的な1枚だったこともあり、ごぶさた感はあまりなかったような記憶も。もちろん基本的に全曲、竹内まりやが作詞/作曲、山下達郎が編曲/プロデュースだが、唯一「ザ・クリスマス・ソング」だけメル・トーメ作、服部克久編曲。そんなスタンダードのカヴァーあり、アイドルへの提供曲の自演あり、ジャングリーなフォーク・ロックあり、サザン・ロックあり、カントリー・ワルツあり、サンシャイン・ポップあり、3連バラードあり、A&M調あり、フレンチ・ポップあり。竹内まりやならではの幅広い音楽性の下、歌詞では結婚後の女性が日常の中で経験していくのであろう、夫婦の倦怠期、不倫、元カレとの再会など様々なドラマが描かれる。シンガー・ソングライターが年齢を重ねる中、いかなる形でストーリーテラーとして成長していけばいいのか。そんなテーマに対する彼女なりの試行錯誤の記録だった。個人的には「AFTER YEARS」の山下達郎のアコースティック・ギターの指弾きに「過ぎ去りし日々」が重なったり、「幸せの探し方」のフランス語歌詞の部分を寺尾次郎が手がけていたり。シュガー・ベイブの面影がいくつかほんのりと感じられて、ちょびっと沁みたっけ。(萩原)

Bon Appetit!

2001
ムーン/ワーナー

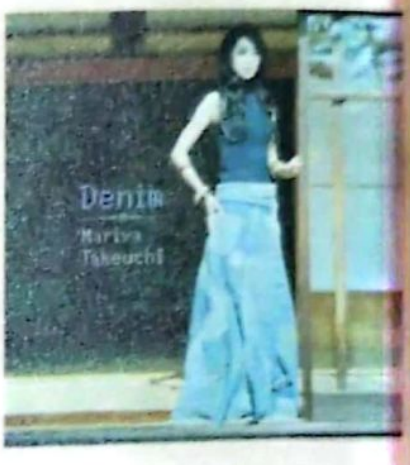
1995年から2001年までの怒涛の代表曲の数々を収めた大ヒット盤。与えられたお題を元にしたタイアップ曲がほとんどを占める本作では特に竹内のシンガー・ソングライター性と職業作家性とが見事にクロスし、ライヴ活動をセーブしていた90年代を通じて磨かれたであろう、職業としての作詞曲を自身に適応させたような趣きだ。竹内らしい旋律の多幸感、加えてドゥーワップ、ニューオーリンズ・ジャズ、ユーロ・ビート等々、山下達郎による外国製ポップス風のアレンジもヴァラエティ豊かで耳に楽しい。同時にこれらがオマージュとしては比較的直球なのも特筆できる点で、その気負わなさもヒットの要因だったのかも。当時小学校低学年だった筆者にとっては、無機質なデジタル・ビートから弦楽やホーンも取り入れた贅沢なスタジオ・ワークまで、サウンドの振り幅も改めて今聴くと新鮮に感じる。

詞作にもその真骨頂が発揮され、現実には中々あり得なさそうなロマンスを描きながら情景描写と独白で共感を喚起し、聴き手自身の人生をも(現実はどうあれ)ドラマのように感じさせてしまう。タイアップにはうってつけだし、80年代の夢の続きを見るかのようだが、リリースは同時多発テロ直前。無垢なエスケピズムに浸れた時代の最後のサウンドトラックのような1枚だ。(井草)

CamScannerでスキャン

Denim

2007
ムーン／ワーナー



アルバム・タイトルは、収録曲の「人生の扉」の一節からとられている。年齢を重ねるほど味わいを増していくものの象徴として〝デニム〟という言葉が選ばれているのだ。このような歌を竹内まりやが歌うようになったことに、驚きを感じると同時に感銘を受けた。「不思議なピーチパイ」での溌剌とした笑顔から、すでに27年の月日が経っているのだ。

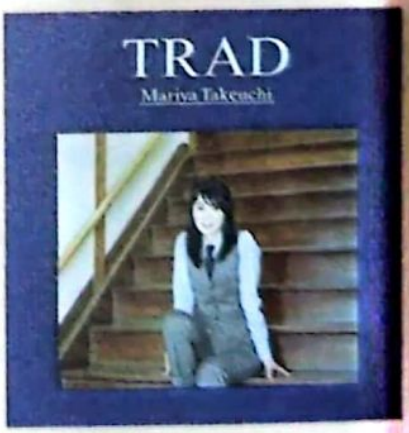
「返信」もまた過去を慈しんでいるような歌だといえる。人生のターニング・ポイントを堂々と受け止め、そしてそれを余裕で楽しむ。そんな姿が、アルバムのジャケットにも表われているように思えてならない。

このような人生の機微を感じさせてくれる曲だけではなく、久しぶりにセンチメンタル・シティ・ロマンスと共演した「シンクロニシティ（素敵な偶然）」のような快活な歌や、杉真理、松尾清憲らのピカデリー・サーカスをカヴァーした「Never Cry Butterfly」など、ヴァラエティーに富んでいる。

「みんなひとり」は松たか子が主演したTVドラマ「役者魂！」の主題歌。ドラマでは松自身が歌っていたのだが、そのセルフ・カヴァーとなる。同じメロディーでありながらも、まるで歌の表情が異なっているのが興味深い。人と人との繋がりが濃厚で、その中に人生の重みのようなものを感じさせる。（小川）

TRAD

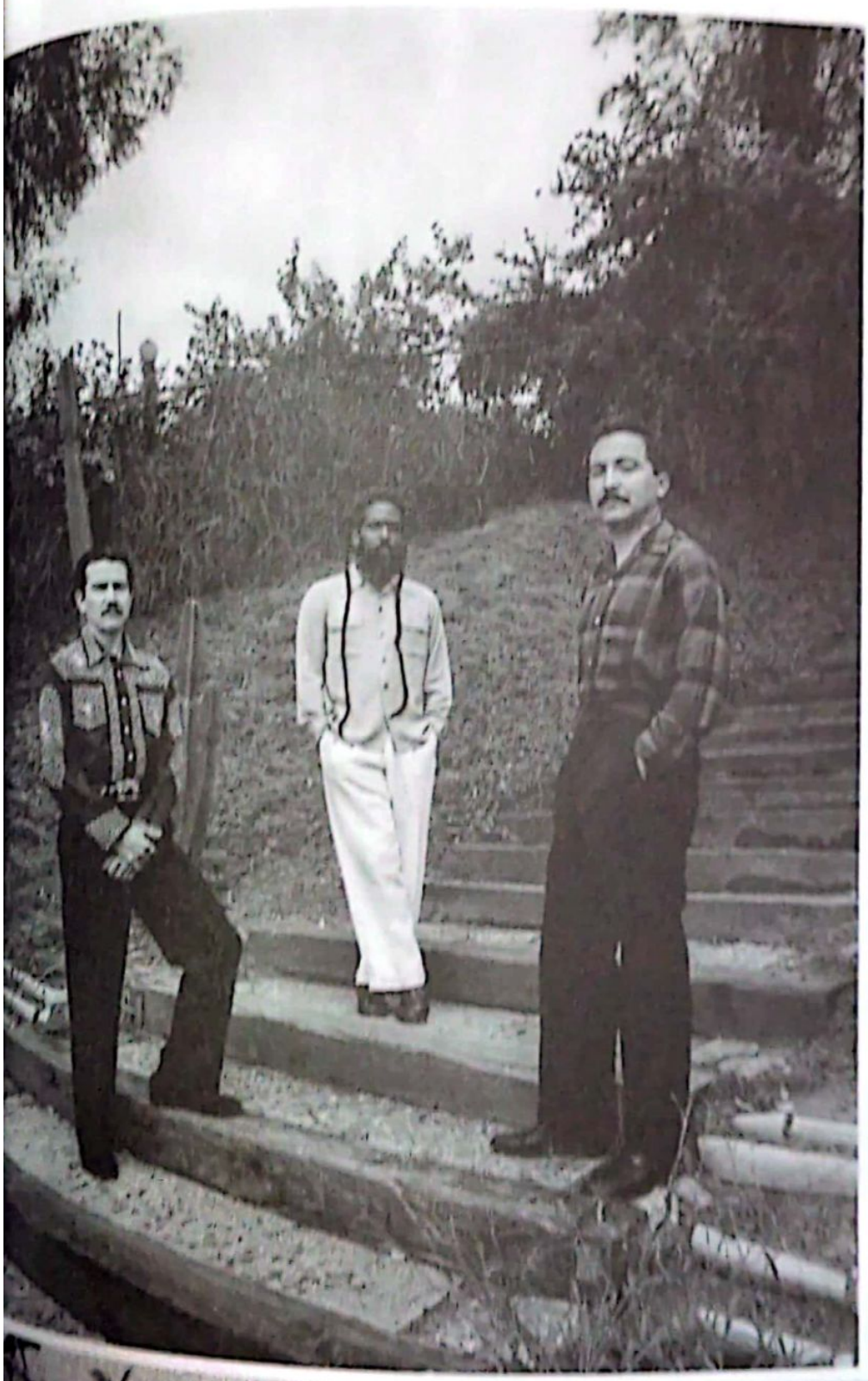
2014
ムーン／ワーナー



毎度のように、これまた久々のリリースとなったオリジナル・アルバム。前作から7年ぶりのリリースだった。が、もちろんこれまた毎度のように全15曲中シングルや配信での既出曲が11曲。半ベスト盤的な1枚ではあった。音楽的にもいつも通り素敵にヴァラエティ豊か。今作で特に目立った〝幅〟としては、作詞に伊集院静を、編曲に服部克久をそれぞれ迎えた「最後のタンゴ」か。これまで「火曜サスペンス劇場」の主題歌などで展開していたヨーロピアン哀愁路線の発展形ということだろう。さらに杉真理が作詞作曲したBOXとの共演ナンバーがあったり、やはり杉が作曲したウイスキーのCMソングがあったり。大学時代からの旧友とのコラボレーション色も強かった。恒例、他シンガーへの提供曲の自演ヴァージョンは高畑充希への提供曲「夏のモンタージュ」と、松田聖子への「特別な恋人」。特に後者は、まりやと聖子、80年前後の日本のシーンをポップに賑わしてくれたアイドルふたりが青春の日々を振り返る作品で。なんだかしみじみさせられたものだ。ここでの作者ヴァージョンの山下達郎によるスウィート・ソウル系コーラスも泣けた。が、個人的には「輝く女性（ひと）よ！」のような真っ向からのアダルト・コンテンポラリー路線に、やはり安定して胸がときめいた。（萩原）

CamScannerでスキャン

特集 ヴィンテージ・ソウルの現在地



ここ数年、レトロなソウル・サウンドを鳴らすバンド、グループが米カリフォルニアのチカーノ・コミュニティを中心に注目を集めている。その勢いはヨーロッパやアジアにも波及し、次世代のプレイヤーたちによるムーヴメントを築きつつある。サンディエゴの3人組、セイクリッド・ソウルズの新作を機に、このヴィンテージな音世界を覗いてみたい。

セイクリッド・ソウルズ

CamScannerでスキャン

ヴィンテージな質感へのこだわり

現代のミュージシャンやリスナーを惹きつける独自性はどこにあるのか

高橋健太郎

"Thee"がつくグループたち

何十年も前からだが、たまに古いロックステディや同時期のシカゴ・ソウルやフィリー・ソウルばかり聴いて過ごす日がある。仕事に関係なく、ただ好きな音楽をぼんやり聴きたい時。ああ、これさえあればいい、もう新しい音楽なんて要らない。僕の場合、そういう気持ちになるのは、何よりもそのへんの音楽だったりする。

ところが、最近はニュー・リリースの音源の中に、60年代後半のそのへんの音楽と親和する、というより、これはリイシューなのか、それとも新譜なのか、聴き分けがつかないようなものが増えてきた。ヌメロ・グループあたりが発掘した60年代のレア音源かと思いきや、現代のティーンエイジャーのグループだったり。60年代のR&B～ソウルのリヴァイヴァルというだけならば、80年代以後、様々な形で起こってきたが、昨今のそれはヴィンテージな質感へのこだわりが半端ない。ゆえに、60年代の音源と並べても、何の違和感もなく聴けてしまったりする。

2022年にデビュー・アルバムを発表したセイクリッド・ソウルズ（Thee Sacred Souls）もそんな流れを象徴するグループのひとつだ。この小特集が発案されたのも10月はじめにその新作が出るというニュースがあったからだが、面白いことに、彼らのセカンド・アルバムを待つ間に、同じくアタマに"Thee"をつけたグループのデビュー・アルバムが相次いで出ていた。シンシアーズ（Thee Sinseers）、ハート・トーンズ（Thee Heart Tones）、マーローズ（Thee Marloes）。あるいはイリュージョンズ（Thee Illusions）など、シングルの枚数を重ね、アルバム・デビュー直前と思われるグループもいる。いずれもヴィンテージなR&Bやソウルへの志向を持つことからして、これらは偶然の動きには思えない。

"Thee"というのは古英語で、"Thou"（あなた）の目的格だそうだが、バンド名

Thee Midniters
"Thee Midniters"
[1965]
シンシアーズの最新作（後掲のガイドに掲載）はこのジャケットをオマージュしたもの

シンシアーズ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ロックステディ期のジャマイカでアルトン・エリスやホーテンス・エリスがカヴァー。以後、ジャマイカでは数多くの歌手に歌い継がれた。80年代にフレディ・マクレガーがジャマイカ版のラヴァーズ・ロックとして歌ったのも強い印象を残す。

'Sitting In The Park' は明らかにアメリカ本国よりもジャマイカで深く愛された曲だと思われるが、実はチカーノもそれに感応していた。60年代にはサニー&ザ・サンライナーズがカヴァーしている。80年代にはチカーノが好むR&Bを集めたコンピレーション・シリーズの 'East Side Story' にビリー・スチュワートのオリジナルが収録され、人気が再燃したとされる。

'Sitting In The Park' は1965年の時点では極めて斬新なフォームを持ったソウル・ヒットだった。メジャー7thのコード感を強調したメロウな曲だったからだ。それをカヴァーしたサニー&ザ・サンライナーズは1966年にアーチー・ベル&ザ・ドレルズのデビュー曲 'She's My Woman, She's My Girl' のバックを務めているが、これもメジャー7thのコード感を強調した曲で、翌年のアーチー・ベルの大ヒット 'Tighten Up' の伏線にもなっている。

Billy Steweart
'Sittig In The Park'
[1965]

ジャマイカンや在米メキシカンはビリー・スチュワートの 'Sitting In The Park' の中にあったメジャー7thのコード感、そのとろけるようなメロウ・ムードにいちはやく感応した。60年代にはそれは違う地域での独立した動きだったと思われるが、80年代以後のリイシューによって情報交換も進み、現在ではチカーノ・ソウル的な価値観の中に、同質のスウィートネスを持つ60年代ジャマイカのロックステディへのシンパシーが内包されている。そんな構図があるように思われる。

録音物としての質感

ところで、最初にも述べたように、セイクリッド・ソウルズに代表されるようなチカーノ・ソウル的な価値観に重きを置いたグループは、録音物のヴィンテージな質感に強いこだわりを示す。逆からいえば、現代のR&Bやヒップホップに聴かれるような低音成分やコンプ感は排除していることが多い。この特集のセレクションにあたっては、そこでひとつの線を引いた。レトロ・ソウル的な音楽をやっていても、ローエンドの作りは現代的、というようなアーティストのものは選ばなかった。

本誌の2022年3月号で松永良平さんのセレクションによる「インディーズ・ソウル」という特集があったが、そこで選ばれていたメイヤー・ホーソーンやヴァルフペックのようなアーティストは、今回は基準の外である。ローエンドを現代的にするか、それとも古い7インチ盤のようなサウンドにするかというのは、レーベルやプロデューサーにとっても判断の別れ目のようで、ビッグ・クラウンのようなレーベル内でも傾向が二分されている。レディ・レイなどは同レーベルでも、今回のセレクションの基準からは外れた。チカーノ・ラップやローライダー的な音楽は、マーケット的にヒップホップとも親和するローエンドを必要とする。だが、スウィート&メロウなチカーノ・ソウル的な音楽を徹底追求するならば、そういう現代性あるいは折衷性は無用という棲み分けがハッキリしてきたようだ。

そのあたりのサウンドの質感でひとつの線を引いた上で、音楽性や地域性については幅を広げて、米国産ロックステディやブ

CamScannerでスキャン

ーガルー～ラテン・ソウル的なもの、UKのソウル・アーティストやブラック・キーズのダン・オーバック制作のシンガー・ソングライター作品なども含めた24枚を今回は選んでみた。しかし、音を聴いただけでは、地域性は把握しづらいかもしれない。ビッグ・クラウン所属のボビー・オローサはフィンランドのアーティストだし、セクストーンズは米ネヴァダ州のバンドだがリリースはイタリアのレコード・キックスからだし、MRCYはUKのデュオだがリリースは米インディアナ州のデッド・オーシャンズからだったりする。ちなみに、選んだ中で最もローエンドの作りが現代的なのはMRCYで、ぎりぎりの判断の別れ目に位置している。

録音物のヴィンテージな質感にこだわるとなると、そこではスタジオ環境やエンジニアリングの技術が問われる。ゆえに、レーベルやプロデューサーを中心にシーンが描かれるという傾向はありそうだ。ハート・トーンズは米カリフォルニア州のティーンエイジャー・グループだが、チカーノ・ソウルの伝統に沿いつつ、甘酸っぱいポップ・ソングをものにしたデビュー・アルバムの完成度は、ビッグ・クラウンの援助があればこそだろう。メンバーの現代っ子ぶりが覗くMVを観ると、え、こんな子達がっとそこでまた胸切なくなったりする。

MRCY

先述のいくつかのレーベルに加えては、ダップトーン（とサブ・レーベルのペンローズ）、マンゴ・ヒル、ブラックバードなどが重要レーベルに数えられる。しかし、個々の作品にはアーティストの意思が強く映し出されているとも思う。昨今はDAW上のプラグイン・ソフトウェアで、ヴィンテージっぽいサウンドを作ることも容易になっているが、この種の音楽のスウィートネスを支えるのは人間的な要素である。例えば、セイクリッド・ソウルズが頭一つ抜けた存在感を放つのは、リズム・セクションのアレックス・ガルシアとサル・サマノ、とりわけサマノのベースの歌心に負うところが大きい。古めかしい音楽をやっているのに、フレッシュな魅力を放つのは、楽器の鳴りや演奏の歌心が今を生きる人間を感じさせるからかもしれない。

ハート・トーンズ

かなり条件を絞ったセレクションのはずだが、聴き込んでいくと、地域も出自も世代も異なる多様な個人、その固有の物語が浮かび上がってくる。リアルタイムでそんなソウル・ミュージックが生み出されていることに僕はワクワクしているし。この小特集でそれが読者にも伝わることを願っている。

CamScannerでスキャン

ヴィンテージ・ソウルの現在地を知るための作品24選

選・文=高橋健太郎
文=河地依子、島晃一、鈴木孝弥、林剛、渡辺亨

Jr. Thomas & The Volcanos
Rockstone

2018
Colemine

ミネソタのジャマイカン・オールディーズ狂と、カリフォルニアのジャマイカン・ヴィンテージ音楽の演奏家たちとの麗しき邂逅。それが世界のレゲエ通を瞠目させた15年の“Beware”に結実し、本作は同趣向の続編となる。まさにロックステディや初期レゲエの完全再現。細密に模倣され、熟成を経た演奏イディオムと、60年代ジャマイカ製のオリジナル盤を聴いているような音質の充実感は、畏怖心さえ抱かせる高純度のオタク魂の賜物。このオハイオのコールマインのようなヴィンテージ・ソウル指向のレーベルは、往々にしてこの手のソウルフルなジャマイカ音楽も守備範囲にしている。（鈴木）

Durand Jones & The Indications
Private Space

2021
Dead Oceans

スペイン語版も作られた19年の「クルージン・トゥ・ザ・パーク」のヒットで、70年代前半までのチカーノ・ソウル、スウィート・ソウルのリヴァイヴァルを象徴するバンドという印象が強かったが、ディスコティックなジャケットが示す通り、このアルバムでは70年中盤から後半までを参照し、これまでのイメージを大きく変えている。ボビー・コールドウェルを彷彿させる1曲目を含めたメロウな楽曲だけでなく、アップ・テンポなフィリー・ソウルの6曲目や9曲目など、そのどれもが高水準だ。ファルセットが心地よく、どこかモダンに感じさせる2曲目のディスコも素晴らしい。（島）

Jackie Mendez & Joey Quiñones
Tell It To Me

*シングル
2022
Blackbird / Second Hand

ジャッキー・メンデスはブラックバード、ソラ、エンジェル・シティといったレーベルからEPやシングルを十数枚発表しているLA出身の女性シンガー。ロス・イエスタデイズのアルバムでもゲスト・シンガーとして歌っている。メイン・インフルエンスはバンク、スカ、ロックステディということで、2022年にはジョーイ・キニョーネスとのデュオで2枚のシングルをリリース。これが米国産ロックステディの最高峰とも言えるゴキゲンな録音だった。リズムやコーラスの組みがこのうえなく絶妙。ジャマイカ音楽の影響がチカーノの文化の中に深く根付いていることも窺わせる。（高橋）

Mamas Gun
Cure The Jones

2022
Légère

エリカ・バドゥの00年作に由来する名前を冠したUKのバンドは、この最新作でソウル・ミュージックに最接近。ヤング・ガン・シルヴァー・フォックスとしても活動するアンディ・ブラッツのAOR感覚とともに70年代ソウルへの憧憬をストレートに打ち出し、管弦を使ってモダンでポップに仕上げた曲が品よく並ぶ。マーヴィン・ゲイやアル・グリーンといったリファレンスも明快で、ファルセットに近いアンディの声が美しく響くドゥーワップ風のスウィートなバラードなど、チカーノ～ロウライダーのコミュニティで愛されそうなヴィンテージ・ソウルはコールマインなどの諸作と同質だ。（林）

CamScannerでスキャン

Bobby Oroza feat. Cold Diamond & Mink
Get On The Otherside

2022
Big Crown

フィンランドのヘルシンキ出身で米LAのチカーノ・ソウル・シーンにコミットするシンガー／ソングライターの2作目。地元の気鋭レーベルであるティミオンの専属スタジオ・バンド、コールド・ダイアモンド&ミンクを従え、サイケなフィルターを通してスウィートな歌世界を展開するヴィンテージ作法は19年のファーストの延長線上にある。が、コロナ禍における苦悩と向き合いながら書いたという曲には前作にも増して哀愁が漂い、図らずもチカーノ・ソウル的なサッドネスを際立たせる結果となった。甘くやるせない主役の歌が切なくも美しい。同郷のジミ・テナーもゲストとして参加。（林）

Jason Joshua
La Voz De Oro

2023
Mango Hill

ジョー・バターンの再来、は過言だとしても、実に魅力的なラテン・ソウル歌手＝ジェイスン・ジョシュア、その愛称〝黄金の声〟を冠した2作目。60年代ファニア・レコーズに抱く憧憬に、70年代前期ニュー・ソウルやブラックスプロイテイション映画への愛がたっぷり溶け込んでいる。それら都会性のブレンドは純粋に懐古趣味的だが、過度の洗練を厳しく制御するかのような、クールさと〝もっさり〟感の絶妙な狭間に抗い難い愛着を抱かせる。そこに本拠地マイアミの強い陽光と、その日陰の如き濃密なダーク・サイドも共存。新奇な独自性も孕みつつスパングリッシュ文化をエモく綴り返す。（鈴木）

Jonny Benavidez And Cold Diamond & Mink
My Echo Shadow And Me

2023
Daptone

ジョニー・ベナヴィテスはテキサス生まれ、カリフォルニア育ちのR&B歌手。だが、本作はフィンランドのコールド・ダイアモンド&ミンクのプロデュースで、彼らは曲作りや演奏にも関わっている。ドゥーワップやスウィート・ソウル系グループのように、本作にはファルセットを生かしたヴォーカルにコーラスが絡む曲がある。と同時に、ラテン・ソウル調の曲もあるので、ドゥーワップ風味のチカーノ・ソウルと言っておこう。また、テキサス出身のアーチー・ベル&ザ・ドレルズが、60年代後期に放ったヒット曲のようなギター・カッティングやベース、ホーンズが聞こえてくる曲もある。（渡辺）

Jalen Ngonda
Come Around And Love Me

2023
Daptone

ヴィンテージ・ソウル復興の震源地、NYダップトーン・レコーズが、この10年で最も優れたソウル歌手とも評されるジェイレン・ンゴンダを迎えて制作した彼の初作。必然的に新世代による現行ヴィンテージ・ソウルを象徴する、もしかすると（レーベル専属演奏家陣の隅々まで心憎い仕事も含め）最良の一作。〝You Don't Want My Love〟をラジオで耳にした際の衝撃たるや…。ハイ・トーンの声もジェイレンという名前も中性的で、曲調は正統R&Bポップだけに、歌からほとばしる鮮度の高さ、感度の鋭さが対比的に際立っていた。超越的存在感とでも呼ぶべきまばゆさを感じさせた。（鈴木）

The Sextones
Love Can't Be Borrowed

2023
Record Kicks

ネバダ州で結成されたバンドの6年ぶりとなる2作目。日本盤もリリースされた前作では、タワー・オブ・パワーの系譜に連なるバンドとして紹介され、疾走感のあるファンクが目立っていた。本作は、プロデュースを担当したモノフォニックスのケニー・フィニガンの存在が大きいのか、シカゴをはじめ、フィリーやニュージャージーなど、60年後半から70年前半までの各地域のソウルへの憧憬がうかがえる。デルフォニックスやモーメンツを思わせるスウィート・ソウルはもちろん、カーティス・メイフィールド「フレディの死」の影響を強く感じさせるファンキーな7曲目にも注目したい。（鳥）

CamScannerでスキャン

Britti
Hello, I'm Britti

2024
Easy Eye

ブリッティはルイジアナの州都に生まれ、大学卒業後は約10年間楽器店で働きつつ、音楽の世界を夢見ていた。そんな彼女が投稿した動画を見て手を差し伸べたのが、ザ・ブラック・キーズのダン・オーバック。彼はこのナッシュヴィル録音のデビュー作に全面的に関わっている。ここには、セカンド・ラインの要素を用いた、ニューオーリンズへのオマージュもある。ただし、ブリッティの頭の片隅には、常にダスティ・スプリングフィールドの名作『ダスティ・イン・メンフィス』があるというだけに、総体的には垢抜けた現代サザン・ソウルといった趣。スティール・ギターが一つのキーだ。（渡辺）

Liam Bailey
Zero Grace

2024
Big Crown

ジャマイカ系の父親を持つUKシンガー。母親が好んだボブ・マーリー、スプリームス、ビートルズ、ジミ・ヘンドリックスなどを聴いて育ったという背景がよくわかる内容で、レゲエ、ソウル、ロックを軸とした曲が混在する中に、ポップさやサイケ色も備える。哀愁の塊のようなザラ声によるレゲエ流儀の力強い歌の印象が強すぎて、最初は現代版ルーツ・ロック・レゲエでは？と思ったが、モータウン・サウンドやサム・クックの〝Wonderful World〟の一節、バーニー・ウォーレルみたいなシンセ演奏を取り入れたりもしており、なるほどヴィンテージ・ソウルたる所以は確かにある。（河地）

Thee Illusions
Fairytale

*シングル
2024
Blackbird

イリュージョンズはイーストLA出身のチカーノ・グループで、ジョーイ・キニョーネスが2010年代にやっていたデルリアンズのメンバーなども含むという。2021年からアタラ・フィリップスというアフリカンの女性シンガーをフロントに立てて、以後、ブラックバードなどにシングルを数枚残している。バーバラ・メイソンあたりのフィリー・ソウルを思い起こさせるスウィートな曲が多い。男性陣はコーラスしながら演奏し、ライヴ・パフォーマンスにも定評があるようだ。遠くないうちに、フル・アルバムが登場しそうな〝Thee〟の付くグループの一つである。（高橋）

Thee Sinseers
Sinseerly Yours

2024
Colemine

バリオに根差した〝ソウルディーズ〟をイーストLAから届ける、ジョーイ・キニョーネス率いるチカーノ・ソウル・バンド。自前スタジオで録音したコールマインからの初フル・アルバムは、ドゥーワップや60'sソウルをベースに、ロックステディ的なムードも漂わせながらスウィートな歌世界を繰り広げる。エイドリアーナ・フロレスが歌う初期バーバラ・メイソン風の可憐なバラードから、スタックスのマーキーズを思わせるバーティ感覚のファンキー・インストまで、着想源を言い当てたくなるがオリジナリティを感じさせる快曲揃い。ジャケはミッドナイターズの65年作へのオマージュ。（林）

Pale Jay & The Ironsides
In Limbo

*シングル
2024
Colemine

赤覆面の〝青さめたジェイ〟。元々はジャズ・シンガー／ピアニストだそうだが、スタイリスティックスばりのファルセットで情緒豊かに幅広い曲調を歌う人で、これは今年中に発売予定の次作の先行シングルとのこと。昨年はジ・インディケイションズの面々とコラボしていたが、今回は米西海岸ベイエリアの3兄弟、アイアンサイズとのコラボで、13年からシングルを出してきた同グループが昨年発表したデビュー作（インスト集）に収録された美麗スロー〝Lost Dream〟のリメイクだ。優美なストリングスが特徴の映像を喚起する作風は両者に通じ、抜群の相性で美麗さにも拍車がかかる。（河地）

CamScannerでスキャン

MRCY
Volume I

2024
Dead Oceans

プロデューサーのバーニー・リスター（オリヴィア・デイーン、ジョイ・クルックス）と歌手コジョ・デグラフト＝ジョンスンからなるUKの話題のユニット、マーシーの初アルバム。マーヴィン・ゲイ、スティーヴィ・ワンダー、ドニー・ハサウェイらのヴォーカル・トラックを使ったフューチャリスティックなリミックスといった質感。器用に歌い分ける美声、詩的で映像性の高い歌詞、ヴィンテージ・ソウルの音色。それらと、その種の音楽の定石からかけ離れた効果音が交錯し、時空を超えた次元に誘われる。通常のソウル・ミュージックに潜く感覚をすり抜け、未開発の領域に触れる快感。（鈴木）

Jon Muq
Flying Away

2024
Easy Eye

ジョン・ミュークはウガンダ出身。93年生まれだが、十代で「ウィー・アー・ザ・ワールド」のCDを手にするまで、西欧音楽を聴いたこともなかったという。ギターを手に歌い始めたのも18歳以後。ゆえに、彼自身には古いR&Bやソウルのバックグラウンドはない。しかし、テキサス州オースティンに辿り着き、ダン・オーバックとともに作り上げたアルバムからは、極めて自然体のソウル・フィーリングが溢れ出る。その控えめさや慎ましさに、これは一体いつの音楽だ？と思ったりもする。狙ってもいないのにヴィンテージな香りがする。そんな奇跡が聴けるアルバムだ。（高橋）

Los Yesterdays
Frozen In Time

2024
Now-Again

ロス・イエスタデイズは、ドラマーのゲイブリエル・ロウランドと、ヴォーカルのヴィクター・ベネヴィデスによるLAのデュオ。二人は一緒に曲も作る。本作にはメキシコ音楽の要素を含むスウィート・ソウル調もあれば、手拍子やコーラスが絡む軽快なラテン・ソウル調もあり、いかにもチカーノ・ソウルらしい。もっとも、このデュオはリトル・アンソニー&ジ・インペリアルズにも影響を受けているというだけに、ヴィブラフォン入りのロマンチックなバラードもあって、ジャケット写真が喚起する妄想をよりかき立てる。この点も含めて、けっこう粋なヴィンテージ・ソウル系デュオだ。（渡辺）

Aaron Frazer
Into The Blue

2024
Dead Oceans

ジ・インディケイションズのドラマーで、デュラン・ジョーンズとともにファルセットで双頭リードも張る。さらにはマルチ・プレイヤーで音楽的嗜好も幅広いので、グループからはみ出す部分をソロ名義で発揮。これは20年の初ソロ作に続くセカンドで、長年の恋人と別れてブルックリンからLAに移住した経緯から生まれた作品とのこと。共同プロデュースには、ヒップホップの仕事が多いが60年代モータウンのホランド＝ドジャー＝ホランドも敬愛するLAのアレックス・グースを迎え、現代的な手法と感性が活きた懐古的な作りの中に、そこはかとない寂しさと繊細な感しが共存している。（河地）

Thee Marloes
Perak

2024
Big Crown

インドネシアの首都ジャカルタの郊外では毎年大規模なジャズ・フェスが開催されているし、モーション・ブルー・ジャカルタもある。が、この女性シンガーを中心とするトリオは、ジャカルタではなく、インドネシア第2の都市、スラバヤで結成された。しかもこれは、米国のリオン・マイケルズが主宰するレーベルからの世界デビュー作だ。英語曲が8曲、インドネシア語曲が4曲。特に後者においては、クルアンビンにも通じるギター・サウンドやチープな音色のキーボード類が、よりヴィンテージぽさを醸し出している。空気感もよりまろやかで、メロウな演奏の独自のタメにも惹かれる。（渡辺）

CamScannerでスキャン

The Harlem Gospel Travelers
Rhapsody

2024
Colemine

イーライ・ペーパーボーイ・リードによる非営利プログラムのゴスペル・クラスから生まれたハーレムのヴォーカル・トリオの3作目で、前2作同様イーライのプロデュース。ゴスペルなのでまずは迫力ある歌声が耳を引くが、リードがファルセットだとカーティス・メイフィールドのような慈愛が満ちる側面も。本作はドラムスのフレーズや音色、サイケ色のあるギターのファズとエコーの掛け具合や女性コーラスなども含めてヴィンテージ感満載。初期ファンカデリック的なファンク・ロックも多いが、スピナーズ、スレイヴ、ビル・ウィザースなどの有名曲へのオマージュも随所にあってオツ。(河地)

Thee Heart Tones
Forever & Ever

2024
Big Crown

ビッグ・クラウンから今年リリースされた、LA出身の非常に若い6人組バンドによるデビュー作。ほぼ全編にわたってスウィートなチカーノ・ソウルが並ぶ。なかでも1曲目、甘く切ない歌声が際立つラテン風味のソウルは見事だ。極め付きはボレロの名曲「サボール・ア・ミ」。イーストLA出身のエル・チカーノによる71年版含め、様々なカヴァーが存在するが、ここではよりスウィートに仕上げている。ジャンルや年代を広げ越境するヴィンテージ・ソウル、ファンクも魅力的だが、それとは異なる仕方で、伝統に向き合い、真正面からチカーノ・ソウルを深化させる本作には驚かされる。(島)

Johnny Ruiz & The Escapers
Nobody Else

*シングル
2024
Parkside

ラス・ヴェイガス出身歌手ジョニー・ルイーズ率いるバンド、エスケイパーズは、ドリーミーなコーラス曲を演ったかと思えば、キビキビとラテン・ソウルを聴かせ、しかしレバートリーの中心はレゲエ／ロックステディ。かのジャマイカのダブ・マスター、サイエンティストにぶっ飛んだダブ・ミックスを注文するほどの好事家集団だが、ジャンル横断的というより、むしろチカーノ・ソウルらしい雑食感を示す。このシングルは純正ラヴァーズ・ロックで、ソリッドなワン・ドロップに、頼りなげなコーネル・キャンベルのようなルイーズの〝正しく下手〟な歌が、妖しげな酩酊感を醸している。(鈴木)

Thee Sacred Souls
Got A Story To Tell

2024
Penrose

ダップトーン系列のペンローズから20年代に入ってデビューしたサンディエゴのトリオ。再びボスコ・マンが援護した2年ぶりのセカンドも、60〜70's ソウルの秘宝に出会ったようなオリジナル曲を甘い歌い口のリードとハーモニーで披露し、レトロなソウル・ワールドへと誘う。傷心をテーマにしたスロウな曲におけるスウィートかつグリッティな質感はロックステディからの影響も色濃く、60's ガール・グループの煌めきも併せ持つ。〝ごみ上げ系〟なるフリー・ソウルの常套句を用いたくなるアップ〝Live For You〟は、バリオの風景を連想させながら90年代の渋谷界隈も思い出させる。(林)

Kelly Finnigan
Be Your Own Shelter

*シングル
2024
Colemine

LA出身で名手＝マイク・フィニガンを父に持つ81年生まれで、モノフォニックスのフロントマン。それ以前にデストゥルメンツとしてヒップホップ由来の音楽をやっていた彼は、60〜70年代初期のソウルをディグ感覚で掘り起こし、ソロ作にもそのムードを反映させていた。この10月に発表する5年ぶりのソロ2作目〝A Lover Was Born〟の先行シングルも同様のアプローチによるオリジナルのミディアム・スロウ。同じく先行曲の〝Love (Your Pain Goes Deep)〟は、先日他界したメイズのフランキー・ビヴァリーがバトラーズ時代に出したノーザン・ソウル古典(67年)のカヴァーだ。(林)

CamScannerでスキャン

ニュー・スタンダード

New Standards 2020s

いま注目されるシーンに至る歴史的な流れを現在の視点から辿るディスク・ガイド

第58回

メロウ・ローファイ

選＝高橋アフィ

マインドデザイン（写真＝Eric Coleman）

現在の音楽を語る上で〝ローファイ（Lo-Fi）〟を無視することは出来ないだろう。インディ／宅録的手法からインターネット的な質感、さらにはローファイ・ヒップホップやローファイ・ハウスといったジャンル名にまで、かつてないほどローファイは音楽シーンに定着した。と同時に、Hi-Fi＝High Fidelity（高忠実度、高再現性）の対義語としての意味から拡張され、よりポジティヴかつ積極的なものにもなっている。極端な話、現代においてローファイな音楽とはロー（Low）というより、あえて質感を変化させて作り込んだ〝上質な〟音楽と言えるかもしれない。

そもそも〝ローファイ〟とはなにか。非常にざっくりではあるがローファイの歴史をまず見ていこう。なお寡聞にして先行資料がほぼなく、主観的視点が入っていることご容赦いただきたい。

最初に〝ハイファイ〟から見るのがわかりやすいだろう。レコードなどの再生において、ノイズやひずみが少ない〝原音に忠実な再現〟が求められた。その際、およそ1950年代に登場したのがハイファイという指標だ。つまり演奏をそのままクリアに記録した原音を、忠実に鳴らすことがハイファイであった。ノイズが少ないCDの登場以降はあまり使われない単語だが、〝良い録音／再生＝原音／演

CamScannerでスキャン

奏に忠実〟という見方は今も続くものだろう。その対義語として、録音環境が悪いことを示す〝ローファイ〟があった。意図せずに／なんらかの事情で発生した〝悪い〟録音、演奏を忠実に収録できなかったものを指し示す言葉としてローファイは使われ、ネガティヴな要素として扱われていた。

しかし80年代のリッチで派手な音作りへの反動か、アンダーグラウンドの隆盛か、あるいはCDの普及か、80年代後半からグランジを筆頭に〝ハイファイではない音〟が注目を浴びる（その中心の一つであるアルビニ・サウンドはむしろ演奏に忠実で、真っ当にハイファイなのはさておき）。そしてベックやペイヴメントといった90年代ローファイ・ムーヴメントのアーティストたちが登場する。そこでローファイは初めて積極的な要素として、音を異質に聞こえさせるものとして扱われた。

その後ローファイという単語自体は一時的に影を潜めるが、ハイファイを積極的に志向しない、広義のローファイな音楽性は様々な場所で見ることが出来る。ポスト・プロダクションの発展や、ヴィンテージな機材／録音手法の再評価、宅録環境／DAWの発展などにより、非ハイファイな音楽が多数出現した。一例としてネオ・ソウル勢やマッドリブのレコード愛溢れる制作が挙げられる。彼らは最新の音ではなく、往年の作品のようなノイズ混じりの質感を志向した。また宅録的方向ではウォッシュト・アウトやトロ・イ・モアなどのチルウェイヴもここに加えてもよいかもしれない。

そして10年代に入り、非ハイファイな音楽性は再び〝ローファイ〟として様々な方向性で拡張され、花開く。またピープルズ・ポテンシャル・アンリミテッド（PPU）やミュージック・フロム・メモリーといった過去の音源を現代的視点で再評価するリイシュー・レーベルが台頭し、当時の質感やノイズも音楽的要素として解釈したことも重要だ。10年代中頃にはローファイ・ヒップホップなど、〝ローファイ〟と名付けられたジャンルが登場、単語としても再び急速に広まっていく。

駆け足ではあるが、ローファイの歴史を見てきた。近年はロックやヒップホップ、DJカルチャーなど様々な場所での録音の質感への志向性がローファイとして交錯しており、正直、風呂敷を広げすぎたようにも思う。そこで選盤は、現在のローファイの最大の特徴の一つである〝メロウ〟な音楽に絞った。ざらついた質感の中に心地よさを見出す感覚こそモダンなローファイ観なのではないか。メロウな方向性へと進むローファイの特徴を大まかに三つまとめたので、参考にしてほしい。

一つ目が〝親しみ〟としてのローファイだ。宅録系、インディ系で多く見られる特徴で、録音の素朴さやそっけなさ、密室感をローファイでメロウなものとして捉えている。リイシュー作にもこの特徴がよく見られ、特にプライヴェート盤はまさに〝親しい人にだけ聞かせるもの〟という距離感の近さを、現代からローファイな音像として楽しんでいる。

二つ目が〝エフェクト〟としてのローファイだ。サイケ、またチルウェイヴもこの特徴が多い。演奏の忠実な録音であるハイファイとは真逆の、加工的な音像としてのローファイである。エフェクトがかかる／かかっているように聞こえることで、音が幻想的だったり異世界のような質感となっている。またサン・ラの録音環境の悪さを積極的なものとして捉え、エフェクティヴな方向として聞くことも近年増えたように感じる。実際、自ら先導して多数の録音を残しており、あながちこの聞き方こそ正しいかもしれない。さらにダブもここに入れてもよいはずだ。

三つ目が〝郷愁〟としてのローファイだ。ヴェイパーウェイヴ、ローファイ・ヒップホップ／ハウスもこれだろう。過去の音源の録音環境の悪さを積極的に取り込み、あるいは〝録音環境が悪いかのような音〟を入れることで、懐かしくメロウなものとしてローファイさを楽しむ。ローファイな音質そのものに着目しているという意味では、これこそ先端のローファイ・ミュージックかもしれない。（高橋）

CamScannerでスキャン

Sly & The Family Stone
There's A Riot Goin' On

1971
Epic

前作'Stand!'(69年)、そしてウッドストック・フェスティヴァル出演でアメリカの希望を体現したはずなのに、2年後に届いたのはリズム・キング・マーク2を駆使したモコモコしてダウナーな宅録ファンク。しかし、この異色作は全米ナンバー・ワンを記録した。そして半世紀以上経過して、この混沌が耳に優しいことに驚く。いま鳴って欲しい音が耳元にスッとやって来る。社会の騒音に翻弄されるのではなく、耳を澄まして感覚を鋭敏にするときだと知らせる。'Luv N' Haight'冒頭のコーラスは「私」ではなく「I(俺)」だ。時代の分岐点は本当にそこにある。（松永）

Lee "Scratch" Perry & The Upsetters
Return Of The Super Ape

1978
Lion Of Judah

根城たるブラック・アーク・スタジオの焼失直前に制作されたアルバムで、リー・ペリー特有のくぐもったレゲエ／ダブ・サウンドの中間到達点というべき傑作。より著名な前作に比べると未整理の感も否めないが、ペリーの幅広い関心が所狭しと開陳されたような内容で、濃度の高さという点で言えばこちらに軍配を上げたくなる。ソウル〜ファンク調の曲が多いのも特徴で、そのいびつなポップ・センスはまさに唯一無二。本特集の視点から推したいのは、爽やかなハーモニーを聴かせるインスト曲'Crab Yars'だ。メロウネスが際立つほど、同時にドープさもいや増すという不思議な構図。（柴崎）

Sun Ra And His Myth Science Arkestra
Disco 3000

1978
El Saturn

本作はサン・ラのディスコグラフィーの中でも特に実験的な部類ものであり、なおかつ数少ない少人数編成での一作で、とりわけローファイなマシン・ビートが前に出た作品と呼べるだろう。なかでも'Dance Of The Cosmo Aliens'はテクノの時代の到来を予見していたかのようだ。また、本作は実験的だからこそ、シンプルなメロディーやフレーズがメロウに聞こえる瞬間に溢れている。26分を超える長大で曲がりくねったタイトル・トラックからは、サン・ラ作品に触れたことのある人なら馴染みのある'Space is the place'という言葉がカオスを切り裂く光のように瞬く。（高久）

Laraaji
Vision Songs, Vol.1

1984
Laraaji

ニューエイジ・ミュージック界の巨人ララージは、ブライアン・イーノによる"発見"以前にはフュージョン・バンドで鍵盤を弾いていた経歴を持つ人であり、そのスケールの大きな表現の奥底には、常に仄かなメロウネスが秘められている。自主制作カセット・テープとして発表した本作では、カシオ・トーンによる簡素な音色と自身の歌声を中心に、実に個性的なローファイ・ゴスペル・ポップを奏でている。そのサウンドは、ほとんど現代のLAインディー・ポップのごときもので、84年録音だとはにわかに信じがたい。特定の時代性を端から超越した、スピリチュアルにして洒脱な一作だ。（柴崎）

New Standards 2020s

Beck
Odelay

1996
DGC / Bong Load

ベックのコラージュ・ヒップホップ・サウンドに遍在する傷や汚れが生み出すのは、絶妙な脱力感だ。ダスト・ブラザーズのプロデュースを受けたメジャーとしては2枚目となる本作は、その雑食ぶりだけでなく、そんな気の抜けた感覚が90年代なかばの空気感と合致し、時代の音を体現してみせた。いまでこそ〝チル〟という言葉でいい感じに受け取られるが、「ルーザー」のヒットが記憶に新しい時期のベックにとって、これはメインストリームの（商品としての）洗練や力強さに対する逃避行為でもあったはずだ。飄々としたオルタナティヴ。それにはユルい音が絶対に欠かせなかった。（木津）

Theo Parrish
First Floor

1998
Peacefrog

米デトロイトのサウス・サイドで育った偉大なDJ兼プロデューサー、セオ・パリッシュのファースト・アルバムは、ブラック・エレクトロニック・ダンス・ミュージックの先進性をいまだにリスナーに思い出させてくる。ミニマルに、でもファンキーに、彼のサンプリングとプログラミングの手つきは鮮烈だ。まるで目の前で優れたプロデューサーが埋もれたレコードの美しい瞬間を切り取り、同時に優れたDJがミキサーのつまみを操作しているかのよう。全体にローファイな質感はあるが、埃まみれというより、瑞々しく、ときおり甘く、フューチャリスティックだ。（高久）

D'angelo
Voodoo

2000
Virgin / Cheeba

90年代後半～00年代前半にネオ・ソウルの多数の名作を残した、クエストラヴやJディラらが参加するコレクティヴであるソウルクエリアンズ。彼らの特徴として、アナログ録音へのこだわり、ヨレた演奏などが挙げられるが、本特集としては作品の〝密室感〟に注目したい。エンタメ色が強く派手でリッチな音像が多かったそれまでのR&Bやヒップホップに対し、彼らは内省的な質感をドープでメロウなものとして追求した。その一つの完成型が本作だ。ヒップホップ経由のくぐもったソウルは、その後、現代ジャズやビートダウンをはじめ多数のフォロワーを生み出した。（高橋）

Yesterdays New Quintet
Angels Without Edges

2001
Stones Throw

カジモト然り、マッドリブが大胆な発想でリスナーの期待を斜め上に超えていくのはご存知の通り。本作もそうした試みの一つで、クレジットされているメンバー名は基本的に偽名。イエスタデイズ・ニュー・クインテットはマッドリブによる架空のジャズ・バンド。つまりそれがコンセプトだ。実際に生演奏とサンプリングを掛け合わせて繰り広げられる、擬似的なジャズ・セッション。このローファイな質感は、そんなセッションにまるで地下のジャズ・クラブで演奏を聴いているかのような生々しさを与えている。至るところから聞こえるメロウなフレーズによって聴き心地に安心感もある。（高久）

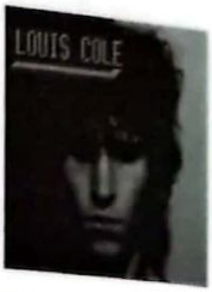
CamScannerでスキャン

Nujabes
Modal Soul

2005
ハイドアウト

10年代半ば以降、ローファイ・ヒップホップの盛り上がりなどをきっかけに再度注目を浴びたヌジャベスの作品だが、チルなムードのウワモノのループに落ち着いたドラムを掛け合わせたような、いわゆるローファイ・ヒップホップの枠に収まっていないことはこのセカンドでも確認できる。「Misic is mine」のくぐもった、それでいて忙しないドラム、「The Sign」のアンビエントとつんのめったリズムの交錯など、ここには豊かな音楽的アイディアが詰め込まれている。そして、だからこそ「Reflection Eternal」等のわかりやすく叙情的な甘く切ないフレーズが輝きを放っているのだ。（高久）

Louis Cole
Album 2



2011
Louis Cole

近年はオーケストラと共にスペクタクルなファンク・ショーを展開しているルイス・コール、そのキャリア初期はDIYスピリット溢れる自己完結型のスーパー・ドラマー／マルチ奏者として注目されていた。数ある手札の中から、このアルバムで彼が誘ったのは、深いコーラスとホール・リヴァーブの谷。否応なく浮かぶのは、ブライアン・ウィルソンの影。完成したのは、彼のディスコグラフィ史上、最もインティメイトな作品。フライング・ロータス率いるブレインフィーダーに所属し、彼が世界中のミュージシャンから多大なる御愛を受けるのは、その数年後のお話。（しろ）

Badbadnotgood
BBNG2

2012
Badbadnotgood

まず、同年にロバート・グラスパー『ブラック・レディオ』とカリーム・リギンス『アローン・トゥギャザー』が発表されていたことを申し添えておきたい。そういったクロスオーヴァーの潮流を、このバンドは様々なスタイルの〝歪み〟を招き入れることで掴んだ。例えば1曲目をアール・スウェットシャツのオリジナルと聞き比べると、ダーティーなシンセサイザーの音色が忠実にバンドへ落とし込まれていることが分かるだろう。ジェイムス・ブレイクやマイ・ブラッディ・ヴァレンタインなど、原曲に潜在している粗っぽい熱を孕んだ箇所を捉えるセンスの良さが本作からは垣間見える。（しろ）

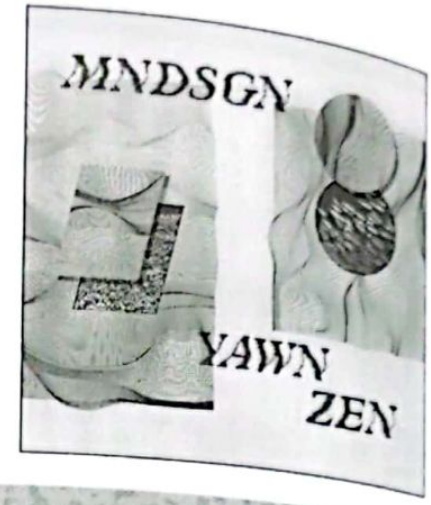
Dwight Sykes
Songs Volume 1

2013
People Potential Unlimited

米ミシシッピ生まれミシガン育ちのセミプロ・ミュージシャン、ドワイト・サイクスが、80年代に4チャンネルのMTRを駆使して録音した音源を、名門PPUが発掘リリースしたもの。簡素なシンセサイザーとドラム・マシンを主軸に、同時期のブラック・コンテンポラリー・ミュージックやエレクトロ・ファンクを彷彿させる楽曲が奏でられる。その響きは、ローファイさもさることながらあまりに親密で〝ひとり〟の感覚に満ち満ちている。かといって、〝適当さ〟は皆無。まるで、日々の大切な手仕事を行うように曲を紡ぐ。ある意味、これほどまで〝丁寧〟な音楽はそうない。感動的。（柴崎）

CamScannerでスキャン

Mndsgn
Yawn Zen
2014
Stones Throw



オウム真理教のフィリピン支部に所属した家族の元で育ち（後に脱会）、兄の影響で90年代のヒップホップにのめり込み、10代でビートメイクを始めたという、LAを拠点とするプロデューサーのマインドデザインは、ヒップホップ的サンプリングの美学とエレクトロニックな要素を混ぜ合わせたサウンドでもって、数多の〝いい感じ〟のビート音楽を凌駕した。力強いドラム、温かな光に包まれたヴォーカル、まどろみを誘うシンセ。その音は大抵がメロウで心地よく、アーティスト名や作品名に表れているように、幽玄で、ときに深くサイケデリックだ。

彼は当時のインタヴューでどんな音楽を作っていると思うのかと尋ねられ、こう答えている。「ダーティーな、どちらかと言えばダーティーなソウルのヴァイブスのあるものかな」。その言葉通り、LAの名門ストーンズ・スロウからのデビュー作である本作で、私たちは陶酔感の中で無意識に〝汚れ〟と出会っている。のっそりと響くドラムが印象的な〝Sheets〟を聴いてみて欲しい。そんなドラムに、加工を施された彼自身のヴォーカルに、あるいはドリーミーな感覚すら覚えるシンセに注目すれば、チープともさえ言いたくなるようなローファイな質感が複雑なテクスチャーの一部として全体のムードを支えていることがわかるだろう。〝ローファイ〟であることと音楽の豊かさの繋がりを指摘する傑作だ。（高久）

Tame Impala
Currents
2015
Modular

特筆すべきは、やはりドラム・サウンドだろう。1stならリンゴ・スター、2ndならジョン・ボーナム、そして本作はデイヴ・グロール…といったように、作品ごとに特定のドラマーを参照元とし、その演奏家が叩き出す音色やフレーズ、タイム感などを徹底的に解析。さらに自身の手元でそれを再現して血肉化することが、テーム・インパラ＝ケヴィン・パーカーの創作における出発点なのだ。先達から継承したサウンドをDAWに取り込み、緻密なエディットを施すことによって、2010年代以降のロック・ミュージックに再びアクチュアリティをもたらした重要作。（渡辺）

Sasac
Future Disc
2016
Fasaan

ヴェイパーウェイヴの特徴の一つとして、特定の時代を〝今ではない過去〟と扱い異質化させることが挙げられるだろう。80's的意匠は、実際は現在と繋がるものでもあるが、遥か遠いものとして扱われた。本作はその特徴が強く現れた作品だろう。コーラスが深くかかったギターのカッティングやリズム・マシンの強い音色など、どれもかつて聞いたことがある80'sらしいサウンドだ。しかし音数を抑えたアレンジゆえか、どれも奇妙で幻惑的な印象となっている。聞き馴染んだ音が一転してチープでローファイなものに聞こえて面白い。年代特有のロマンチックさを渋く聞かせる怪作だ。（高橋）

CamScannerでスキャン

Vulfpeck
The Beautiful Game

2016
Vulf

米ミシガン出身のミニマル・ファンク・バンド＝ヴルフペックが愛されるのは、その高いプレイヤビリティにもかかわらず、運営やヴィジュアル制作においてつねにDIY感覚を持ち併せているからだろう。それはサウンドにも言えることで、ラフさや飾らなさが基調にあり、オールドスクールなファンクの親しみやすさを素朴に醸し出している。彼らのスタイルはレトロなテレビ番組に出演していたバンドの生演奏をモデルにしているそうだが、異なるテイクをミックスしないという録音は自然発生的なグルーヴを尊重し、人間臭さを感じさせる。ユーモアとしてのサーファイ志向である。（木津）

Kiefer
Kickinit Alone

2017
Leaving

ジャズとヒップホップに橋を架けるLAのキーボーディスト兼プロデューサーのデビュー作は、全体に煙たく温かなヒスノイズを纏っている。これはノイズを（不可抗力ではなく）作家の意図に応じて取捨選択するようになった現代において、明確な意思表明と呼べるだろう。つまり、音楽の歴史に繋がり、埃まみれのレコードから未来を紡ごうという意思を感じるのだ。また、'Most Beautiful Girl' のピアノの繊細なニュアンスの操作なども目を見張るポイントだ。本作はBGMとしても極上のムードを生むはずだが、集中して聴くとその美しさが細部からきていることに気がつくはず。（高久）

Salami Rose Joe Louis
Zlaty Sauce Nephew

2017
Hot Record Société

米サンディエゴ出身のプロデューサーで、次作からブレインフィーダー所属に。本作はその前日譚にあたる作品だが、その次作同様に特徴的なのが、サン・ラにも通じるようなスペイシーな音選びだ。ヘナヘナとヨレたアナログ感たっぷりの温かなシンセが意味深でセンシュアルな歌声と溶け合うサウンドは、ローファイ・ベッドルーム・ポップ的ではあると同時に、どこか神秘的かつ瞑想的でもある。ジャズをベースに、ソフトでファンキーなビート・メイク、短いミックスを畳み掛けるような構成にはヒップホップ～ニュー・ジャズ的な感性も。フライング・ロータスに見出されたのも納得。（井草）

Khruangbin
Con Todo El Mundo

2018
Night Times Stories

蜃気楼のように揺らめくリヴァーブ、ギターのブルージーな倦怠感、ドライながら余白のあるドラム、究極にシンプルなベースの音色とその絶妙な揺らぎ。とにかくグルーヴィーなのに質感自体は一貫した〝ぬるい〟トーンでまとめられ、後半に向かってテンポ・ダウンしながらメロウさを深めていくあたりに本作のプロデュースも担うフロント二人によるDJ的なセンスが冴え渡る。タイ・ファンクやイラン革命以前のイランのポップス等がオマージュされているが、エキゾ～モンド・ミュージックというよりも、編集感覚を伴ったミニマル・メロウ・ファンクの極北として聴きたい。（井草）

CamScannerでスキャン

New 2020s Standards

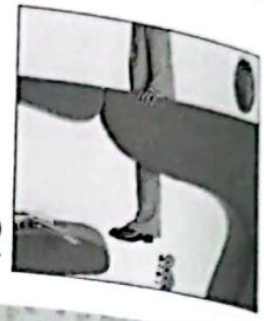
Tirzah
Devotion

2018
Domino

"献身"と冠されたこのデビュー作の中で、声によって型取られるメロディとプロウとヴォイス・サンプルが今日のポップスにおいては同じ地平に存在しているということを、ティルザは一筆書きで証明した。彼女と同様にロンドンのアンダーグラウンド・シーンで活躍するミカチューことミカ・レヴィをアルバムの共同プロデュースに招いた本作。音数は極限まで絞り込まれ、硬質なループが続く挑戦的な一枚だ。トミカを口に含んで転がしているような、その無邪気で向こう見ずなエティッシュさは、作品に宿る敬虔な愛のメッセージを増幅させている。

(しろ)

Steve Lacy
Apollo XXI

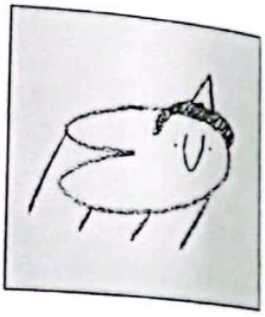


2019
3qtr

ギターとiPhone6だけですべてを賄う天才少年として脚光を浴びたスティーヴ・レイシーが、満を持して発表した1stアルバム。さすがにiPhone以外の機材も導入されたが、録音は"Steve Lacy's Demo"(17年)同様にすべて自宅で行なわれている。リズム・マシンのループに直列で録ったギターが重なる音像は、あまりにも簡素。それ故にヴォーカルとギターのこまやかなニュアンスが際立ち、これを機に時代はレイシーの声とギターをますます渇望するようになった。ベースの存在感が希薄なところは、プリンス『アラウンド・ザ・ワールド・イン・ア・デイ』も連想させる。

(渡辺)

Men I Trust
Oncle Jazz



2019
Men I Trust

ローファイ・ポップとも形容されるカナダのケベック出身の3人組による3作目。アンニュイでハスキーなエマ・プルークスの歌声もあってドリーム・ポップとも近接しており、酩酊感を醸す柔らかく曖昧なシンセがゆるくファンク・テイストを持つたギターやベースにかぶさり、半醒半睡のグルーヴを演出する。本作は24曲入り70分超えの大作だが、アンサンブルのフォルムがくっきりしていないために、浮遊感とともにただ快楽的な時間が過ぎていくばかり。このしっとりとしたメロウネスは、解像度の高くないサウンドが人間の心地よさにフィットするケースがあることを証明している。

(木津)

Sault
7

2019
Forever Living Orignal

パーカッションが軽快に鳴るヒップホップ、ファンク、レトロ・ソウル、ポスト・パンクの混在。いまでこそプロデューサーのインフローを中心とした覆面ユニットだと知られているソーだが、その匿名性によって何よりもアンダーグラウンドとの回路を確保する。それは粗さを残す録音においても同様で、ざらついた音の質感自体が時代や地域の感覚を攪乱し、いつ、どこで、誰が作ったものか判然としないミステリアスさを発生させている。全編に漂うメランコリックな感覚は、だから、ストリートを行き来する無名の人びとが抱くものとして鳴らされる。暗がりから聞こえる武骨な音。

(木津)

CamScannerでスキャン

El Michels Affair
Adult Themes

The Zenmenn
Enter The Zenmenn

2021
Music From Memory

Lionmilk Quartet
O.T.S.

2021
Preference

CamScannerでスキャン

Domi & JD Beck
Not Tight

2022
Blue Note

鍵盤奏者とドラマーのデュオのデビュー作。だが彼らが有名になったのは18年ころから始めたSNSでの演奏動画だ。自宅での練習風景をスマホのカメラで撮ったようなラフな映像で、ドラムをガムテープやトイレットペーパーなどで強くミュートするなど、音色もか細くローファイ。しかしその音色の情報量の少なさを逆手に取り、異様な手数を詰め込みながらも速すぎにならない、超絶技巧かつメロウという新たな演奏を提示し瞬く間に話題となった。本作もその延長線上にあり、音色自体はタイトで地味ながら、だからこそ一人の弾けるようなテクニックが映き心地よくまとまっている。（高橋）

Charles Stepney
Step On Step

2022
International Anthem

シカゴ・ソウル～ジャズ界の名アレンジャー、チャールズ・ステップニーが、60年代末から70年代半ばにかけて自宅スタジオで録りためていたデモ・トラックを、半世紀を経て発掘&コンパイルしたアルバム。エレピやリズム・ボックスを駆使したインスト・ソウル集というべき内容だが、何よりも、温かで、穏やかで、柔らかなヒューマニティ溢れるメロウネスが素晴らしい。他方で、鬼才アレンジャーらしい異端的な曲構成／楽器使いも散見され、その音響構築のセンスは、後の各種ビート・ミュージックやポスト・ロック等を先取りするようなところも。密室と宇宙を直結させる音楽だ。（荻崎）

Pedro Martins
Rádio Mistério

2023
Heartcore

ブラジル出身、現在はLAを拠点に活動するギタリストが前作『Vol.』（19年）に続き、美しいハイトーン・ヴォイスを響かせた一作。ミルトン・ナシメント&ロー・ボルジェス『街角クラブ』からアントニオ・ロウレイロまで続くミナス特有の浮遊感をレトロな音像で包み込み、タイトルの通り摩訶不思議なラジオ番組のような仕上がりに。サンダーキャットをはじめとした西海岸のトップ・プレイヤーが参加している点からも、ペドロの音楽的な懐の深さが感じられる。エリック・クラプトンやカート・ローゼンウィンケルと繰り広げられる、トップ・ギタリスト同士の“競”演も聞きどころ。（しろ）

DJ Harrison
Shades Of Yesterday

2024
Stones Throw

アルバムに先駆けてドナルド・フェイゲン「I.G.Y.」の完コピとも言える宅録カヴァーが発表された時点ですでに少なからず話題になっていたが、博識DJならではのお遊びでは？という見方もあった。しかし、フル・アルバムがリリースされ、なんとゲイリー・ウィルソンから始まる選曲と構成に、本気としか言いようのない愛情を感じた。作りかけのプラモデルのような不完全さやくすんだ色合いは、思い出や愛情の持つ曖昧さが、自分が手にした技術でクリアになってしまわないように引いた一線であるかのようにも感じる。AIではなく人間だから表現できるちょっとピンボケの愛だ。（松永）

CamScannerでスキャン

ALBUM PICKUP

アルバム・ピックアップ

A
あがた森魚→171
Nusrat Fateh Ali Khan & Party→163
Amyl And The Sniffers→153
Laurie Anderson→148
浅井健一→170

B
Badbadnotgood→146
Bialystocks→173
Blackstarkids→160

C
Cō shu Nie→174
cero→171
Manu Chao→155
CRYSTAL→173

D
Dalum→164
でんぱ組.inc→169

E
Noga Erez→155
Etran De L'aïr→163

F
Fleur→154
Fred Again..→156
Future→160

G
Gacharic Spin→169
Tord Gustavsen Trio→159

H
Tigran Hamasyan→157
ハナレグミ→170
The Hard Quartet→149
Roy Hargrove→158
Thee Heart Tones→147
秘密のコペカチータ→167
Christian Lee Hutson→152

J
Jónsi→154
Japandroids→152
Maria João & André Mehmari→162
Samara Joy→158

K
カジヒデキ→172
Ryan Keberle & Catharsis→157
小西康陽→172
黒岩あすか→176

L
John Legend→161
The Linda Lindas→151
LL Cool J→161
Nick Lowe, Los Straightjackets→153

M
Michelle→150
Thurston Moore→148
Moskitoo→176
Mount Eerie→149
Mustafa→147

N
Night Tempo→164

O
王舟→165

P
Perfume→168
Katy Perry→151

R
Rei→167

S
柴田聡子→174
渋さ知らズ→165

T
竹内まりや→166

U
Underworld→156

V
Marcos Valle→162

W
Immanuel Wilkins→159

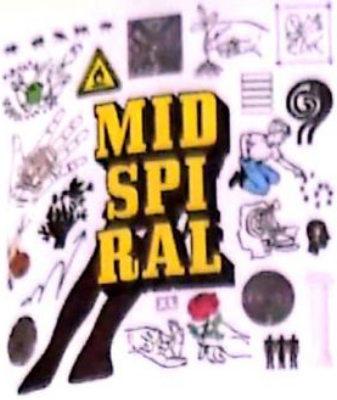
Y
ゆっきゅん→175
夕食ホット→175

イラストレイション＝シマ・シンヤ

●掲載作品は品番の後にDVD、LPなどと記した場合を除きすべてCDです。価格は税抜き定価。なお、筆者には主に試聴用のCD-R、DVD-R等で評を依頼しています。

CamScannerでスキャン

インストの音楽の素晴らしさに向き合ったアルバム



Badbadnotgood

『ミッド・スパイラル』

バッドバッドノットグッド

XL(ビート) XL1450CDJP
¥2600／10・25発売
(原題 "Mid Spiral")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

バッドバッドノットグッド（BBNG）がEPで連続リリースした音源を1枚のアルバムとしてまとめたのが本作だ。当初からアルバムにまとめる意図があったのかは分からないが、前作"Talk Memory"と比較するとアルバムとしてコンセプチュアルなものは感じられない。前作はトリオでの再スタートを切ったアルバムで、サム・シェパード（フローティング・ポインツ）やアルトゥール・ヴェロカイ、カリーム・リギンスらが参加して、ストリングスやエレクトロニクス、ギターのサイケデリックなサウンドも聴かれた。コリン・ステットソンのバリトン・サックスが濃密なアンサンブルも作り出していた。それに対して本作は、ベースのチェスター・ハンセンとドラムのアレクサンダー・ソウィンスキー、サックスのリーランド・ウィッティのトリオを軸にライヴ・ツアーのサポート・メンバーとの録音で、シンプルなセッション的な音源の延長にも聞こえる。

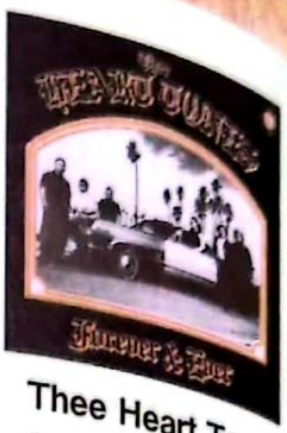
ただ、そのことにまったく否定的な意味合いはなく、むしろトリオの魅力をストレートに伝えるアルバムになっていると感じられた。音楽性の広がりを示すのではなく、彼らのプロフィールにあるインストゥルメンタル・ジャズ・バンドのコアな部分を表出している。BBNGは、ストレート・エッジなジャズ・グループではない。エクレクティックな要素は当初からあって、スラム・ヴィレッジやナズのインスト・カヴァーを演奏したり、タイラー・ザ・クリエイターやゴーストフェイス・キラーとも共演することで幅広い人気を得た。それは、インスト・バンドが生き残るための一つの正しいやり方であり、前作はその表現の到達点だったとも思う。

たが、前作には即興演奏の曲もあり、ジャズの自由な空気も入り込んでいた。また、ウィッティが2022年にリリースしたソロ・アルバム"Anyhow"はアンビエント・ジャズ的なサウンドを志向したもので、BBNGにはこれまでない要素も感じられた。こうした変化を経て、もう一度バンドの演奏に立ち戻ったのが本作だと思う。基本的にグルーヴィで温かなサウンドが心地よく持続する。おざなりなセッション音源では決してない。アグレッシヴな展開もレイドバックしたムードも一繋がりの流れで聴けるのは、濃密なスタジオでの録音から生まれたからだろう。

南カリフォルニアのヴァレンタイン・スタジオで集中的に行われた録音だという。ここはジミー・ヴァレンタインが1963年に設立したスタジオで、スタン・ケントンからビーチ・ボーイズやフランク・ザッパまで使ったことで有名だが、長年使われず放置されたままだった。2015年にリニューアルされて、最近ではアンドリュー・バードがジェフ・パーカーらと"Sunday Morning Put-On"を録音した。楽器の重なりが独特の滲みを作り、包み込むような残響と一体化した素晴らしい音作りだったが、本作もまた同様の録音の素晴らしさを感じられる。物語性を求めるなら本作は適さないが、繰り返し聴くことができるインストの音楽の素晴らしさに向き合ったアルバムである。

原雅明

CamScannerでスキャン



Thee Heart Tones
『フォーエヴァー&エヴァー』
ジ・ハート・トーンズ

バリオ・ゴールド
(ミュージック・キャンプ)
BG5256
¥2800／8・23発売
ZBG1551 (LP)
¥4700／8・23発売
(原題 "Forever & Ever")
●問合せ先＝042・498・7531
(ミュージック・キャンプ)

すっきりした甘さを醸し出す チカーノ・ソウル・バンド

南カリフォルニアのホーソーン市は、ビーチ・ボーイズのウィルソン兄弟の出身地として有名だが、実際は中南米系の住民が半数以上を占めている。そんなホーソーンから登場したのがジ・ハート・トーンズだ。もともとヘヴィ・メタルを演奏していた彼らが自身のルーツに開眼し、平均年齢20歳のとき発表した本作で奏でるのは燻銀のチカーノ・ソウル。ザ・ヴァンガーズによるバラード「サムバディ・ブリーズ」やエル・チカーノもカヴァーしたボレロ名曲「サボール・ア・ミ」といったイースト LAクラシックをカヴァーしているあたり新伝承派と呼びたくなる。

だが彼らを特別な存在にしているのはオリジナル曲の出来の良さと女性シンガー＝ジャスミン・アルバラードの楚々とした歌声だ。これらが醸し出すすっきりした甘さは、「モータウンは好きだけどスウィート・ソウルはあのクドさが苦手で」と思っているロック・ファンにも受け入れられるはず。なおホーンもパーカッション担当もいないバンドを、ひとり多重録音で補っているのは、プロデューサーのリオン・マイケルズ。ノラ・ジョーンズとクレイロに続いて良い仕事をしている。**長谷川町蔵**

Mustafa
『ダンヤ』
ムスタファ

ジャグジャグウォー
(ビッグ・ナッシング)
JAG470JCD
¥2500／9・27発売
JAG470JLPC1
¥5800／9・27発売
(原題 "Dunya")
●問合せ先＝ bignothing.net
(ビッグ・ナッシング)

美しく繊細な世界を作り上げる トロントのスーダン系自作自演歌手

トロント出身、スーダン系カナダ人のシンガー・ソングライターの約3年半ぶり2作目。ウィークエンド、カミラ・カベロらに楽曲を提供して注目を集めた。ジェイムス・ブレイクやジェイミーXX、サンファらと作った"When Smoke Rises"は、瑞々しい感性と優しさに満ちた作品だったが、今作はザ・ナショナルのアーロン・デスナーやニコラス・ジャーらの協力を得て前作以上に美しく繊細な世界を作っている。

柔らかくしなやかなアコースティック・サウンドと、ムスタファの落ち着いた声。フォーキーなサウンドだが、サウンドのテクスチャーや音響デザインはジェイムス・ブレイク以降を想起させる。ムスタファを見いだしたという同郷のドレイクの影響も感じられる。

白眉は、侵攻によって亡くなったパレスチナ人の幼なじみを悼んだ"Gaza Is Calling"だろう。淡々と歌われる祈りに似たヴォーカルと、ニコラス・ジャーによるストリングスの美しさは、この人が到達した高みだろう。加えて強さや狂気のようなものを的確に表現できるようになれば、もっとアーティストとしての深みを増すはず。**小野島大**

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Thurston Moore

『フロウ・クリティカル・ルーシディティ』

サーストン・ムーア

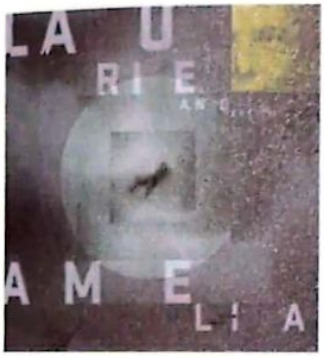
デイドリーム・ライブラリー・シリーズ
(ディスクユニオン) DLS016CDJ
¥3000／10・2発売
(原題 "Flow Critical Lucidity")
●問合せ先＝03・3511・9944
(ディスクユニオン)

穏やかなミディアム・テンポが多く落ち着いて楽しめるソロ9枚目

元ソニック・ユースのサーストン・ムーアのソロ作ももう9枚目となるが、マイ・ブラッディ・ヴァレンタインのデビー・グッギ(b)や、ソニック・ユースの影響を受けたギタリスト＝ジェイムス・エドワーズ等が参加し、ロンドンやスイスでレコーディングされている。昨年前半にはアメリカン・モダン・ダンスの祖、イサドラ・ダンカンをテーマにしたシングル "Isadora" を発表していたけれど、それからとすると完成までけっこう時間がかかったようだが、全般的には穏やかなミディアム・テンポが多く、落ち着いて楽しめる。

もともとソングライターとしての非凡な才に溢れる人で、サイケデリックな音の流れは美しいが、この人に求められるのは、もう少し緊迫感や切迫感を反映した曲やインタープレイではないだろうか。もう60代半ば、そういう方向だけではいけないのもわかるが、3曲目の "Shadow" あたりで聴けるかなりキツめのノイジーな音や5曲目の "We Get Fed" でバックにガーンと爆音が鳴り響くと、こういうものをもっと、と思うし、少なくとも自分的な期待感はそこだ。音叉のついた兜のジャケットは可愛らしいが。 **大鷹俊一**

Rock [US]



Laurie Anderson

"Amelia"

Nonesuch [US]
8・30発売

女性飛行士を主題にした死と隣り合わせのアンビエント

ローリー・アンダーソンの新しいスタジオ作は、世界発の大西洋単独横断飛行を成功させた女性飛行士、アメリア・イアハートを主題としている。2000年にカーネギー・ホールから依頼をうけて作曲された「ソングス・フォー・アメリア・イアハート」の曲を中心に、チェコのブルノ国立フィルハーモニー管弦楽団、マーク・リボー、トニー・シェール、ケニー・ウォルセンらが録音に参加している。

イアハートは1937年、世界1周飛行の最中に消息不明となるのだが、その最期のフライトで綴られた飛行日誌や、夫へ送った電報などの言葉はアンダーソンによって創作されている。テキストは聴き馴染みの深い彼女のナレーションと、アノーニの歌声で表現されるのだが、語りと歌は限りなくシームレスだ。

時折、不穏なフレーズも顔を出すが、おおむね穏やかな時間が続く。機上から見る風景の詩情を伴ったアンビエント・ミュージックともいえる。死と隣り合わせの彼女の旅はとても静かだ。ブライアン・イーノの『ミュージック・フォー・エアポート』で空港という場所を選択したことにも繋がっている。 **安田謙一**

CamScannerでスキャン

Rock [US]

The Hard Quartet
『ザ・ハード・カルテット』
ザ・ハード・カルテット

マタドール（ビート） OLE2093CDJP
¥2500／10・4発売
（原題 "The Hard Quartet"）
●問合せ先＝03・5768・1277
（ビート）

ガレージ・バンドを楽しんでいる感覚なのだろう4人のアンサンブル

テレヴィジョンとか、リチャード・ヘルとかみたいだと思ったら、すっかりはまってしまった。あ、比較対象が古すぎる？　そうかねも。でも、メンバー達の世代を考えると、そんなに的外れではないような気もする。メンバーとはベイヴメントのスティーヴン・マルクマス、マット・スウィーニー（ボニー・プリンス・ビリー他）、ダーティー・スリーのジム・ホワイト、エメット・ケリー（タイ・セガール他）の4人。前掲2バンドに加え、バーズを連想させるフォーク・ロック・ナンバーやフォーキーだったり、ブルージーだったりする曲もあるから、メンバー達が聴いてきたと思しき60〜70年代のロックの影響を、オルタナ以降の感性を持つタイトなバンド・アンサンブルに落とし込んだという印象だ。

ローリング・ストーンズの「友を持つ」のオマージュになっている「Rio's Song」のMVにも思わずニヤリ。レーベルはスーパー・バンドと謳うが、メンバー達は言葉本来の意味のガレージ・バンドを楽しんでいる感覚なのだろう。スウィーニーがマルクマスにバンド結成を提案したそうだ。よじれたように鳴るギターの音が心地いい。

山口智男

Rock [US]

Mount Eerie
『ナイト・パレス』
マウント・イアリ

7e.p. EPCD133〜4（2CD）
¥3000／10・25発売
（原題 "Night Palace"）
●問合せ先＝03・6325・0991
（7e.p.）

生々しい感情と緊迫感を湛えた5年ぶりで2枚組26曲の大作

妻の死を主題とした連作『ア・クロウ・ルックト・アット・ミー』（17年）、『ナウ・オンリー』（18年）でシンガー・ソングライターによる内省表現の極北に達したフィル・エルヴラムはしかし、その後もザ・マイクロフォンズ名義の18年ぶりの復活作（20年）では1曲44分44秒の形式でリリースするなど、ほとんど無軌道とも思える独自の道を歩み続けている。そしてその音楽もまた、より曖昧な領域に進んでいるようだ。

マウント・イアリ名義では5年ぶりとなる本作はまず、2枚組26曲というヴォリュームにも驚かされるが、それ以上に散文的とも取れる掴みどころのなさに圧倒される。フォーク、ノイズ、インディ・ロックと音楽的な様式がコロコロ変わるだけでなく、1分台の短い曲が並ぶかと思えば12分に及ぶ曲もあり、そのまとまりのなさこそが不思議な引力を発生させている。しかも、壊れそうなバランスでようやくメロディをなぞる歌声は一貫しているし、そこからこぼれ落ちる痛ましい感情はつねに底に流れているため、集中して聴けば聴くほど瞑想的な効果を生み出していく。ミステリアスで、生々しい感情と緊迫感を湛えた作品だ。

木津毅

CamScannerでスキャン

Michelle

"Songs About You Specifically"

Atlantic [US]
9・27発売

すべてが陰影を増している
20代前半の6人組による3作目

ニューヨーク出身の6人組、ミッシェルのフル・アルバムとしては3作目になる。僕はすでに本誌の年間ベスト・テンで2回、ミッシェルの作品を選んでいる。この数年、最も愛聴し、溺愛してきたアーティストと言ってもいい。だが、彼らのことを語るのは難しい。ジャンルはポップとしか言いようがなく、しかし、似たような同時代のアーティストは見当たらない。日本のメディアではとんど話題にならないのも、切り口を見つけられないからだろう。

もともとはトラック作りをする男性メンバー二人が周囲の女性シンガーを集めたプロジェクト。僕はアース・ダッドというバンドで歌っていた中国系のエマ・リーが参加していたことから、ミッシェルにも興味を持った。出自は様々だが、全員が子供時代から近くにいたニューヨーク っ子だという。そして、作品作りの共同作業を重ねるうちに、他に例を見ないバンドとして成立していった。

音楽的にはソウルやファンクの影響が強いコーラス・グループと言ってもいいかもしれない。だが、伝統的なコーラス・グループのフォーマットにはあてはまらない。4人の女性シンガーは全員がリードを取り、ハーモニーやコール&レスポンスも場面場面で多彩な展開をする。そして、誰がリードを取っても、曲全体としてはミッシェルの音楽としか言いようがないものになる。コンビネーションとしてはブラックピンクのようなK-POPのグループに近いようにも思えるが、一方で歌詞内容は切実で、身近な人間関係についての深い洞察を孕んだものが多い。フェミニズムあるいはクィアの視点から書かれたものが多いことも、前作からこの新作にかけては、はっきりと見えてきた。

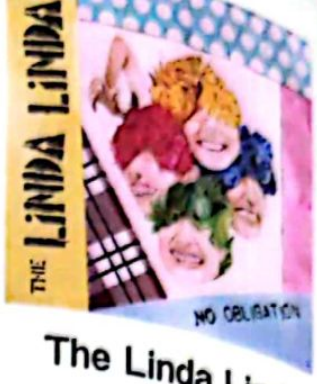
デビュー時には全員が10代。数年後の今も20代前半のはずだが、この3作目ではすべてが陰影を増している。サウンドは芯が太くなり、グルーヴはより精密になった。細部にはエレクトロな要素を絡めた実験性も覗く。本作でも男性二人も多く歌っていて、声の合わせ方が、さらに繊細な創造性に富むようにもなっている。歌詞に合わせて、自在に色を乗せていくような絵画的感覚を増したと言ってもいいかもしれない。

マルチカルチュラルなメンバーの個性が溶け合いつつ、ぱっと聴きはスムースでファンキーでメロディックなポップ・ミュージック。とても聴きやすい。ベタなバラードみたいな曲はひとつもなく、どんどん進んでいくアルバムでもある。6人全員がソングライターで、幾つかのチームを組んでは競うように曲を量産しているらしく、EPなどで小出しにしてきた曲は含まずに、アルバム用に厳選されたミッシェルらしい曲が並べられた感がある。

ファンとしては狂喜乱舞で、今回もリピートしまくり。自分の年齢を考えたら、こんな若い子達の音楽を日々の生活のサウンドトラックにしているというのも不思議な話だが、ただ、ちょっと不安を感じるようにはなった。これはどこまで続くのだろうと。6人のこんなバランスが長く保たれるとは思えない、などと案じるのは、それこそジジイの老婆心かもしれないが。

高橋健太郎

CamScannerでスキャン



The Linda Lindas
『No Obligation』

エピタフ／サイレント・トレード
STCD5017
¥2500／10・11発売
（原題 "No Obligation"）
●問合せ先＝www.silent-trade.co.jp
（サイレント・トレード）

ヴァリエーション豊富で洗練味のある爽快なセカンド作

元頃、ローリング・ストーンズの座を務めた彼女たちは「80歳になってもできるんだ！　私たちにはまだたくさんの時間がある」と希望を持ったという（笑）。20歳のベラ（B）、高校生のルシア（B）とエロイーズ（D）に、中学卒業したてのミラ（ds）である。が、持ち時間に甘えないガールズはデビューから2年の経験を咀嚼して、ヴァリエーション豊富で洗練味のある爽快なセカンド作を作り上げると共に、「他人が期待する私たちのサウンドやイメージには固執しない」ことを宣言してのけた。

デビュー作同様、ルシアとミラの父カルロス・デ・ラ・ガルサ（バラモア他）がプロデュース、全曲4人の共作、曲によってリード・ヴォーカルは交代する。エロイーズが肝の座った歌を聴かせるパンキッシュな表題曲、ルシアの過不足ない感情表現が心地よい「All In My Head」、ポップでパンクでおセンチな「Once Upon A Time」などが並ぶ中、アル・ヤンコヴィックが参加した「No Mistress」はコリドス・トゥンバドスやドゥランゲンセに影響を受けた曲で、メンバー3人のラテン・ルーツへのリスペクトであり、作中アクセントとしても機能。**赤尾美香**

Pop

Katy Perry
『143』

ケイティ・ペリー

ユニバーサル　UICC10057
¥2600／9・25発売
（原題 "143"）

キャッチーなフックに溢れているがバッシングされた苦い娯楽作

本作ほど2024年にバッシングされたポップ・アルバムはないはず。理由は、全盛期のヒット曲の大半を手がけていたにもかかわらず、ケシャへの性加害が明らかになったことをきっかけに関係を絶っていたプロデューサー、ドクター・ルークと再びタッグを組んだからだ。ルークはスキャンダル発覚以降もドージャ・キャットやキム・ペトラス、ニッキー・ミナージュ、ラトーといった女性アーティストに多数のヒット曲を提供しており、そのことで彼女たちが批判されることも少なかったため、ケイティは自分も許されると判断したのだろう。何よりポップ・シーンの最前線への本格復帰に際して、ルークの職人的スキルを欲したのだ。

その判断の是非は横に置いておくと、楽曲自体は近年の彼女に欠けていたキャッチーなフックと勢いに溢れている。これほどハウス大会にしなくても良かったとは思うけど、少なくともジャック・アントノフの手がける凡庸なポップ・チューンと比べると聴いていて何倍も面白い。人間的にはアントノフ、才能がルークという若手プロデューサーが出てきたらいいのに…と思わずにいられない苦い娯楽作である。　**長谷川町蔵**

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Christian Lee Hutson

"Paradise Pop.10"

Anti- [US]
9・27発売

新しいアメリカン・フォークの潮流を提示する意図も感じる3枚目

フィービー・ブリジャーズの友人でツアーに帯同した経験もあるLA出身のシンガー・ソングライターのファーストとバンドメイトのマーシャル・ヴォアのプロデュースによる3枚目。指弾きのギターの繊細な音色を主にした前作までに比べて開放的なバンド・サウンドを押し進めており、ノクターナルでジックなピアノに彩ったアンビエンスが流れ込む冒頭のナンバー、エモーショナルでサッドコアなアレンジを施したカントリー・フォーク調の2曲目などはさながら〝フィービーのソロの刃子作〟のような趣きも。初期のトム・ウェイツも思わせるソングライターだと言うが、今作ではエリオット・スミスを偲めつつ、そこにさらに空間的な広がりを持たせ、風通しよく聴かせている印象だ。

フィービー、マヤ・ホーク、サミア、ケイティ・カービーら個々に活躍する女性シンガー・ソングライターをコーラスに起用しているのも特徴的（ジェイ・ソムもトランペットで参加）。ハトソンの温かな声とのハーモニーも実に美麗で、柔和で軽やかな今作の質感自体にも大いに寄与している。フィービーよろしく新しいアメリカン・フォークの潮流を提示する意図もありそう。**井草七海**

Rock [Canada]

Japandroids

"Fate & Alcohol"

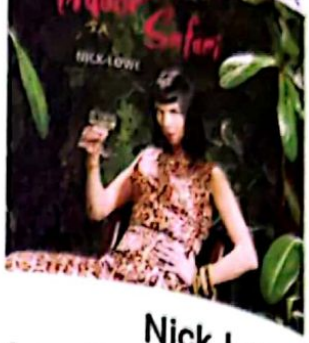
Anti- [US]
10・18発売

ヴァンクーヴァーのデュオによる充実した演奏の〝終着点〟

カナダのヴァンクーヴァーで結成されたデュオ。本作は7年ぶりの新作となる4枚目で、これがラスト・アルバムになるという。背景には、ブライアン・キング（G／VO）が、私生活上の理由でアメリカに移住したことによる影響もあるようだ。

シューゲイザーやブルース・パンクを汲んだ騒々しくアンセミックなロック・サウンドが身上のかれら。12年の〝Celebration Rock〟がそのピークだとすれば、ピーター・カティス（ザ・ナショナル他）を迎えた前作ではその豪胆さに後退が感じられたのも事実。アコースティック・ギターやシンセの導入など新機軸も窺えたが、対して本作では基本に立ち返り、ジャムをベースに曲を練り上げていったという。その成果は力強い高揚感とシンガロングを誘う冒頭から顕著で、オープン・コードのギターは猛々しく、緩急鋭いドラムが楽曲を土台から守り立てる。うねりを打つシューゲーズ・バンガーの3曲目はハイライトだが、かたや親密なムードをたたえたフォーク・ロック調の8曲目もいい。4年前のライヴ盤も思い起こさせる演奏の充実度で、ここが〝終着点〟であることが惜しまれてならない。**天井潤之介**

CamScannerでスキャン



Nick Lowe, Los Straightjackets

"Indoor Safari"

Yep Rock [US]
9・13発売

ネック仙人といった雰囲気も漂う
名曲の再録音を中心とした新作

っぱりニック・ロウだよな、と誰もが言いたくなる新作。もん近年一緒にライヴ、レコーディングをやっている覆面集団ロス・トレイトジャケッツとのもので、らと最初に作った曲 "Wet Toe" で幕を開ける。これまでシングルで出したものの再レコーディング等が中心なので純粋な新作アルバムとは言い難いが、それもまたこの人らしいノリでまったく問題なし。

まず耳が行くのが18年に出した、イラスト・ジャケもカッコイイEP "Love Bat" のタイトルとなったロカビリー・ナンバーで、ニックも気持ちよさそう。またフィル・スペクターがプロデュースしたサミー・ターナーの "Raincoat In The Rain" をカヴァーしてリッキー・ネルソン・スタイルで聞かせるものもこのチームにぴったりだし、『ザ・コンヴィンサー』(01年) の20周年記念ヴァージョンにもボーナスとして入っていた美曲ソングライターの才をこれでもかと聞かす "Different Kind Of Blue" が入っているあたり、マニアたちにも嬉しいところ。ロック仙人といった雰囲気も漂うが、それもまた彼が望んでいた境地であり、だからこそ作れた一枚だ。**大鷹俊一**

Amyl And The Sniffers

『カートゥーン・ダークネス』

アミル・アンド・ザ・スニッファーズ

ラフ・トレード(ビート)
RT0510CDJP
¥2500／10・25発売
(原題 "Cartoon Darkness")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

ミッド・テンポの曲が目立って
ヴァラエティに富む3作目

フロント・ウーマンを擁するオーストラリアのパンク系のバンドが、約3年ぶりに発表したサード・アルバム。プロデュースは、駆け出しの頃にPiLの『フラワーズ・オブ・ロマンス』を手掛け、前作でミキサーを務めたニック・ローネイである。

もともと地下パンク・シーンよりも、オルタナティヴ・ロック寄りのフィールドで活動してきたバンドだから、本作の進化に不思議はない。メンバーによっては影響を否定していたし、今回もそういう曲を含むが、ブラック・フラッグの色からの脱却が大きい。モーターヘッドの「オーガスマトロン」っぽいリフの曲から、トーキング・ヘッズの「サイコ・キラー」風のリズムの曲まで、ミッド・テンポの曲が目立ってヴァラエティに富む。ヴォーカルも多彩で、はすっぱな声のシャウトは健在ながら、メロディアスな歌唱からトーキング・ヴォーカル、さらにラップまで披露。はつらつとしているようでヘヴィな雰囲気に覆われ、シリアスな歌詞も特筆したい。それでも聴き通せるのは、いい意味で柔和な音作りゆえのこと。特にドラムとギターの音の抜けが気持ち良く、乾いた味わいの34分弱の13曲入り。　**行川和彦**

CamScannerでスキャン

テクノの機能性とポップな側面を無理なく発揮した一枚

Electronic Music

Underworld
『Strawberry Hotel』
アンダーワールド
ヴァージン（ユニバーサル）
UICB1030（SHM-CD）
¥3000／10・25発売
（原題 "Strawberry Hotel"）

18年から19年にわたってアンダーワールドが取り組んだプロジェクト"Drift"は、映像やデザインといった彼らの多方面への関心を制限なく探索するものであったと同時に、音楽的な制約も一度外してみるという試みだった。膨大な楽曲が発表されたので全部追っていたというリスナーは多くないかもしれないが、彼ら自身それでよかったのだろう。すっかりキャリアの長くなった彼らが、一定のモードに囚われずに創造性を発見し直す過程だったのだ。

だから、11作目となる本作ではその成果が生かされており、アンダーワールドがこれまで培ってきた多彩な引き出しをいい意味でカジュアルに解き放っている。カール・ハイドの抑えた歌声がダークなムードを醸す「Denver Luna」は初期を思わせるし、「Techno Shinkansen」もどこか懐かしいUKテクノを連想させる。ハードなビートが叩きつけられる「Lewis In Pomona」などもハイドのエフェクト・ヴォイスが乗ることでアンダーワールド印に仕上げられている。突飛な新機軸を用意するのではなく、テクノの機能性と自分たちのポップな側面を無理なく発揮した一枚である。

木津毅

人間的な温もりを失わないエモーショナルな電子音楽

Electronic Music

Fred Again..
"Ten Days"
Atlantic［UK］
9・6発売

英国ダンス・ミュージック屈指の売れっ子、約2年ぶりの4作目である。精力的にダンス・トラックを発表してきたフレッドは2019年から"Actual Life"というプロジェクトを始めている。ボイスメモ、SNSのクリップ、他のアーティストの音楽など、さまざまなソースからサンプルを収集し、パンデミック中の生活を綴っていく一種のコンセプト・アルバムだった。本作はその3部作に続く作品である。サンファ、アンダーソン・パーク、フォー・テット、スクリレックス、エミルー・ハリスなどがゲスト参加している。

「過去1年間で最も思い出に残る、非常に小さな静かで親密な瞬間」を"Ten Days"というタイトルで切り出したという、インタールードを含む全20曲は、どこまでも人間的な温もりを失わない、エモーショナルな47分だ。電子音楽の実験性や先鋭性ではなく、人生や生活に寄り添った身近な親密さを表現するという姿勢には変わりない。そのぶん目を見張るような音楽的な進化は感じにくいが、その温かい音は心地よく安心感を与える。エミルー・ハリスが歌う'Where Will I Be'がとりわけ美しい。

小野島大

CamScannerでスキャン

Heron Heroes
The Bird of A

Ryan Kelsey A
Catharsis

"Music is Connection"

CamScannerでスキャン

Jazz

Samara Joy

『ポートレイト』

サマラ・ジョイ

ヴァーヴ（ユニバーサル） UCCV1204
(SHM-CD)
¥2800／10・11発売
(原題 "Portrait")

演奏は華やかな軽みを帯び ヴォーカルもふくよかな新作

アメリカはきっと、こういう正統派の若いジャズ・ヴォーカリストを待ち望んでいたのだろう。2年連続のグラミー受賞というサマラ・ジョイ現象を目の当たりにするとそう感じるし、2年ぶりのこのメジャー2作目での彼女は、それにしっかり応えるようなアルバムをものにした。

録音はニュージャージー州にあるヴァン・ゲルダー・スタジオで行なわれ、2曲目で歌われるのはチャールズ・ミンガスの「ラヴバードの蘇生」。ミンガスが60年に録音したその曲はそもそもがチャーリー・パーカーへのオマージュであり、この2点だけをとっても、ジャズの歴史まで担うサマラ、の構図が描かれる。

トリオ編成がメインだった前作でのバックに加え、今回は4人編成のホーンズがいる。よって演奏は華やかな軽みを帯び、サマラのヴォーカルも柔らかでふくよかなニュアンスが前に出るようになった。カサンドラ・ウィルソンやレイヴェイを好んできた僕にはまだまだ王道すぎると思えるサマラなのだが、その歌のスキルや演奏陣の的確なサポートには抗し難い魅力がある。いつの日か、グシャッと崩れたアルバムが出されることを。

宮子和眞

Jazz

Roy Hargrove

『グランド・テール』

ロイ・ハーグローヴ

ヴァーヴ（ユニバーサル） UCCV1205
(SHM-CD)
¥2800／10・18発売
(原題 "Grande Terre")

グラミーを授賞したアルバムの直後に録音された未発表音源

インタヴューでジャズ系のトランペッターに影響されたプレイヤーを尋ねると、かなりの確率で2018年に逝去したロイ・ハーグローヴの名前が挙がる。黒田卓也も類家新平もキーヨン・ハロルドもそうだ。無論、カマシ・ワシントンやロバート・グラスパーらがロイの作品からインスピレーションを受けているのも明白である。本作は未発表音源だが、クオリティ的には申し分なし。グラミー賞の最優秀ラテン・ジャズ・パフォーマンス賞を授賞した『ハバナ』（97年）の発売直後に録音された音源で、基本的には同作の延長線上にあると言っていいだろう。

アフロ・キューバンのリズムを通奏音に、ルンバやファンク、ビバップなどが混在するサウンドは、グルーヴの坩堝といった趣。RHファクター名義でネオ・ソウル寄りのジャズを確立した印象の強いロイだが、ここではビッグ・バンド編成でアッパーな演奏を展開している。ツイン・ドラムとパーカッションが土台となり、怒涛の熱演が続く。ロイのトランペットが前景化する場面はさほど多くないし、ソロもやや控えめではあるが、その存在感の大きさははっきりと伝わってくる。

土佐有明

CamScannerでスキャン

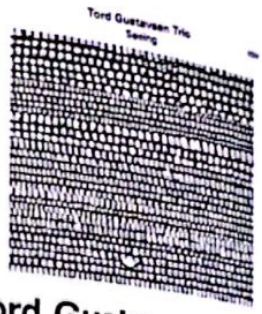
近年もっとも注目すべきジャズ・サックス奏者の3作目

Immanuel Wilkins
『ブルース・プラッド』
イマニュエル・ウィルキンス
ブルーノート(ユニバーサル)
UCCQ1207(SHM-CD)
¥2600／10・11発売
(原題 "Blues Blood")

この通算3作目で、やっと正式な本邦デビューを飾るイマニュエル・ウィルキンスは、近年もっとも注目すべきジャズ・サックス奏者の一人。ミシェル・ンデゲオチェロとの共同制作による本作の大きな特徴は、初めてヴォーカル曲が収録されていることだ。ジャズ系のセシル・マクロリン・サルヴァントをはじめ、本誌の今年7月号での〝インディアン・ディアスポラ30選〟で取り上げたインド出身のガナヴィヤ、ジャマイカ人の血を引くジューン・マクドゥーム等が参加。歌詞のないヴォーカルも含めて、歌声の比重は大きい。

表題は、64年に逮捕された少年の発言「痣を切開して血を流し、その傷を見せなければならなかった」に由来する。作曲家のスティーヴ・ライヒはこの音声を使った作品を発表しているが、少年が痣(bruise)をブルース(blues)のように発音していることに着想を得て、こんな表題にしたという。イマニュエル率いるカルテットの演奏は、シリアスでスピリチュアリティを帯びており、しかも熱い血が通っている。歌手の人選や、多彩な音声がサンプリングされたインタールードの音作りを含めて、現代性も申し分ない。**渡辺亨**

緻密に設計された音像の中に偶発的な感情の揺らぎが見え隠れ



Tord Gustavsen Trio
『シーイング』
トルド・グスタフセン・トリオ
ECM(ユニバーサル) UCCE1210
(SHM-CD)
¥2800／9・20発売
(原題 "Seeing")

現代ECMを代表するノルウェーのピアノ詩人の10作目。前作『オープニング』に引き続きトリオ作品であり、ドラムスに盟友ヤーレ・ヴェスペスタ、ベースには前作から加わったステイナー・ラクネスという前作同様の布陣で臨んでいる。

オリジナル曲やバッハの合唱曲、ノルウェーの伝統的な賛美歌などが入り混じるのも、いつものトルド・グスタフセン。曰く「延々と続くソロはなく、代わりにインタープレイや短い即興パートの形成に注力した」とのこと。同時に、決して「計画や台本に従う」のではなく「その瞬間瞬間に心揺さぶるもの、重要だと感じさせるものを追求した」という。確かに、自作曲「古い教会」では清廉な色彩の中にゴスペルの親密さが漂い、バッハ作「いとしき主にわれは頼らん」では厳粛なトーンの中にジャズやブルースのいなたさが仄かに香るなど、緻密に設計された音像の中に偶発的な感情の揺らぎが見え隠れするかのよう。極めて端正な筆致で紡ぎ出されるリリカルなメロディと音像は、曖昧なグラデーションを描きながら移ろっており、そこに不思議な滑らかさを帯びた独特の音空間が広がっている。**石川真男**

CamScannerでスキャン

Rap/Hip Hop

Future

“Mixtape Pluto”

Wilburn / Epic [US]
9・20発売

苦境に立つ人々の魂を代弁し続けるアトランタのラッパー

メトロ・ブーミンとのタッグ作“We Don't Trust You”収録の“Like That”で間接的に（現状）今世紀最大のビーフに立ち会っていながら、アトランタのラッパーであるフューチャーは自らの仕事に集中していた。

つまり、この客演なしで制作された最新のミックステープでも、フューチャーは相変わらずだったということだ。ウィージーとサウスサイドを中心に制作されている中毒性のあるトラップ・ビート、オートチューンの掛かった甘く揺れるラップ。17個も似たような曲が並んでいると言われても大声で否定することはないだろう。ただ、だからと言ってつまらないわけではない。いや、むしろ私は変わらないその声を望んでいる。享楽的なライフスタイルのボースティングに、ときおりストリートで経験した痛みが混じり合う彼のラップは、いつだって私にこの世界を生きる難しさと、そこで負った傷の美しさを思い起こさせるのだ。

7曲め“Ocean”でフューチャーは歌う。“俺は海を埋め尽くせるほどの涙を流してきた”。哀しみに濡れて鈍く輝く彼の声は、逃避的かつ退廃的に、苦境に立つ人々の魂を代弁し続けている。

高久大輝

Rap/Hip Hop

Blackstarkids

“Saturn Dayz”

Dirty Hit [UK]
9・20発売

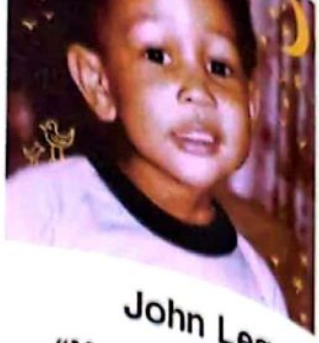
昨今の“ニュー・ノスタルジア”を体現するZ世代のラップ・トリオ

2019年に米ミズーリ州カンザスシティで結成されたZ世代のラップ・トリオによる、2作目のスタジオ・アルバム。ミックステープも含めれば早くも6作目にあたるのだから、かなりのハイ・ペースでリリースを重ねている印象だ。

2010年代以降のトレンドを全部すっ飛ばして90～00年代へと先祖返りしたような音楽性は相変わらず。それもヒップホップだけでなく、インディ・ロックやポップ・パンクも取り込んでいく節操のなさが魅力的なトリオだが、今作ではそこに英国産クラブ・ミュージックやジャズの要素まで加わり、ますます混濁したサウンドが楽しめる一枚となった。とはいえ、そのプロダクションはあくまでもベッドルーム・ポップ的で、作品全体のムードは一定してメロウ。音楽的な冒険心とチャラさが共存しているところに、所属する英レーベル＝ダーティ・ヒットとの相性の良さも改めて感じる。男女混成のマイクリレーがパーティ音楽としての親しみやすさを演出しつつ、そこには若者たちが抱える内省も確かに聴き取れる。これもまた昨今の“ニュー・ノスタルジア”を体現する一枚なのだ。

渡辺裕也

CamScannerでスキャン

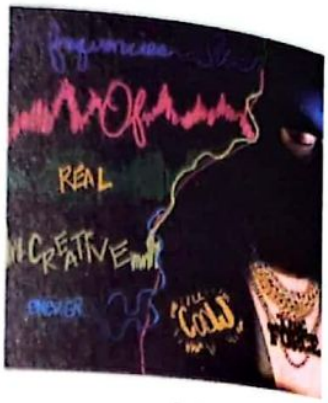


John Legend
"My Favorite Dream"
Republic [US]
8・30発売

スナーの鑑賞にも十分耐える
メイドなキッズ向けの楽曲集

も4人の子を持つ父親である
レジェンドが歌う、キッズ
楽曲集。スフィアン・スティ
スがプロデュースしているこ
も分かる通り、その内容は単
キンダガートン向けの実用音楽
というより、成人リスナーの鑑賞
も十分耐えうる非常にウェルメイ
なものだ。レジェンドの作曲、ス
ティーヴンスの編曲ともに、微に入
り細を穿つ出来栄えで、いわゆる"グ
レート・アメリカン・ソング・ブッ
ク"から続くティン・パン・アレイ
の伝統や、「セサミ・ストリート」
「バートリッジ・ファミリー」等に
代表されるホーム・エンターテイン
メントから続く太い系譜の継承も感
じさせてくれる。ボブ・マーリーの
「スリー・リトル・バーズ」や、ス
タンダード曲「ユー・アー・マイ・
サンシャイン」のカヴァーも洒脱だ。
しかし、やはり本作の本質が"子
供のための"という部分にあるのは
明白だ。ときに社会的な存在意義を
自問自答せざるをえないほどに膨張
した現代のコンテンツ業界において、
"目的"があること以上の幸運はない
かもしれない。子供たちから祝福
されるべく生まれたこれらの歌は、
ただそれだけで尊い。

柴崎祐二



LL Cool J
"The Force"
Def Jam / VMG [US]
9・6発売

ヒップホップの存在意義と
ポジティヴな側面に光を当てた快作

レジェンド・アーティストの現役
復帰が期待を上回ることは決して多
くはないが、LLクールJは見事に
それをやってのけた。彼は11年ぶり
の新作でブランクを感じさせない勢
いのあるラップと、遊び心とヒップ
ホップ・カルチャーへの愛に溢れる
リリックを携えて戻ってきたのだ。
彼は早速1曲目の人種差別を批判
する"Outta Control"からストー
リーテリングの才を冴え渡らせ、
"Control"では"コカインじゃなく
ヒットを量産する"などとボースティ
ングしつつ"俺のスラングが古臭
くて女の子が笑ってる"と冗談を交
える余裕さえ見せる。また、重厚さ
より爽やかさを感じさせるQティッ
プによるビートとも相性が良く、トレ
ンディーなスタイルになびかなかっ
たところも好印象。スヌープ・ドッ
グやエミネム、ナズといった、ヴェ
テランの彼だからこそ集ったであろ
うメンツの中でスウィーティーが
存在感を示しているのも本作の風通
しの良さに一役買っているだろう。
リアルタイムで彼の全盛期に立ち会
っていない自分のような世代にもお
すすめしたい、ヒップホップの存在
意義とその音楽の持つポジティヴな
側面に光を当てた快作だ。

高久大輝

CamScannerでスキャン

Brazil

Marcos Valle

『トゥネル・アクスティコ』

マルコス・ヴァーリ

ユニ（ディスクユニオン） UNCD087
¥2500／10・2発売
（原題 "Túnel Acústico"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

英語圏での活動にも積極的だった キャリアを今一度、総ざらい

以前と何が違うわけじゃないんだけどとてもイイ。そう感じた昨年7月のブルーノート東京公演以上に、この新作は良いなあ。60年代から英語圏での活動にも積極的だったキャリアを今一度、総ざらい。81歳になったブラジルのベテランが、そういう充実を聴かせるアルバムだ。

2曲目はシカゴの『シカゴ13』に収録された曲のセルフ・カヴァー。英語詞は外し、スキャットだけで原曲よりも軽快に飛ばしていく。ジョイス・モレーノとの共作曲ではメランコリックな表情がふたりの共演の意味を伝えるし。7曲目の「フィール・ソー・グッド」はリオン・ウェアと共演した79年のナンバーで、見つかった当時のデモをベースにリオンとのシルキーな疑似デュエットを聴かせる。セウやモレーノ・ヴェローゾとの共作を挟んで、ラストはバート・バカラックへのトリビュート。トランペットの音色を前に出しつつ、マルコスも所属した60年代のA&Mサウンドを今に甦らせる。

プロデューサーはインコグニートのブルーイのご子息ダニエル・モーニック。ベース奏者は昨年の東京公演でも一緒だったアジムスのアレックス・マリェイロスだ。 **宮子和眞**

Brazil

Maria João & André Mehmari

『コットン』

マリア・ジョアン&アンドレ・メマーリ

ライス（オフィス・サンビーニャ）
GLR3283
¥3200／10・20発売
GLR50033（LP）
¥5000／10・20発売
（原題 "Algodão"）
●問合せ先＝048・814・0830
（オフィス・サンビーニャ）

ポルトガル人歌手と ブラジルの鍵盤奏者による初共作

03年にマリア・ジョアン&マリオ・ラジーニャ・カルテットとしての初来日公演を観た。ポルトガル人歌手のマリアは、それ以前からブラジル音楽に傾倒していて、07年には全編ブラジル音楽のカヴァーから成るソロ作を発表した。その後、彼女はギンガとの共演作を発表するなど、ブラジルの音楽家との親交をより深め、アンドレ・メマーリとも過去に一緒に録音している。ただ、共同名義アルバムは、これが初めてだ。

ここでのアンドレはピアノに加えて、エレクトリック・キーボードやハープシコード、ギター、ビートボックスなどを担当。大半の曲の作曲も彼だ。ただし、ギンガがアルジール・ブランキと共作した曲も3曲収録されている。もともとマリアは、多彩な声色と歌唱法を自由自在に使い分けながら歌い、童女のようにもなれば、老女のようにもなる。甲高い声を発する瞬間もある。そんな持ち味は健在。しかも本作では、二人の個性が相殺されているどころか、お互いの技巧的な側面がうまく噛み合っている。曲自体やアレンジは非常に凝っているが、これほどポップなエレガンスにあふれているとは。これは嬉しい驚きだ。 **渡辺亨**

CamScannerでスキャン

Nusrat Fateh Ali Khan & Party

...ウエイティヴィティが発揮された年録音の未発表音源の発掘

[illegible]

アフリカ他国音楽も消化したようなニジェールのバンドの3作目

Etran De L'aïr

"100% Sahara Guitar"

その名の通りにサハラ砂漠周辺のローカルな音楽シーンに精通し、エムドゥ・モクターらを世界に送り出してきたレーベルが数年前から手がけてきたニジェールのアガデスを拠点とするバンドの3作目は、米国西海岸のスタジオに赴いての初となる海外レコーディング作。聴き始める前には、より整った録音環境でラウドさとダイナミズムを高めた作品になっていると想像していたが、何だかそんな絵に描いたような"進化"とは違う方向に舵を切ってきたのがまずは痛快。ギターの歪みは過去作と比べてもむしろ控えめにしたクリアなトーンが目立ち、一歩間違えればスカスカになりそうな音像なのだが、その代わりにドラムとベースのリズム隊が存在感を増し、バンドが持っていたハチロク基調の独特なグルーヴがうまく浮き立っている。

特に独自のタイム感と手数の多さで浮えわたるドラマーが秀逸で、広い音域を奔放に動き回るベースとともに繰り出すグルーヴは、80年代前半頃のコンゴ産ルンバやンバクァンガの優良バンドを思い出させる。基本は砂漠のブルースだが、アフリカ他国の音楽の要素をより柔軟に消化したようなノリが新鮮だ。 吉本秀純

East Asia

Dalum

『コーエグジスタンス〜共存』

ダルム

ライス（オフィス・サンビーニャ）
INR33014
¥3300／10・6発売
INR60012（LP）
¥6000／10・6発売
（原題 "Coexsitence"）
●問合せ先＝048・814・0830
（オフィス・サンビーニャ）

伝統音楽家としての誇りが見える
韓国の2種類の琴によるデュオ

韓国において伝統音楽や古典芸能は「国楽（クガク）」と呼ばれ、その一部は保存の対象となっている。宮中の祭祀や民間信仰に基づいたもの、あるいはパンソリやサムルノリなど日本でよく知られる民衆の芸能も国楽の一部に含まれる。60年代以降、国楽の現代化を押し進める動きが始まり、現在では"プージョン国楽"と呼ばれるクロスオーヴァー的な潮流も活発化しつつあるが、正直なところ、かなり安直なものも少なくない（その点は日本もまったく変わらないが）。

6年前に結成されたダルムは、ふたりの若手演奏家によるデュオ。それぞれカヤグムとコムンゴという琴の演奏家であり、それ以外の音はほとんど入っていないストイックな作品だ。楽曲はおそらく彼女たちのオリジナルと思われるが、2種類の琴の音色の違いを活かしながら、現代的な響きを掘り取ろうというスタンスが各曲から垣間見える。凡百のフュージョン国楽のように音楽ジャンルの記号に頼ることのないその姿勢からは、伝統音楽家としての誇りと確かな美意識も見える。ECMの諸作品にも通じる静謐な音の世界が広がる力作だ。

大石始

J-Pop

Night Tempo

『Connection』

ビクター　VICL66013
¥3091／10・23発売

作品を出すごとに独自性を高める
韓国人プロデューサー／DJ

韓国人プロデューサー／DJの新作は、20年の『Concentration』に続くローファイ・シリーズの第2弾となるもの。通常の彼のソロにおける派手なダンス・チューンとは異なり、『Concentration』では音数の少ないアンビエント的サウンドにテレビのアナウンスなどのサンプリングをちりばめていたが、今回はやや変化している。ミディアム〜スローの落ち着いた作風なのは同様でありつつ、ヒップホップやファンクなどフロア対応のダンス・トラックが目立つし、土岐麻子による歌ものシティ・ポップもあり、膨らみのある仕上がりとなった。特に際立っているのが、広末涼子と南野陽子がボイトリー・リーディングで参加した2曲だ。どちらもポツポツと平坦なトーンで発声し、だからこその妖艶な匂いを醸し出しているし、アンビエント的トラックとの親和性も高く、とても新鮮で意欲的な試みといえる。

近年の彼はかつての80年代歌謡曲発掘といったところにとどまらず、作品を出すごとに独自性を高めてきていると思うが、本作は現時点での最たるものだろう。なによりも、今の時代の気分と合致しているところがしっくりくる力作だ。

小山守

CamScannerでスキャン

王舟
『Town Dune』
王舟（配信）
9・14発売

という間と永遠の両方を感じる
曲20分の新作

年は映画やドラマのサウンドト
ク制作で多忙な王舟。コロナ禍
にデジタル・リリースした前作
ulchra Ondo』（20年）は全曲イ
ストで、人間が消えた集落で賑わ
祭りを幻視しているような、うつ
な熱を持つ傑作だった。本作は約
4年ぶりの新作。劇伴仕事の合間に、
基本的にひとりで積み重ねた音源で、
大塚智之、谷口雄が2曲ずつ参加し
ているのみ。全11曲を最後まで聴い
ても20分しかない。

しかし、この短さこそがこの新作
の核心なのかもしれない。曲のなか
での時間と物語の使い方の話だ。限
られた時間で言いたいことを伝える
ために熱を込めたり起伏をつけたり
して感覚のなかの時間を伸び縮みさ
せる、というような演出はたいてい
のポップスでは無意識に行われる。
王舟がこのアルバムでやっている音
楽には、そんな演出がない。そして、
アンビエント・ミュージックが必要
とする長大な時間を2分でやってい
る。退屈な絵葉書のように、物語は
そちらにあるのではなくこちらに託
され、聴き手の感情は勝手に脈打ち、
乱される。そんな音楽、聴いたこと
なかった。この20分にあっという間
と永遠の両方を感じる。

松永良平

渋さ知らズ
『渋吼』
渋さ知らズ35 S001F
¥3000／10・13発売
●問合せ先＝03・5273・2821
（メタカンパニー）

昨年と一昨年のライヴを編集した
7年9か月ぶりのアルバム

結成35年目に立ち上げた自身のレーベルからの第1弾。『渋樹』以来の7年9か月ぶりのアルバムで、昨年と一昨年の東京・吉祥寺のマンダラ2でのライヴを編集した作りだ。大所帯の楽団のイメージもあるが、ステージが広くない会場だから10名でのパフォーマンス。バンマスの不破大輔は、渋さ知らズだと〝ダンドリスト（＝指揮者）〟として知られているが、本作ではコントラバス（＋ウクレレ・ベース）を演奏している。

約54分3トラック入りのCDながら、実際には8曲収録。曲がダブっていて中盤には「行方知れズ」が3回、「渡」が2回披露されるが、気にならない。不破作曲のクレジットでも前者は優雅なフリー・ジャズの趣で、三角みず紀の作詞の後者は歌もの。その「渡」と同じく玉井夕海が歌う2曲が、やはり本作のハイライトだ。彼女が意訳した日本語の歌詞のビクトル・ハラの「平和に生きる権利」も、劇団・水族館劇場の『新漂流都市』の主題歌「堕天使たちのバラード」も、気負わぬ歌唱が光る。

二つ折り紙ジャケットの表と裏と同じくポップな絵柄で味のある色合の、小林亮平による絵の六つ折りミニ・ポスターも封入。

行川和彦

CamScannerでスキャン

竹内まりや
『Precious Days』

ワーナー
WPCL13607
¥3100／10・16発売
WPZL32156〜7（限定CD+DVD）
¥8000／10・16発売
WPZL32154〜5（限定CD+ブルーレイ）
¥8000／10・16発売
WPJL10222〜3（限定2LP）
¥5000／10・16発売
WPTL10005（限定カセットテープ）
¥3100／10・16発売

10代の頃ポップスに夢中になっていた邪気のない彼女を連想させる新作

ずっとこういう竹内まりやが聴きたかった！と思える曲が冒頭から続く。ポップで躍動感があって瑞々しくて、アメリカのオールディーズやマージー・ビートへの圧倒的な敬意に満ち満ちていて。いくらシティ・ポップ・ブームで世界的に評価されようとも、いくら絶対的な人気を獲得していようとも、いくらベテラン呼ばわりされようとも、心は欧米のポップスに憧れていたティーンエイジャーの頃のまま。竹内まりやの音楽はそういうものであってほしい、とリスナーとしては勝手な願いがあり、そして、この10年ぶりの新作は、それに応えてくれるものでもある。

ただし、それはあくまで曲調に限ってのこと。歌詞においては生き続ける難しさや厳しさを黙って受け入れ、終わりゆく日々への感謝の心情を綴った表現が多数、目に留まる。山下達郎が曲を書いて竹内が歌詞を書いた「Days of Love」など、ヘンリー・フォンダとキャサリーン・ヘプバーンによる老年の男女を描いた映画『黄昏』を思い出させ、まるでもう人生の最晩年を迎えているかのようだ。5年前の「紅白歌合戦」で披露した「いのちの歌」のような、優しさを失いつつある今の時代に訴えかける曲…たとえば「ベイビー・マイン」「今を生きよう」「歌を贈ろう」あたりになると、そうした歌詞がより切実に響く。むろん世界中で苦しんでいる様々な立場の人に寄り添って書かれた歌詞のようにも思えるし、そもそも全18曲中15曲がタイアップや提供曲なので100％彼女の思惑とも言い切れない。けれど、50代から60代へと年齢を重ねていった彼女のこの10年間の心の動きは少なからず表出されているはずだ。

だが、それでも本作は、10代の頃のポップスに夢中になっていた邪気のない彼女を連想させる。それはひとえにフレッシュなアレンジと演奏、そして彼女の生き生きとしたヴォーカルに現れた、ポップスへの一途な憧れに一点の曇りもないからだ。例えばドゥーワップに始まり軽快に展開していくオープナー「Brighten up your day!」、マージー・ビート調の「小さな願い」、あるいは盟友の杉真理と松尾清憲によるBOXの「TOKYO WOMAN」のカヴァーなど初期作品を思わせる、彼女の音楽ルーツを素直に引き出した曲。もともと彼女の歌には音域が低めでもどこかブライトな、アメリカ西海岸の天候のようにカラっとした響きがあるので、いくら年齢を重ねてシビアな状況を歌にしても、それを声一つで希望の光へと転じさせることができる。これら躍動的な曲ではまさにその魅力が生かされているといっていい。

そして、なにより山下とデュエットしたエヴァリー・ブラザーズ「All I Have To Do Is Dream」、アンディ・ウィリアムスで知られる「May Each Day」のカヴァー…いずれもノン・タイアップの2曲が素晴らしい。大学の音楽サークルで歌っている若き日の彼女が目に浮かぶ。自由に選曲して自由に歌っていいなら、きっと竹内（と山下）はこういう曲を楽しんでとりあげるのだろう。確かに彼女には年齢を重ねる美しさも求めたい。だが『黄昏』となるにはまだまだ早いと思うのだ。**岡村詩野**

CamScannerでスキャン

Rei

『XINGS』

レイ・ニイミ・ヒロシ

UCC-12243(SHM-CD)

¥2500／10・9発売

UCC-19252(限定DVD/DVD+SHM-CD)

¥5000／10・9発売

響源がファンキーなギターのレーズとともに迫るユニークさ

シンガー・ソングライター、ギタ
ーの[illegible]が動作をトロップ。前
『VOICE』は歌が中心の作風
だが、今回は歌を大事にしつつ、
いわりギターもプレイ。これまで
の集大成と言えるかも。MONJO
との共作曲『BLOOD』『エコロ』や
リリー・ウォンとの共演とも、た
『ゴロ』『BLUE』などではウォーカ
ル表現のいろいろを非常に際立ってお
り、経験が活かされているのが分か
る。特に、[illegible]
[illegible]
加えて特筆すべきは、楽曲構成の
面白さだろう。『[illegible]』など

を聴いていると強く感じるが、いく
つかのアイデアをシームレスに繋げ
るよりも、ある種の歪さを伴いなが
らつぎはぎ的に表現される楽曲群が
面白い。もちろんそこで重要な役割
を果たすのがギターなわけだが、フ
ルーズ由来の味のあるプレイが糊代
にな、てエモーションをかき立てる。
ポップス然としたメロディの背後に
は脱大なジャンル、様々な時代の音
楽が透けて見えるし、そういった影
響源がファンキーなギターのフレー
ズとともに断片的に迫ってくる様子
はユニーク。半ば曲芸のような作品
と言えると思う。

つやちゃん

秘密のコペカチータ

『たのしいトークショー』

Pヴァイン PCD2543

¥2500／10・16発売

●問合せ先＝03・5784・1253

(Pヴァイン)

色々なものが摩訶不思議に混在するどこにも収まらないチャーミングさ

何か理由があって泣いてる人も、
イクアナもアライグマもマントヒヒ
も、みんなニコニコ踊りだす。でも
翌日に、身に覚えのない擦り傷を膝
頭に見つけたりする。そんな謎めい
た楽しみを教えてくれるのが、この
秘密のコペカチータだ。

仙台で屈託のないオルタナ・バン
ド、ジ・アーノルズを組んでいたあ
べあおい（阿部碧依）が、元・奇妙
礼太郎トラベルスイング楽団のリー
ダー、ベベ宏田の全面サポートで結
成したバンド。色々なものが入り混
じったサウンド・メイクで、リズム
&ブルースやオールディーズ・ポッ

プスのクリシェと、80年代直系のポ
ップでストレンジ系の世界観とが摩
訶不思議に混在している。『バッド
・エンド』の中で、ヴァン・ヘイレ
ン『プリティ・ウーマン』のリフが
引用されているのにはかなり笑った。

とはいえやはり、一番の売りはあ
べあおいのコケティッシュな歌声。
吐息とともに歌われる『月刊マーガ
レット』や、やや『夜鶴のハウスマ
ヌカン』への30年遅れのアンサー・
ソング『ハウスマヌカンの一生』な
ど、どこにも収まりきらない彼女の
チャーミングさが、とてもよく発揮
されていると思う。

小川真一

J-Pop

Perfume

『ネビュラロマンス 前篇』

ユニバーサル
UPCP1010
¥3500／10・30発売
UPCP9038（限定CD+ブルーレイ）
¥5900／10・30発売
UPCP9039（限定CD+DVD）
¥5000／10・30発売

レトロでありながら懐古とは無縁の瑞々しい25周年記念作の前編

Perfumeがデビュー25周年を迎えた。99年に結成されてからしばらくは下積みを味わいながら、07年発表のシングル「ポリリズム」でブレイクを果たして以降は、J-POPの最前線で活躍を続けているのは周知の事実だろう。19年のコーチェラ、23年のプリマヴェーラ・サウンドといった海外の有名音楽フェスに出演するなど、その人気は日本国外にも及んでいる。

彼女たちが日本のポップ・ミュージックにもたらした変化は数多い。なかでも、07年のサマーソニックに出演したのは、ロック・フェスにアイドルが多く出るようになった現在の流れを作ったという意味で、重要なトピックのひとつだ。YouTubeなどのネットをきっかけにファン層が広がった歩みも、SNSを駆使したプロモーションがあたりまえになったいまを先取っていたと言える。

そんな彼女たちの最新アルバムが『ネビュラロマンス　前篇』だ。デビュー25周年を記念して作られた本作は、前後編に分かれたコンセプトアルバムの前編にあたる。作詞作曲は、06年のセカンド・シングル「コンピューターシティ」から彼女たちの全楽曲を手がけている中田ヤスタカだ。その中田曰く、本作は宇宙の星々や都市を舞台に彼女たちがスリリングな冒険やドラマを繰りひろげるスペース・ロマンス、いわば架空のサウンドトラックだという。確かに、ダフト・パンクを思わせるロボットがフィーチャーされたジャケットと同様、宇宙的雰囲気を前面に出した音が耳に残る。そういう意味では、彼女たちがこれまで残してきた音楽や近未来的世界観と地続きの作品と言っていい。

本作を聴いて真っ先に想起したのは、80年代のポップ・カルチャーから多大な影響を受けたシンセウェイヴという音楽だ。00年代半ば頃に生まれたとされるシンセウェイヴは、レトロフューチャーなアートワークや近未来的響きを持つダンサブルなシンセ・サウンドが特徴だ。デュア・リパやザ・ウィークエンドが取りいれたことでも知られている。ジャケットのデザインも、シンセウェイヴ系のレーベル＝ニューレトロウェイヴを彷彿させる。そうした音楽の要素が特に顕著なのは5曲めだ。どこか郷愁的かつSFチックなサウンドに性急なグルーヴが交わる曲調は、もろにシンセウェイヴと評せる。

サウンドの響きと綿密に絡みあったメロディアスな歌詞も本作の魅力だ。特に8曲めのリズミカルな譜割りは聴いていて非常に心地よい。リズムが生みだす波を乗りこなすかのようにひとつひとつ言葉を重ね、聴き手の体を揺らしてくれる。この側面は彼女たちの過去作でも楽しめるが、そういった側面が作品を重ねるごとに深化し、熟練の職人による高度な工芸品みたいな滋味を得るに至っているのは驚異的だ。

本作は、レトロでありながら懐古とは無縁の瑞々しさという彼女たちの独自性が輝かしい。そんな孤高混じりの輝きを放てるようになったのは、ぶれずに自分たちの表現を突きつめてきたからに他ならない。『ネビュラロマンス　前篇』を聴いて、Perfumeの代わりはどこにもいないのだとあらためて感じた。**近藤真弥**

CamScannerでスキャン

J-Pop

でんぱ組.inc

『We need the DEMPA』

ミーム・トーキョー（トイズファクトリー）
TFCC81067（限定）
¥2545／10・8発売

アイドルにおける実験の歴史が終わりを迎える最後のEP

25年1月に〝エンディング〟を迎える――つまり解散するでんぱ組.incの最後のEP。

〝アキバ系〟と呼ばれる文化から生まれたでんぱ組の音楽的な功績のひとつは、玉屋2060%が作詞作曲編曲した「奈良繁盛！元祖電波屋！」の歌詞にも出てくる〝情報過多〟であり、でんぱ組の楽曲は生バンドで演奏されると、さながら倍速になったPファンクだった。冗談だと思うなら、このEPのジャケットを見ればいい。

清竜人の作詞作曲編曲による「ビールは20歳になってからじゃ」は、甘さが飽和しそうなテクノ・ポップ。まさにアキバ系の「命・愛・滅る・ぷゅー！」に、自然なイントネーションで歌詞を配した桃井はるこの手腕には唸った。

かと思うと、「だって、わたし達は」のようなダンス・ミュージックそのもののトラックの楽曲も。この容赦のなさは、でんぱ組が最後まででんぱ組であることを感じさせる。最後の「BPM285EX」で描かれるのは、宇宙へと去っていく姿。でんぱ組の歴史とは、J-POP、そしてアイドルにおける実験の歴史であったのだ。

宗像明将

J-Pop

Gacharic Spin

『Feast』

クラウン
CRCP40693
¥3273／10・9発売
CRCP40692（限定CD+2ブルーレイ）
¥13636／10・9発売

15周年を記念して最新の姿を表わすガールズ・ミクスチャー・バンド

このアグレッシヴなガールズ・ミクスチャー・バンドには紆余曲折の歴史があったが、2019年に〝マイク・パフォーマー〟のアンジェリーナ1／3とドラムスのyuriが加入してからは、バンド史上最高というべきアンサンブルが構築されているだろう。とりわけ、ラップも披露するアンジェリーナとはなのヴォーカルの対比は実にスリリング。もちろんF チョッパー KOGAの超絶ベースや、TOMO-ZOの切れ味鋭いギター、それらを下支えするオレオレオナの変幻自在のキーボード・ワークにも毎々驚きがかかっている。

そんな彼女たちが15周年を記念してリリースする本作。これまでライヴで披露されてきたものの音源化されていなかった楽曲や、インディーズ期の人気曲の再録、さらには現体制での新曲などを収録したものだ。彼女たちの最新の姿を映し出すと同時に、バンドの歴史を辿るような側面もある。まさに〝ご馳走＝feast〟のような一枚。こうして聴いてみると、高い演奏技術もさることながら、メインストリームのJポップを想起させるキャッチーなメロディーと、それを聞かせるアンサンブルの妙を改めて思い知る。

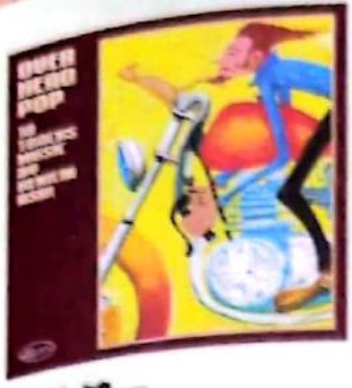
石川真男

CamScannerでスキャン

前号のインタヴューによると、「明るくて元気で面白いところをフィーチャーした」というソロ名義の新作。なるほど、"この世の半分が悪魔だったとしても そんなのに負けるな"（「Calm Lula」）とか"約柄のサンダル壊れちゃった 家族旅行で買ったやつさ11年前 バラバラになっちゃったよ"（「POPCORN」）とか、はっとするフレーズを不意に挿し込みながら、言葉遊びが楽しいファンタジー度5割増しの歌詞は、そういうことだったわけか。

ともにスケールの大きさも聴きどころとなっているメランコリックな「POPCORN」、バラードの「けっして」以外はポップなロックンロールが並んでいるが、「Wild Summer」他の60年代のビート・バンドを連想させる演奏や、「あおるなよ」のドラムの2ビートは意外性という意味も含め、聴きどころと言えそうだ。浅井が重ねる複数のギターのアンサンブルも、「Wild Summer」のツイン・リードをはじめ、これまで以上に大胆なものになっている。ツアーでどう再現しようか、頭を悩ませている浅井の姿が目に浮かんだ。「Come on Cushion Fight」ではサーフ・ギターも鳴る。 **山口智男**

言葉遊びが楽しい歌詞による ポップなロックンロールが並ぶ



Rock [Japan]

浅井健一

『OVER HEAD POP』

セクシーストーンズ／アリオラ（ソニー）
BVCL1434
¥3000／10・9発売
BVCL1432～3（限定2CD）
¥4500／10・9発売

ハナレグミこと永積崇は独特の歌い回しと声が本当に唯一無二で、カヴァーをやったらどんな曲も彼の歌になる。オリジナルではその個性が当たり前に聞こえて、曲の魅力を伝えきれないことがあるのが困りもの。それを超える方法として、今回のようなコラボは有効だと思う。

これまでもいろいろなコラボをしてきてはいるが、今回は予想外の顔合わせがおもいがけない効果を生んでいる。詩人の御徒町凧と詞を共作した「ビッグスマイルズ」など2曲や、iriとの共作・共演曲「雨上がりのGood Day」も新鮮だが、最も耳目を引くのはマヒトゥ・ザ・ピーポーの提供曲「どこでもとわ」。数年前からの知り合いだそうで、この曲を聴くと二人には通じるところが案外あるのだなと思えてくる。歌うことを自問していたという永積への素敵なエールのようだ。

コロナ禍のあいだも自問しつつ写真にハマり写真集を出し、それが自己肯定に繋がったこともあり、音楽との向き合い方が変わったとか。本作のコラボも積年の逡巡を超えるツールになっているのではなかろうか。腰の重い永積が新たな一歩を踏み出した日こそ吉日だ。 **今井智子**

積年の逡巡を超える ツールとしてのコラボ作

Rock [Japan]

ハナレグミ

『GOOD DAY』

ビクター
VICL65999
¥2700／9・25発売
VIZL2356（限定CD+DVD）
¥6000／9・25発売

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

あがた森魚

『オリオンの森』

キュポラパープルヘルツ QPHZ027
¥3000／10・30発売
●問合せ先＝03・3710・8049
（プリッジ）

ストレートな歌モノばかりのコンセプチュアルなアルバム

11年以降、1年に1作のペースでアルバムを発表しているあがた森魚。76歳となったが、ライヴでもまだまだ歌声は衰えを知らない。

このアルバムでは、共同プロデュースに伊藤彼方と塚原義弘を迎え、近年のあがたのサウンドの流れを汲んだローファイなサウンドと、キャッチーなメロディーが展開されていく。そして歌詞は、記憶から湧き出たかのように過去から現在までを行き来しており、その時間軸の揺らぎこそが近年のあがたの真骨頂だとも感じる。リンドバーグ夫人、小樽、ハリー・バーチ、リチャード・トンプソンなどが登場するように。

楽曲がつながっている箇所も多く、さながらコンセプチュアル・アルバム。また、近年のアルバムではポエトリー・リーディング的な要素も多かったものの、このアルバムはストレートな歌モノばかり。あがた節が並ぶなかでも、川口義之が作曲、あがたが作詞と編曲を担当した「ボンネットバス」は、突然視界が変わったかのような新鮮さがある。必ず届けられるであろう次のアルバムでは、こうした提供曲をあがたが調理するアプローチをもっと聴いてみたいところだ。

宗像明将

Rock [Japan]

cero

『Live O Rec』

カクバリズム（配信）
9・11発売
●問合せ先＝ kakubarhythm.com
（カクバリズム）

ライヴの演奏から発する熱をいかに固定化するかという試み

ceroの初となるライヴ・アルバム。これまでもライヴ映像作品はあったが、あえて〝ライヴ音源作品〟と謳っていることには意味がある。これは23年12月2日と3日に恵比寿リキッドルームで行われたライヴの音源をベースに、録り直しやオーヴァー・ダブ、編集を加えたものだ。映像と音のシンクロの問題もあったのだろうが、ライヴ演奏の再生を目的にしていないところが重要だ。

ご存知の通り、ceroというバンドは作品を発表することに新しい方向性を示してきた。ライヴでもスタジオ録音の再現を目指すアーティストがいる一方で、ceroは過去曲を演奏してもグレイテスト・ヒッツ的な感覚で再現するのではなく、その時のモードでアレンジや演奏も変わっていく。ここでの演奏は昨年出た『e o』の感性を落とし込んだ上で、フローであるはずのライヴの演奏から発する熱のようなものをいかに固定化するかという試みを行なっているのだろう。フランク・ザッパ方式とまではいかないが、ライヴ演奏というDJミックスのようなものと解釈できるというと言い過ぎか。

なお、CDの販売はライヴ会場とレーベル直販限定となる。

池上尚志

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

小西康陽

『失恋と得恋』

ヴァーヴ(ユニバーサル) UCCJ2240
(SHM-CD)
¥3200／10・30発売

歌唱の色艶、演奏のきらめきにも心を揺さぶられるヴォーカル作

近年、自身が過去に作曲した曲を自ら歌うというパフォーマンス形態を継続的に展開している小西康陽。本作は、個人名義では初となるヴォーカル・アルバムだ。ピチカート・ファイヴのレパートリーに他アーティストへの提供曲をプラスした全15曲を、矢舟テツロー・トリオを中心とするバック・ミュージシャンとともに、丁寧に再構築している。

傑出したコンポーザー／詩人たる氏の才能を再確認できるのはもちろん、その歌唱の色艶、演奏のきらめきにも否応なく心を揺さぶられる。いわゆる〝ソングライター・ヴォイス〟の美学を色濃く湛えた歌声は、カラオケ的な意味での〝技巧的歌唱〟とはほど遠いかもしれないが、それよりも何よりも、他に類のない温かな親密性と洒脱さが宿っているのだ。

アレンジも秀逸だ。小西自身が愛するティム・ハーディンやボブ・ドロー等を彷彿させるジャズ＋ポップス風の妙味は、実に繊細なバランス感覚あってこそ達成できる類のものだろう。他方、室内楽～コンテンポラリー風のアレンジも顔を出す。その油断のならなさよ。スリルと安らぎ、苦味と甘味。ヴァーヴのロゴが誇らしげに輝いている。

柴崎祐二

Rock [Japan]

カジヒデキ

『BEING PURE AT HEART ～ありのままでいいんじゃない』

ブルー・ボーイズ・グラブ／
AWDR/LR2(スペースシャワー)
DDJB91251 (LP)
¥4000／11・3発売
●問合せ先＝03・5766・1321
(スペースシャワーネットワーク)

数世代下と共演しつつネオアコの懐の深さを改めて探求

今年4月に発表されたカジヒデキ19枚目のアルバムが、〝レコードの日〟開催を期にLP化。ネオアコ、ギター・ポップにおける〝伝道師〟的な役割を担い、様々なテーマと接着させてきたが、ここにきて全面的に向き合っている。しかし原点回帰というより、いい歌とギターによってこのジャンルはいくらでも華やぐのだと、ネオアコの懐の深さを改めて探求しようという趣が強い。

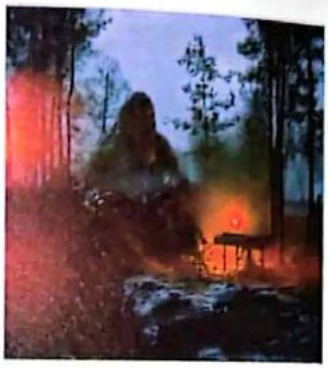
中でも数世代下と共演した楽曲がフレッシュで、表題曲では〝ネオネオアコ〟を自称するバンドZaoのオオニシレイジによる疾走感のある爽やかなギターと、かなふぁん(kiss the gambler)の屈託のないコーラスが全体のトーンを決定づけている。また「手をつないで歩こう」でのみらんによる特徴的な抑揚のコーラスや、「きみのいない部屋」では物語の種明かしをするZao☆の語りも作中随一のハイライトだ。

青春、夢、ピュア。関わる人を輝かせながらも、こんなキラキラの言葉が様になる57歳が他にいるだろうか。タイトルからはあのUSバンドを想起するが、〝痛み〟を除いて冠するところに、てらいのないポジティヴさを感じる。

峯大貴

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]



Bialystocks

『Songs for the Cryptids』

ポニーキャニオン
PCCA06325
¥3000／10・2発売
PCCA06324（限定CD+ブルーレイ）
¥5000／10・2発売

艶を増した歌声とメロディーのよさが際立つ3作目

映像作家でもあるヴォーカル＝甫木元空と、ジャズを背景に持つピアニスト＝菊池剛の二人組によるサード・アルバム。前作『Quicksand』ではバンドでのライヴの充実ぶりを示すように、曲によってプログレばりのサイケデリック・ロックを鳴らしていたが、本作はむしろミニマムな空気感が特徴だ。7拍子を基調とした「空も飛べない」、ツイン・ギターによるハモリがクイーンを連想させる「Kiss」、「ブライン・ディング・ライツ」的なエレクトロ・ポップをフォークの楽器編成で表現したような「近頃」という冒頭3曲の時点で、彼らのアレンジ能力の高さは十分伝わってくる。

ただ、やはり全体的に音数は削ぎ落とされていて、アルバムの軸となっているのはさらに艶を増した甫木元の歌声とメロディーのよさ。〝未確認動物のための歌〟というタイトルが象徴するように、本作で重要なのは想像力であり、収録された楽曲はそのためのトリガーで、だからこそ余白が大事にされているのだろう。今年のライヴでは演劇要素を取り入れたりもしていたが、この楽曲たちがステージでどのように化けるのか、今からとても楽しみだ。 **金子厚武**

J-Pop

CRYSTAL

『In A Cocktail Glass』

フラウ FLAU103B（LP）
¥4500／10・9発売
●問合せ先＝ flau.jp（フラウ）

歌謡シティ・ポップ的なメロディをキラキラしたシンセでコーティング

ブラウン管に映し出されるパーム・ツリーと摩天楼。このヴィジュアル・イメージが物語る通り、80年代へのオマージュがたっぷり詰まった作品だ。いや、パロディなのかもしれないが、ともかく、あの頃あんな曲があったかもなあと思わされるサウンドが満載で、特定の世代は思わずにやけてしまうことだろう。

CRYSTALは三宅亮太と丸山素直によるシンセサイザー・デュオで、フレンチ・エレクトロの代表的なレーベル＝アンスティチューブからデビューを果たしたという国際派。本作は3作目であり、ベット・ショップ・ボーイズを思わせるシンセ・ポップに、昭和の香りを盛り込んだ作品に仕上げている。「彼女のオートバイ、彼の島」なんていう曲名がさりげなくあるし、オメガトライブを思わせる歌謡シティ・ポップ的なメロディをキラキラしたレトロフューチャーなシンセでコーティングするなど、新しさと懐かしさが入り混じる奇妙な感覚が魅力的だ。ヴェイパーウェイヴやシンセウェイヴの影響も感じられるが、「One More Chance」なんかは普通にヒットしてもおかしくないポップ曲。面白い展開になることを期待している。 **栗本斉**

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

柴田聡子

『My Favorite Things』

AWDR/LR2（スペースシャワー）
DDCD12123
¥3000／10・23発売
●問合せ先＝03・5766・1321
（スペースシャワーネットワーク）

バンド・サウンドでのアルバムを弾き語りでひとりで歌った作品

今年2月に新作『Your Favorite Things』を発表した柴田聡子。タイトなバンド・サウンドと緻密なスタジオ・ワークから生み出されたそのアルバムを、弾き語りでひとりで歌ったのが本作だ。弾き語りアルバムは『いじわる全集』以来10年ぶり。それ以降、彼女はバンド・サウンドに磨きをかけてきたが、本作は原点回帰ではない。過去の弾き語り作品とは印象が違うのは、『Your Favorite Things』に続いて岡田拓郎がプロデュース、アレンジ、レコーディングに携わったからだろう。

以前の柴田の弾き語り作品は、彼女が歌をネイキッドな状態で届けるための真空パックだった。本作ではマイキングやミックスでこまやかに演出。そうすることで、『Your Favorite Things』で変化した柴田の歌声の変化を、まるで布地に触れるように感じられる。楽器の音色はもちろん、空間のアンビエンスにも注意を払ってひとりの世界を構築。ピアノを弾きながら歌う「Movie Light」の天窓から朝陽が射し込んでくるような崇高さ。「うつむき」で多重コーラスが入ってくる時の驚き。まったく新しいアルバムを聴くような発見に満ちている。**村尾泰郎**

J-Pop

Cö shu Nie

『7 Deadly Guilt』

ソニー・ミュージックアソシエイテッド
AICL4612
¥3272／9・11発売
AICL4610（限定CD+ブルーレイ）
¥5000／9・11発売

すみずみまで美意識が行き渡った鮮明な音が響く3作目

複雑で変則的なロックを軸に、凝ったアレンジで異彩を放つ二人組バンドのサード・フル作。"自己愛の復活"をテーマに、ブレイクビーツやR&B、ジャズなど多様なジャンルを横断しながらモダンなサウンドを奏でる。これまでは過剰なほど情報を盛り込んだカオティックな作りが特徴的だったが、今作ではぐっと音数を絞り、すみずみまで美意識が行き渡った鮮明な音が響く。

各曲にはそれぞれ濃密な物語がある。例えば「Artificial Vampire」は、吸血鬼が血を求めるように、人工知能が情報を収集する歌。あえて耳あたりのいいダンス・ポップで、バンドの指揮官である中村未来が"君もいつか尽きるんだから与えてください"と甘くささやく。出来の悪い人形が主役の「I am a doll」はチリチリしたノイズとピアノだけをバックに、つぶやくように愛を乞う。猛烈な勢いでAIが迫りくる現代社会の生きにくさをダーク・ファンタジー風のタッチで描き、時代と並走する作品。自己の存在を確認する楽曲では救済のイメージを示すが、従来の陰りを帯びたキャラクターも相まって、恐ろしくも魅惑的な世界が広がっている。**甘楽玲子**

CamScannerでスキャン

J-Pop

ゆっきゅん

『生まれ変わらないあなたを』

ギルティ・キュン
GKR013TSET
¥3000／9・11発売
GKR013DSET（限定CD+DVD）
¥5000／9・11発売
●問合せ先＝ uma-tao.jp
（ギルティ・キュン）

全曲自身による歌詞で楽曲も幅広くなったセカンド・ソロ

アイドル・ユニット＝電影と少年CQのメンバーであり、作詞や執筆などでも活動している人で、約2年半ぶりのセカンド・ソロ作。前作『DIVA YOU』ではエレクトロ・サウンドとヴィブラートを多用したナルシシスティックなヴォーカル、というスタイルで統一していたが、今回はかなり幅広くなった。前作を受け継ぐ曲がありつつも、バンド・サウンドを取り入れ、ヴォーカルもナチュラルな歌い方が目立ち、リリカルなバラード曲もあったりして、ポップ度が増している。中でも白眉なのが君島大空と組んだ「プライベート・スーパースター」。君島らしい爆音オルタナ・ロック・サウンドが炸裂し、二人でエモーショナルかつパワフルに絶叫し歌いまくっていて、新鮮な驚きをもたらしている。

なによりもキモとなるのは全曲自身による歌詞だろう。今の時代の気分をサラリと込め、言葉そのもののインパクトや響きを重視したキラー・ワードが頻発し、それでいて微妙に揺れる胸の内をうまくすくい上げていたりする。たとえば「横嫌悪いのに踊ろうよ」なんてグッとくる表現ができる、今の国内シーンでは希有な才能の人だと思う。

小山守

Rock [Japan]

夕食ホット

『田辺くんとこはるちゃん』

ホット・プレート HPCA0004
¥2000／11・1発売

最小限のリズムを加えて歌の輪郭をうまく引き出した作品

本アルバムを聴いて、歌の良さが強く浮かびあがる作品であるともに、臨場感と没入感が非常に強い作品だなと思った。天井の高いライヴ会場やコンサート・ホールの中でじっくり音楽に耳を傾けて身体を委ねているような感覚になる。実際のところ、資料を見ると、「巡り巡って、歌とピアノ（と最小限のリズム）だけでライヴをするようになってきた」「このアルバムはそんな、『最近ライヴでやっている感じの音』でできている」と書かれている。シンプルな構成もそうだけれど、リヴァーブがかったヴォーカルやトラックの響きもライヴを想像させるようなミックスがされていて、とても親密な気持ちを抱くことができる。

最小限のリズムとは言っているが、必要ある場所にはしっかりと加わっており、エレクトロニカと最近のヒップヒップのビートの鳴りをうまく取り入れたサウンドが歌の輪郭をうまく引き出している。本作は歌もの作品であり音響作品でもあるんじゃないかと思うくらいだ。最終曲「何気ないビート」の「ステーキみたいに分厚いルール」などのフレーズもいいし、音が重奏的になるエンディングもすごく心地いい。

西澤裕郎

CamScannerでスキャン

クロス・レヴュー

CROSS REVIEWS

スパイア・ガルシア
『オデッセイ』
（ユニバーサル／ヴァーヴ）CD

今井智子

鋭さと品の良いジャズに軸足を置きながら、それをゴリ押しするようなところはなく歌と間の風通しの良さがある。なので私のような門外漢にも聴きやすい。クール・ジャズとは違うクールなジャズ。体力や熱量で聴かせがちなサックスを、このように聴かせるのが彼女のスタイルなのだろう。それを伝えるための曲なのだろう。エスペランサとの共演に、その思いが共鳴しているように思えた。 [9]

栗本斉

エスペランサが客演した荘厳で壮大なオープニングから一気に引き込まれる。どの曲もテナー自体は非常にメロディアスで、ストリングスを含むアレンジやアンサンブルもよく練られている印象。特にヴォーカル入りの楽曲の歌と楽器のバランスは絶妙で、演奏者というよりは作曲家としての才能により魅力を感じる。新世代ジャズの潮流がどうこうという以前に、音楽として素晴らしい。 [8]

高久大輝

昨年の来日公演ではつい身体を揺らしたくなるような素晴らしい演奏を届けてくれたスパイア・ガルシアの新作。前作ほど折衷的な要素は多くはなく、だけど複雑で華やか。中でも先行リリースされていた「ザ・シーア」の爽快感に溢れたドラムとサックスはとても晴れやかな気分にしてくれる。スパイアによるオーケストラ・アレンジによって、持ち前の軽やかさと重厚感が全体に同居している印象。 [9]

久保太郎（本誌編集部）

前作では自身のカリブ・ルーツを[illegible]伸びやかな演奏を聴かせていた南ロンドンのサックス奏者の2作目。これが前作とはかなり異なる意欲作で、冒頭と終盤の数曲に登場する流麗なストリングスがアルバムを印象づける。随所に挿入される女性ヴォーカルが全体にうまくアクセントをつけていて、有色人種であり女性である自身と同胞たちを力づけるエンパワーメント作としても充実している。 [9]

ジョーディー・グリーブ『ザ・ミュー・サウンド』

井上園子『ばころひ』

資料を見ると録音したスタジオがサンパウロとロンドンでなカ所。参加演者は30人超えだそう。だが大所帯感はない。キース・ジャレットに倣った手法らしい。ジャケ絵が怖くてスティーヴ・アルビニみたいな前衛音楽を想像したが、ジャズやロックの定番手法を使いながら独自に新たなポップ・ソングを作ろうとしているのでは。発想は面白いが、ちょっと生真面目すぎな感じもする。 [8]

ブラック・ミディのあのヘンテコなイメージはそのままに、パフォーマーとしてのびのびと好きなことを追求した作品ということなのだろう。バンドではやりきれなかったことを振り切ってやりたい放題やってやろうという意気込みが伝わる。とにかくテンションが高く、ジャズ、プログレ、ラテン、ブラジル音楽などのエッセンスがちりばめられていて、聴き進めるごとにワクワクさせられる。 [9]

ブラック・ミディの元フロントマンのソロ作品とあって過剰と言えば過剰だが、両者の作品では大きく印象が違っている。とても雑に形容するなら本作はエンタメっぽく、映画の中に誘い込まれたかのようなサウンド。たしかにグリーブのパフォーマー／ソングライターとしての才能の眩さは聴いていればわかるが、同時にバンド時代のどうしようもないカオスが恋しくなるという意見もわかる。 [7]

バンドの活動休止を発表してすぐに発表されたブラック・ミディのメンバーのソロ。まるで70～80年代前半のサルサのような高揚感と歌心が聴けて驚く。同時にデイヴィッド・ヨハンセンやデイヴィッド・リー・ロスのような、実はロックよりもそれ以前のポピュラー・ヴォーカルが好きな感じのミュージシャンの系譜に位置する人であることもわかり、ブラック・ミディよりもさらに面白かった。 [9]

令和の浅川マキとの説だが、私の感想はインタヴューにも出てきた高田渡（女性版）。しっかりした歌と演奏で身近なことを批評性も込めて歌うところは、本人の意図とは違うのかもしれないがブルースのスピリットを感じる。今回この企画で並ぶベッカ・スティーヴンスのように、さらに尖っていくのだろうか。それともカネコアヤノばりに爆発していくのだろうか。先の読めない面白さはある。 [7]

声が非常に魅力的。冒頭の曲で語りが入ることで非常にインパクトがある。70年代の中山ラビのようだし、曲によっては高田渡を思い出す。なぜ今こんな人が登場してきたのだろうという驚きと面白さがある。ただ、本人はどう自覚しているのかはわからないが、少しそこを狙いすぎているのでは。もうちょっと抒情的ないい歌を追求してほしい。「てめえがやれよ～♪」と言われると困るけど。 [7]

前情報なしで聴いて驚いた。冒頭の「三、四分のうた」から聞こえてくるのは歌というよりポエトリー・リーディングに近い声だ。その後もヒップホップ的な匂いのする言葉選びのセンス、クセのある節回しの歌などが光り、非常に尖っていてカッコイイ。何より、ままならない日々を蹴り飛ばすような力のこもった声が良い。これを一発録りでやりきっているというのにも地肩の強さを感じる。 [9]

湘南のバーで歌っていてデビュー、というだけで好感を抱いてしまう飲み屋好きのハマっ子ですが、この人は確かに聴き手を引きつける独特の魅力がある。基本的にはダメな自分を軽い諦念をもって見ているような詞で、歌いまわしにはかなりクセがある。しかし独りよがりに陥らないのは、発声がしっかりしていることと、聴き手に直接鍛えられているからだろう。今後の展開にさらに期待。 [8]

CamScannerでスキャン

MJ Lenderman
"Manning Fireworks"
Anti-

ミージア
『アニマル・センティメンタル』
ライス(オフィス・サンビーニャ)
GLR3275

今井智子

"Z世代のニール・ヤング"なんて言われてるし、いい奴なんだろうなと歌を聴いて思うけれど、ヤングと重ねるならもっとヒリヒリするような歌や曲であってほしい。なんて書くのが一番彼の本質をわかってないんじゃないかと思うが。凡庸な日常の中のちょっとしたドラマ、市井の人間にとってはそれが物語になる。彼の味はそこにあるのだろう。最後の実験的ノイズは自己満足なのでは? [6]

このスペルを名にする人は歌がうまい、という定説を自分の中に刻みたくなるが、歌の情感の豊かさでは、こちらに大きく軍配があがる。お元気な時に大編成のバンドで大きなホールなどで歌ったらシアトリカルでドラマチックな表現になるのだろうが、簡潔な伴奏が歌の情感を自然に揺るがせて、切々と歌を伝えてくる。"白鳥の歌"とは、こうした作品に捧げる言葉ではないかと思う。 [9]

栗本斉

こちらも"なぜ今"感を覚える若き才能。20代半ばにしてこの雰囲気は渋すぎ。"Z世代のニール・ヤング"と言われているようだが、ロン・セクスミスのデビュー当時を思い出した。フォークやカントリーをベースにしたシンプルなアレンジもいいし、ヴォーカルも味わいがある。20年前に出会っていたら狂喜乱舞していたかもだけど、今の気分だと少々単調にも感じてしまったのが残念。 [7]

闘病の末7月に亡くなったファドのベテラン歌手による、2年前に発表した遺作。ピアノやギターラを中心としたアコースティック編成をバックに、ソウルフルなヴォーカルを聞かせる。存在感たっぷりの歌声は迫力があり、シアトリカルな楽曲とじっくり対面するには申し分ない作品だ。とはいえ90年代の全盛期に比べるとかなり枯れていて、味わい深い反面、少し聴き辛いと感じるのが少し残念。 [8]

高久大輝

ウェンズデイのギタリスト兼ソングライターとしてだけでなく、今やそこかしこで名前を目にする存在となったMJレンダーマン。22年の前作"Boat Songs"でソロでも評価を確かなものにした彼の新作は、大きく作風を更新するものではないが、フォークとオルタナ・ロックを跨いで響くその歌とサウンドでじんわり胸を打つ。ユーモアと詩情に溢れた歌詞や、ファジーなギターも魅力的。 [8]

自分はポルトガルの民族歌謡"ファド"について理解しているとは決して言えないが、アマリア・ロドリゲスの歌が世界中で愛されたのは、その音楽に言語や文化の壁を超えていく力があったからのはず。アマリアの後継者の一人として活躍したミージアの残した本作を聴いていると、そんな考えも間違いではないと思えてくる。彼女の歌と様々な楽器の音色は確かにここ日本で生きる私の感情を揺らす。 [8]

久保太郎(本誌編集部)

ウェンズデイのギタリストとしても活動する米ノース・カロライナ拠点のミュージシャンのソロ4作目。エレキ・ギターのうねりを活かした、リラックスしたルーズなロック作で、流して聴いている分には気持ちよいのだが、これ!というメロディのひらめきなどはあまり感じられなかった。歌詞が面白いようなので、英語が堪能で意味がすっと入ってくれば全然印象が違うのだろうが…。 [7]

アマリア・ロドリゲスの「暗いはしけ」のヒットからすでに70年。ポスト・アマリアのファド新世代として90年代初頭にデビューしたミージアも今年67歳で亡くなった。その遺作となった2年前の本作は、癌の闘病中に録音されたということで歌唱には重さがあるが、ピアノを中心とした、ファドとしては珍しい編成で、バロック絵画のような陰影があり、不思議な感興に引きずり込まれる。 [8]

CamScannerでスキャン

NENE『激アツ』
ネネ（配信）

ベッカ・スティーヴンス『メイブル・トゥ・ベイバー』
コアポート　RPOZ1009

Awich率いる「Bad Bitch美学」は全員カッコいいが、加えて全員の滑舌の良さが印象的だった。ダミ声シャウトの男子とは違うスマートさが彼女たちにはある。言いたいことを伝えたいと、声のトーンや発声もすごく考えてるんだろうと思う。ここでのNENEもそうで、彼女の日常と日々抱く感情がリアルに伝わってくる。トラックの音圧や声量で押し切らないのが、ゆるふわギャング流か。 7

今のラッパーの中でどういう位置付けなのかは把握できていないが、とにかくキャッチーでクールだ。ゆるふわギャングでの存在感も気になっていたが、こうやってソロになると彼女のフロウがさらにストレートに耳に入り込んできて、その感覚が刺激的で面白い。正直自分にとってリアルな音楽ではないので理解できないことも多いが、トラックもリリックも一歩先を進んでいる感じがする。 8

ジョニ・ミッチェルやバフィ・セントメリーといった先達のシンガー・ソングライターを連想しつつ、気になったのはギターの音。先達たちはアンビエンスをまとった広がりのある音で時代の開放感を表現していたが、ベッカは詰まった密室感のある音にしている。内省的なテーマと相まって、息苦しさがつきまとう時代をミニマルな歌と音で表わしているかのようだ。ライヴもこの音なのだろうか。 8

声とギター。ついにこんな作品で勝負してきたかという印象がある。ジョニ・ミッチェルを彷彿させるコード・ワークやメロディの豊潤さは見事で、そぎ落とされた中での表現力は圧倒的。歌はもちろんだが、こんなにギターが上手かったのかとあらためて驚嘆させられた。ジャズ的な複雑な要素と素朴なフォークのテイストが混じりあい、彼女にしか作りえない絶対無二の音楽が聞こえてくる。 9

"アツい"をテーマにした本作は、「チーム友達」のプロデュースなどで今年一気に注目を集めたKoshyによるフル・プロデュース作だ。序盤からバウンシーなノリのビートが続き、それを乗りこなすNENEのラップもキレキレ。8曲22分程度というコンパクトさもちょうどいい。ハイライトはElle Teresaが参加し、不穏なビートに二人のラップとワード・チョイスがギラつく「バナナボート」。 9

歌声とアコースティック・ギター、それだけ。でもだからこそ生々しく、張り詰めた緊張感と微細な機微が伝わる。ベッカ・スティーヴンスのこれまでの作風を考えると、一枚を通してこういったシンガー・ソングライター然としたスタイルを貫いているのは大きな一歩だろう。「Payin' To Be Apart」のアウトロに入る彼女の娘の声が象徴しているように、パーソナルなムードで統一された一作だ。 8

いま最注目のプロデューサーであるKoshyが手掛けた、ゆるふわギャングの女性ラッパーのソロ・アルバムで、熱さ／暑さに言及し続ける内容が今年の夏の作品であることをなんとも象徴する。常にバウンスしているバック・トラックがまず魅力的で、何言ってるのかよくわかるラップにもいちいち感心した。ただ、MVのサムネイルの日の丸には正直言って違和感があるので1点減点。 7

米ニューヨーク拠点のシンガーが全編、生ギターのみで作り上げた作品。1時間10分近い収録時間にまず慄いたが、繊細でありながらグルーヴィでもあるギター演奏と、これまでのキャリアの蓄積に基づいた丁寧な感情表現の歌唱に、最後まで緊張感を持って聴けた。声の裏返り方にやはりジョニ・ミッチェルの影響を感じる。個人的かつ重い内容なので、聴き手のコンディションを試すような作品だが。 8

CamScannerでスキャン

アルバム・レヴュー

イラストレイション＝norahi

＊各アルバムを10点満点で評価しています。それぞれの評文についた□の数字が点数です。
＊筆者には主に試聴用のCD-R等で評を依頼しています。
＊Ⓟマークのついているものは今月の"アルバム・ピックアップ"（145ページから）で取り上げています。
＊アルバムやDVDのデータ部分にある略号および各メーカーへの問合せ先については197ページをご参照ください。

ロック

アメリカ／カナダ　渡辺亨

Ⓟ Laurie Anderson "Amelia" Nonesuch

題材は、38年に南太平洋で飛行中に行方不明になった女性飛行士アメリア・イアハートの最後のフライト。チェコのオーケストラをはじめとする重厚な弦楽に乗せて、ローリー・アンダーソンは、主にナレーションを披露。ただし、パートナーだったルー・リードと親交を深めていた歌手のアノーニが5曲に参加。この点が感慨深く、音声で聞くドラマとしても秀逸だ。 9

Ⓟ ザ・リンダ・リンダズ『No Obligation』 エピタフ／サイレント・トレード　STCD0017

ヒスパニックやアジア系の4人から成るガールズ・バンドのセカンド。今回もLAパンク系バンドの流れを汲むガレージ・ロックを中心に、ロック・エン・エスパニョールの曲がある。曲調の点ではヴァラエティよりギター・ロック路線を追求した感じだが、甘酸っぱさがこぼれ落ちる曲もある。 8

Ⓟ ジ・ハート・トーンズ『フォーエヴァー&エヴァー』 バリオ・ゴールド／mc BG5256

チカーノ・ソウル系6人組のデビュー作で、リオン・マイケルズが制作。まだ20歳前後の若者たちによるバンドだが、モダン・ボレーロの名曲「サボール・ア・ミ」を原語で歌っているし、知る人ぞ知るR&Bヴォーカル・グループのカヴァーもある。女性ヴォーカリストの切ない歌声も、ヴィンテージ・ソウルの雰囲気を伝える。 8

Ⓟ Christian Lee Hutson "Paradise Pop. 10" Anti-

LAを活動拠点とするシンガー・ソングライターの新作。今回もフィービー・ブリジャーズがプロデューサーの一人として参加。ギターやキーボードを基調としたシンプルな音作りに乗せて、短編小説のような自作曲を披露。メランコリックな曲は、よりエリオット・スミスを思い起こさせる。 8

Ⓟ Japandroids "Fate And Alcohol" Anti-

ヴァンクーヴァー出身のギタリスト兼ヴォーカリストとドラマーによる男性デュオの新作。ガレージ・ロックやパンクの流れを汲んだ粗削りな演奏が身上だ。ただし、胸を焦がすようなストーリー性を備えた曲があり、一種のハートランド・ロックでもある。 7

◆ バブル・ティー・アンド・シガレッツ『ウィー・シュドゥヴ・キルド・イーチ・ア

CamScannerでスキャン

ザー』Pヴァイン PCD25417
NYで結成され、現在はシアトルを拠点とする男女デュオの2作目。女性のウィスパー・ヴォイスを主体としたドリーム・ポップ系。よくいるタイプだが、ある種の儚さを追求している点が、統一感を生み出している。 7

◆ジェイク・シマブクロ&ミック・フリートウッド『ブルース・エクスペリエンス』 BSMF BSMF9007
ハワイ出身のウクレレ奏者と、元フリートウッド・マックのドラマーの英国人が初共演。ブルースやロックのカヴァー集で、ジェフ・ベックの曲には、ギタリストのサニー・ランドレスが客演。ウクレレはエレクトリックを通して演奏されていて、生楽器とは思えない音色が味わえる。が、驚くべきほど斬新な曲の解釈は見当たらない。 6

◆ジェイク・ブロウント&マリ・オボムサウィン『シンビオント～共生体』 ライス／os FLR3278
ワシントンDC出身で、バンジョーやフィドルを演奏する男性シンガー・ソングライターと、先住民のアベナキ族の血を引く女性コントラバス奏者の共演作。エレクトロニクスも活用して、アフリカ系米国人とネイティヴ・アメリカンの伝統文化の融合を試みたプロ

・ホールデン『ザ・
クス』

スパーホーク『ホ
ーズ、マイ・ゴッ

ズ『先駆者に

のの、奥深さは感じられる。 7

◆ジェット・ホールデン『ザ・フェニックス』 BSMF BSMF6257
ナッシュヴィル出身で、クィアである黒人カントリー系シンガー・ソングライターの初アルバム。ウィル・ホーグがプロデューサーを務め、地元のミュージシャンたちが演奏に参加。メロディアスな曲が並んでいるが、音作りの面での引っかかりは乏しい。 6

◆ガイ・デイヴィス『ザ・レジェンド・オブ・シュガーベリー』 同 BSMF 2883
78年にデビューしたNY出身のブルースマンの新作。自作曲にブルースのカヴァーも交えつつ、生ギターやバンジョーを弾きながら歌う。歌声は年齢からすると、若々しいが、適度に枯れてもいて、なかなか味わいがある。 7

◆アラン・スパーホーク『ホワイト・ローズ、マイ・ゴッド』 サブ・ポップ／bg OTCD6878
ロウでの活動で知られる人物のソロ作。エフェクターで声色や音程を変えたヴォーカルが特徴。リズム・ボックスやシンセサイザーなどによる簡素なサウンドも含めて、83年の『トランス』の時のニール・ヤングのようだが、妻でもあったロウのパートナー、ミミ・パーカーを22年に癌で失った悲しみを隠すためでもあるのだろう。 7

Ⓟサーストン・ムーア『フロウ・クリティカル・ルーシディティ』 デイドリーム・ライブラリー／dw DLS016CDJ
元ソニック・ユースのフロントマンの通算9作目。作詞は、すべて作家／詩人のラデュー・レディオ。音楽的にはサーストン・ムーアのギターとヴォーカルが軸となっていて、ベースはマイ・ブラッディ・ヴァレンタインのデビー・グッギだ。中には、クールでありながらグルーヴィーな曲もあり、ドイツのカンの影響が感じられる。 8

◆ザ・ヴォイズ『先駆者に続け』 カルト CULT340CDJ
ザ・ストロークスのジュリアン・カサブランカス率いるバンドの通算3作目。今回もジュリアンがストロークスの音楽的路線に飽き足りないことが伝わってくるが、無難なエレクトロ・ポップもあり、新鮮味は薄まった。 7

Ⓟ Michelle "Songs About You Specifically" Atlantic
NYを拠点に活動している6人組の新作。色々なジェンダーや人種の混成バンドにしては、ヴォーカルを生かした現代的なR&B路線を中心に、良い意味でまとまっている。心地よいヴァイブが感じられる点が魅力だ。 8

◆ヴェニス『ステインド・グラス』 Pヴァイン PCD26123
マイケルやキップ等のレノン兄弟を中心に70年代末から活動してきたカリフォルニアのバンドの新作。当時のウェスト・コースト・ロック～AORを受け継いだ作風やコーラスは健在。よって特に、同時代を過ごしてきた日本のリスナーに好まれるだろう。 7

◆フィーバー333『ダーカー・ホワイト』 ソニー SICP6589
本作から新たなラインナップによる4人組となったカリフォルニアのバンドの新作。リンキン・パークのマイク・シノダが、2曲にソングライターとプロデューサーとして参加。ラップと

ロック

ロック

ヨーロッパ　村尾泰郎

●Manu Chao "Viva Tu" Radio Bemba / Because

17年ぶりの新作。前作以降は世界各地を旅しながら演奏していたそうで、そこで体験したことが歌になったのだろう。レゲエ、フラメンコ、フォークなどをミクスチャー。スペイン語、フランス語、ポルトガル語、英語など、様々な言語で社会の底辺で生きる人々の悲しみや喜びを歌っていて、路上の猥雑なエネルギーに満ちている。[8]

●Noga Erez "The Vandalist" City Slang / Atlantic

イスラエルのシンガー・ソングライター。スペインに5か月滞在して曲を書き、そこで出会ったレゲトンなど様々なリズムを曲に導入した。その結果、力強いビートを中心にした攻撃的でシンプルなサウンドに。それに負けないほど刺激的なのがノガ・エレズの歌声だ。気怠げで挑発的。ラップ風の歌唱も軽々とこなして、ポップ・スターのカリスマ性を発揮している。[8]

●Jonsi "First Light" Myndstream / Lakeshore

シガー・ロスのヴォーカル、ヨンシーのソロ・アルバム。当初はヴィデオ・ゲームのスコアとしてスタートしたものだったらしい。そのため、インストゥルメンタル作品になっていて、オーケストラ・サウンドと電子音が融合。シガー・ロスの曲よりも明るく開放的で、穏やかで優しいメロディーが曲に心地好いうねりを生み出している。[7]

◆キャットバグ『ムシェメーシャ』シンクー／dw THCD648

ベルギーのシンガー・ソングライター、ポーリーン・ロンドゥのソロ・プロジェクト。彼女は農場を経営しながら音楽活動をしていて、鳥についての曲を集めたアルバムを作ろうと本作を制作した。アコースティック・ギターの弾き語りを中心にして、ゆったりとした時間が流れるフォーキーで内省的な歌は、ヴァシュティ・バニアンを彷彿させるところも。[7]

◆タヒチ80『ハロー・ハロー』ビクター VICP65622

すっかりヴェテランになったフランスのバンドの10作目。パンデミック中に制作した前作はリモートで完成させたが、今回は久しぶりにスタジオに入り、人間らしさ、を重視してレコーディングしたとか。バンド・サウンドを大切にしつつ、メロディやハーモニーに対する愛情たっぷりの曲作りはいつもながら。筋金入りのインディ・ポップを聴かせる。[7]

●フルール『フルール・オ・ジャポン〜花咲くフルール』サ・ヴァ？／ハヤブサランディングス HYCA8078

オランダのロック・バンド、キックのメンバーが結成したサイド・ユニットによる日本独自のベスト盤。ガレージ・ロックやサイケなど、60年代サウンドに対する愛着を感じさせる曲が並ぶ。ヴォーカルのフロア・エルマンの少女のような歌声が乗るとイエイエっぽくもあり、メンバーの趣味が全開したコスプレ的ポップスが楽しい。[7]

◆ヴラディミール・チェトカー『レット・アス・ビー』Pヴァイン PCD26-24

マケドニア出身でニューヨーク在住のシンガー、ギタリスト。ソウル、ジャズ、ファンクなどにダンス・ミュージックをブレンド。ストリングスをフィーチャーした洗練されたグルーヴは、ジャミロクワイなどアシッド・ジャズ勢を思い出したりも。そういった華やかなプロダクションのなかでメロウなギターが隠し味になっている。[7]

◆セメタリー・スカイライン『ノルディック・ゴシック』ソニー SICP6590

ダーク・トランキュリティのミカエル・スタンネをはじめ、北欧メタル・シーンで活躍する5人が新バンドを結成。デビュー・アルバムとなる本作では、骨太なバンド・サウンドを軸にして、陰りを帯びたメロディーとリヴァーブを効かせたサウンドがゴシックなムードを漂わせている。[7]

◆ピエール・フェルヴルーゼム『ロッタ・ブーム・ブーム』ベル・アンティーク／mq MAR214077

ベルギーの前衛バンド、X・レッグド・サリーのギタリスト。本人がギター、ベース、キーボードを多重録音しているほか、二人のドラマーとサックス・カルテットが参加。緻密なアンサンブルにサックスが縦横無尽に絡んでアヴァンギャルドなジャズ・ロックを展開する。[7]

キャットバッグ『ムシェメーシャ』

タヒチ80『ハロー・ハロー』

ヴラディミール・チェトカー『レット・アス・ビー』

ロック

日本　岡村詩野／小山守

◆**BUMP OF CHICKEN『iris』**トイズファクトリー　TFCC86107

音楽的な引き出しの多さを感じさせる5年ぶりの新作。ソウルやR&B好きの横顔をチラ見せしたかと思えば、昔の5音音階を取り入れたり、中南米の音楽の要素に手を伸ばしたりと非常に貪欲だが、実際の音数はそれほど多くなく、むしろ絞られているのが面白い。シングル・リリースから3年でようやくアルバムに収められた朝ドラの主題歌「ないろ」は、譜割りもリズムもアレンジも抜群のセンスを放つ出色のポップ・チューンだと思う。[9]

Ⓟ**ハナレグミ『GOOD DAY』**スピードスター／v　VICL65999

オリジナルとしては9枚目。昨年のKID FRESINO、PUNPEEとの共演に象徴されるように新たなフェイズに入っている印象で、西田修大、Cuzy Giraffe、御徒町凧らが参加した今作は、歌の表現力の高さだけではなく、音作りやリズムのヴァリエイションで攻めた曲が揃っている。ミをフィーチャーした3曲目、マヒトゥ・ザ・ピーポーが作詞作曲した7曲目などはフロアでかかっても違和感ないし、かなり入念に一つ一つの音選びをした印象も。[8]

Ⓟ**Rei『XINGS』**レイニー／u　UCCJ2243

ソングライターとしての手腕も積極的に発揮しているが、この7曲入りミニ・アルバムは、あえてギタリストとしてさらに進化しようとする意欲作。すべての曲で自身のギター・ソロを聴かせているのも原点回帰を感じさせるし、コリー・ウォンとのギター・バトルを繰り広げる曲が自信のほどを伝える。[7]

Ⓟ**浅井健一『OVER HEAD POP』**セクシーストーンズ／アリオラ／sr　BVCL1434

AJICOやSHERBETSとしてのリリースはあったが、ソロ名義でアルバムを発表するのは久々。どのユニットでも自然体が窺えるし、本作でも肩の力を抜いてメロディを綴り、歌を歌うようになっているが、60歳近くなってもわからないものはわからない、と正直に曲にする姿勢はなかなかに清々しいと思う。キャリアを重ねて知ったような顔をしないファンタジックなロック・アルバム。[7]

Ⓟ**Bialystocks『Songs for the Cryptids』**ポニーキャニオン　PCCA06325

映画監督／小説家としても活動するヴォーカリストと、ジャズ・ピアニストでもある鍵盤奏者によるユニットの通算3作目。派手さはないがピアノとギターを中心に据えたアレンジで、素直なメロディを少しだけ捻りを加えてさりげなく聴かせる。これといった決め手に欠けるのが惜しいが、このストイックにいい曲を発表する姿は、いつか一気に伸びる可能性があるような気も。[8]

◆**スガ シカオ『Acoustic Soul 2014-2024』**スピードスター／v　VICL66017

ライヴ会場などで販売されていた『ACOUSTIC SOUL』シリーズからの4曲に新曲6曲を加えた企画盤。アコースティックと言いつつメロウで少し塩辛い歌をねちこいバンド・サウンドで聴かせる。スタックス調の名曲「情熱と人生の間」の最新ヴァージョンなどルーツに常に忠実なブラック・ミュージック・ラヴァーぶりが嬉しい。[7]

◆**w.o.d.『あい』**SME／sr　SECL3152

中学で結成された3ピース・バンド。とはいえ活動歴は既に15年で、作品リリースも多く、様々なフェスやイベントで話題を集めてのこのメジャー・デビューとなった。BOOM BOOM SATELLITESとミッシェル・ガン・エレファントとの間を行きつつ（実際に中野雅之、小林祐介が参加している曲も）、90年代のグランジを今の時代に上書きしたような曲が並ぶ。[7]

◆**ヤングスキニー『BOY&GIRLS』**スピードスター／v　VICL65996

結成から4年で既に安定した人気を誇る4人組のセカンド。人としてのダラしなさ、情けなささえそのまま表現するような歌詞が魅力だが、ラップ・スタイルをギター・バンド・サウンドの中に取り入れた、戦慄かなのをフィーチャーした曲などで新境地を見せている。[7]

◆**秋山黄色『Good Night Mare』**エピック／sr　ESCL6019

頭角を現わしてから既に5〜6年になるシンガー・ソングライターの、活動自粛期間から弾き語りツアーや対バン・ツアーを経て、2年半ぶりにリリースされた4作目。基本はオルタナティヴ・ロック系で展開の速いメロディが特徴ながら、やや内省的、自嘲的な傾向の歌詞が増えている。じわじわと曲を聴かせるスタイルを取り入れている印象。[7]

CamScannerでスキャン

●柴田聡子『My Favorite Things』AWDR/LR2／DDCB-[illegible]

24年作『Your Favorite Things』の楽曲を弾き語りで歌った、いわば別ヴァージョン作。ガット・ギターを中心に、ウーリッツァー、ピアノ、リズム・ボックスなどを弾き分けている。自身が鳴らすヴォーカルが際立つことでソングライティング面での独特の譜割りが浮き彫りになっていたり、ウィスパー・ヴォイスがいっそう生々しくなったりと、内省的な印象が強く、彼女の“個”の部分に焦点を絞った試みといえるだろう。自身の足元を見つめ直したようなところに、彼女らしさが見える。 [8]

●cero『Live O Rec』カクバリズム　ＫＡＫＵ－１０

初のライヴ・アルバム。ライヴ音源にミキシングやエディットなどの加工を施して再構築しており、ライヴ・リミックス作といった方が近いだろう。ヴォーカルおよびコーラスの生々しさや不穏さなどを前面に出し、エグい楽曲性とライヴならではのダイナミズムを追求していて、収録曲の現在進行形的なあり方を示した作品と言える。特に十二分半に及ぶ『Poly Life Multi Soul』のトリップ感覚にあふれたサウンドは圧巻だ。 [8]

●あがた森魚『オリオンの森』[illegible]　パープルヘルン／ＯＰＨＪＣ０５７

相変わらずのハイ・ペースで、今年2枚目のアルバム。ほどよくしゃがれたディープな歌声と、ジャンクなエレクトロに主張を加えた奇矯的サウンドによる、重みのある曲が並ぶ。鋭利な言葉でありつつ彼のロマンティシズムが生み出す歌詞世界も吸引力があるし、サウンド的にもエクスペリメンタルな要素をちりばめてラジカルさも感じられ、健在ぶりを示している。 [7]

●浅井直樹『らせん・分身・スペクトル』チェンジャー／ＣＨＥＲ－ＲＥＣ００３

21年の33年ぶりのアルバム以来、順調に作品を出し続けている人で、今回は約2年ぶりの4枚目。明るいメロディーで辛辣なつみと『kiss the gambler』のコーラスをフィーチャーしたポップな曲を中心としつつ、演劇性の高いポエトリー・リーディングの曲、ヴァイオリンやギターをフィーチャーしたダーク・サイケ的な曲など、多様な試みをしている。ポップな楽しさと座覚不思議な不条理さが同居するような、独自の味わいがいっそう増した。 [8]

BUMP OF CHICKEN『Iris』

[illegible]『Boy』

[illegible]『Good Night Mary』

●鳳若あすか『怪物』クフ・ビーツ　ＢＹＯ００６

大阪のシンガー・ソングライターによる約3年ぶりの4枚目。夜の闇を思わせるダークなサイケデリックが持ち味の人で、今回はツイン・ギター編成になっていっそう多角的な音作りになった。夕暮れから夜明けまでを追った流れになっていて、曲が進んでいくごとに闇へと沈んでいくような構成が見事。特にクライマックスのタイトル曲では、彼女の朗読と特徴的なウィスパー・ヴォイスの歌、それにイマジネイティヴなギター・ソロとが相まって、夜の深さを描ききっているのが素晴らしい。裸のラリーズから受け継がれてきた、国内サイケデリックの系譜を一気に更新してみせた時代の傑作。 [10]

●王舟『Town Dune』王舟　番号なし

約4年ぶりのアルバムで、動画で大塚智之と谷口雄が参加している以外はすべて王舟一人で制作。ジャズ・グルーヴ的な曲を中心に、多様なスタイルの短い曲が次々に出てきて、映画音楽っぽいところもある作品。そこにコラージュやダブを施し、心地いいだけでなくエクスペリメンタルな仕掛けで奇妙な味を生んでいるのが彼らしい。 [8]

●ミンモア『キクキボウ』ステラ／ゆ　ＳＬ－Ｐ８９－０

3人組ソフト・ロック系バンドで、鈴木惣一朗のレーベルからのセカンド。クールな質感と思慮深さをあわせもつ存在感たっぷりな女性ヴォーカルと、音数が少なくシンプルで歌心にあふれた演奏とがぴったりと一体化した、ソフトなサイケデリック。ほとんどがスロー～ミディアムのゆったりした曲で、日常っぽい穏やかさがありつつも、淡いトリップ感や浮遊感による非日常性も醸し出しているのが心地いい。 [8]

●夕食ホット『[illegible]』ホット・プレート　[illegible]

男女混合3人組ユニットの4枚目のアルバム。歌とピアノに必要なエレクトロを加えただけのシンプルな音楽で、それもミディアム・テンポ中心のゆったりした曲が並ぶ。[illegible]

てやさしい世界を構築。独自のスタイルにいっそう磨きがかかっている。[8]

Pカジヒデキ『BEING PURE HEART ～ありのままでいいんじゃない』ブルー・ボーイズ・クラブ／AWDR/LR2／sn BBCO15

今年4月に出た19枚目のアルバムがアナログ盤でリリース。ルーツであるネオアコ～ギター・ポップに真っ向から向き合った一枚で、甘酸っぱいエヴァーグリーンなメロディー、中森泰弘や永井聖一ら敏腕揃いのメンバーによる躍動感たっぷりな演奏、それに真城めぐみやZOO the bandらのコーラスもバッチリ決まっていて、豪華で贅沢な仕上がり。どこを切ってもキラキラしたポップスがあふれ出てくるような、ドリーミーな世界を作り上げている。[7]

PMoskitoo『Unspoken Poetry』ウェザー／hz HEADZ264

約11年ぶりの3枚目となる電子音楽系アーティスト。電子音、シンセ、グリッチ音などによる透明感にあふれた音像に、彼女の朗読や歌などの声が絡んでいき、幻想的で美しい世界を築いている。特に声は吐息っぽいウィスパーだったり単語を断片的に発していったりと、多様な発声を試みているのがおもしろい。電子音と声の関係性について問い直してみたような意欲作。[8]

◆THE HOLDENS『RAIMUGI』ニューフォーク NFDO14

大分・別府の4人組バンド。ギター・リフが先導するロックンロールやガレージ・ロックを、明るいメロディーとパワフルな合唱コーラスとともに聴かせていて、GSっぽいわかりやすさが持ち味。オールド・スタイルでありつつも音を出す楽しさや喜びにあふれていて、その屈託のなさがいい。[7]

◆永井"ホトケ"隆×山岸潤史『...still in love with the blues』Pヴァイン PODC007

ウエスト・ロード・ブルース・バンドの二人によるギター・デュオ作。アコギとエレキを使い分けた絶妙に息の合ったプレイや、ホトケのしゃがれた歌声から、濃厚なブルースが匂い立つ。二人ならではの懐の深い味わいがたまらない。ゲストの上田正樹も絶品。[7]

◆baobab『かぜっちうた』カテリーナ・サウンド・ファーム／ip CSF010

ミンモア『キクキボウ』

その他の短編ズ『ダンス』

越冬『越冬』

今年で20周年を迎えたユニットで、"土着"をテーマにしたアルバム。細部まで丁寧に構築されたアコースティック・サウンドと、凛とした力強さをもった女性ヴォーカルによる、自然界によく馴染むようなネイチャー・ポップ。民族音楽や伝承歌などの要素を取り入れているのも重要だろう。[8]

◆その他の短編ズ『ダンス』その他の短編ズ 番号なし

女性二人組ユニットが久々に出した新作。今回はほぼ全編がエレクトロ・サウンドで、ダンサブルなトラックに二人の天真爛漫なキュート・ヴォイスがのっかったものだが、そこにノイジーなSEが入ってきて逸脱するところがおもしろい。自由闊達なアヴァン・ポップ的スタイルは今も不変。[8]

◆フォノジェニックス『角筈』アルカンジェロ／dw ARC7394

手塚眞監督による同名映画のサントラ。ダークで重厚なシンセサイザーを中心にインダストリアルやエレクトロ・ビートなどを織り交ぜ、映像的でイマジネイティヴな音像を生み出す。[7]

◆u-full『umi riku kage』ヴァイオレット・ムーン／br VIOM0015

男女二人のアコースティック・ユニット。ガムランの導入など民族音楽的要素を随所に取り入れ、デリケートに構築されたアコースティック・サウンドと、のびやかに歌う透き通った声の女性ヴォーカルによる、ザバダックあたりに近い無国籍ポップ。実験精神とポップ・センスの同居が見事。[8]

◆越冬『越冬』人情レコーズ 番号なし

"代官山系ポスト・ポスト・ポストパンク"を標榜する3人組。ダーティーでノイジーなオルタナ的バンド・サウンドを軸として、浮遊感のある音像を作ったりサイケデリックになったり、爆音ギターが炸裂したりと、スタイルにとらわれない自由さがおもしろい。妖しくラジカルなムードも魅力だ。[8]

◆坊主バンド『新☆般若心経』ミディクリエイティブ／br CXCA132

現役僧侶たちが荒木町の坊主バーのスタッフらと結成したユニット。般若心経を"超・超訳"して、お経とパンクをくっつけたようなタイトル曲や、ディスコ・ビートの上で"ゲッゲッ解脱！"と叫んでいたりと、仏教とロックを融合させたユニークな曲揃い。[7]

（以上、小山守）

CamScannerでスキャン

Ⓟ Perfume『ネビュラロマンス 前篇』 ユニバーサル UPCP-1010

結成25周年、メジャー・デビュー20周年イヤーに突入した3人組が放つ“宇宙を舞台”にした“架空の映画のサウンドトラックのような”コンセプト・アルバムの前編。ここまでグルーヴ感が濃厚な一作は09年の『⊿』（トライアングル）以来かも。歌声はひたすらみずみずしく、ミキシングには奥行きがあり、コード（和音）の流れも実に面白く美しい。「ラヴ・クラウド」「Starlight Dreams」が、今のPerfumeの充実を伝える。 10

Ⓟ Có shu Nie『7 Deadly Guilty』 ソニー・ミュージックアソシエイテッド／sr AICL4612

約2年半ぶりの新作。今回もエフェクトのかけ方や各チャンネルへの音の割り振りも含め、聴く者に興味の尽きない鑑賞体験をもたらしてくれるはずだ。中村未来のソングライティングや歌声はまさに自由自在（メロディに対する歌詞の割り当ても含めて）、ベースの松本鉄介はこの楽器から出せる音をすべて出し切らずにはいられないようだ。低音を効かせて聴かせたい。 9

Ⓟ Night Tempo『Connection』 ビクター VICL66013

テーマは“繋がり”であるという。土岐麻子や竹内美宥の歌、南野陽子や広末涼子の語りもフィーチャーされるが、主軸はインスト曲。キーボードのロング・トーン、杭を打つようなビートが、まったりした時間を運ぶ。 8

◆ AMEFURASSHI『Flora』 スターダスト SDPM1006

2018年結成の人気グループによる2年半ぶりのアルバム。アイドルの在り方はいろいろあるけれど自分たちは音楽をつきつめていく、という力強い声が聞こえそうなほど凛とした内容で、ヴォーカリゼーションはもちろんのこと曲調も多彩。タメの利いた「HICCUP」に満点を呈したい。 9

Ⓟ でんぱ組.inc『We need the DEMPA』 ミーム・トーキョー／tf TFCC81067

来年1月にエンディングを迎える人気グループによるラストEP。玉屋2060%、清竜人、桃井はるこなどをライター陣に迎え、適度に薄く適度にざわざわしたトラックに乗せて、生きのいいパフォーマンスを聴かせる。この明るさ、はつらつとした感じは、今、さらに得難いのでは。 8

◆ 雅-miyavi-『××××』 ドレスユー／DOLU51

タイトルはダメダメと読む。5人組オルタナ・アイドル・ユニットによる、結成7周年に向けたミニ・アルバム。ラウドなロックに乗せてエフェクトをかけた歌声が炸裂するナンバー中心で、タテノリのビートに乗せてメンバーの歌声が塊のように一体化して迫る「イロイロ」に強く惹かれた。 8

Ⓟ Gacharic Spin『Feast』 クラウン CRCP40693

結成15周年記念アルバムは全15曲入りの大盤振る舞い。ドラムとベースのコンビネーションが快いインストゥルメンタル「SPEED GAME」を冒頭に持ってきて、初期ナンバーのリアレンジ「JUICY BEATS-2024-」、ラテンとディスコがハード・ロックの上で出会ったかのような「Bocchi Fest」など多彩な品ぞろえで満腹感を与えてくれる。リーダーのFチョッパーKOGAが弾くベースも唸りをあげるので、低音が出まくるシステムで聴けば興奮も倍増だろう。 8

◆ ずっと真夜中でいいのに。『虚仮の一念海馬に託す』 EMI／u UPCH20685

ミニ・アルバムとしては2年8か月ぶりのリリース。まずは細かな譜割りで狭い領域に歌い、一転、サビでは広い音域を使って両翼豊かに、という展開が主だが、決して飽きさせないのはアレンジや楽器のトーンに変化を加えているからなのだろう。フル・アルバムの登場を待ちたい。 7

◆ 櫻井里花『竜吟の夜明け』 SAT SAT055

“ギターを持った女剣士”の異名をとるというシンガー・ソングライターの第2弾。とにかく思いっきり歌い、ゴリゴリとアコースティック・ギターを奏でる。録音もクリアかつ骨太、「何があろうとも」「衝動」「砂の剣」における豊かな倍音を含む歌声にも惹かれた。熱気、衝動、刹那といった言葉を好むリスナーに特におすすめしたい。 9

◆ 家入レオ『My name』 ビクター VICL66009

8枚目のオリジナル・アルバム。みずから大半の楽曲の作詞・作曲に携わり、アレンジャー陣には小西遼（象眠舎、CRCK/LCKS）やNaoki Itaiの名も。抒情的なナンバー主体の中、ロイ・ハーグローヴの手法を彷彿させるホーン・アレンジが入るファンキーな「my name」が異彩を放つ。 7

Ⓟ 秘密のコペカチータ『たのしいトークショー』 Pヴァイン PCD25424

CamScannerでスキャン

あべあおい(元THE ARNOLDS)率いるユニットの第1弾。奇妙礼太郎トラベルスイング楽団のリーダーを務めていたパパ安田も曲作りに携わり、さまざまな洋楽からの影響を感じさせるバンド・サウンド、キャッチーな歌詞とメロディ、メリハリに富むミキシングで楽しませる。冒頭のアカペラ歌い込みから、オルガンやギターの絶妙な絡みへと移行する「月刊マーガレット」がことに印象的だ。[8]

◆yomm『スクランブル・東京』 ラリー／sh HR－P352

バークリー音楽大学で学んだシンガー・ソングライター／モデル、チェ・ジョンユンの音楽プロジェクトが第1弾を発表。辻村豪文(キセル)、YeYeなどが提供した洒脱な楽曲を、実にクールに滑らかに表現している。歌詞はほぼ日本語。「さらっとパッとピッと」に登場するヴァイオリンを筆頭に、意外にも思える楽器がいい味を出しているのも聴きどころ。[9]

◆ずれやまスレ子『日本百歌選〜肆ノ巻』 ズレヤマズ／vs ZRCA－1004

日出郎、坂本ちゃんと"花中"というユニットを組んでいたこともあるシンガー・ソングライターの、オリジナル・ご当地ソング集の第4弾。旅と歌とユーモア(「蚊」が秀逸)を愛し、四季の移ろいに目を配る繊細な表現者の姿が浮かび上がる。次はバンド編成でこの独創的な世界を開陳されたい。[7]

Ⓟゆっきゅん『生まれ変わらないあなたを』 ゆっきゅん GKR－013

二人組"電影と少年CQ"でも活動するシンガー・ソングライター、約2年半ぶりの2ndフル・アルバム。共作者には君島大空、野有玄佑、児玉雨子等の名前もあり、私は気鋭によるワーク・ショップとしても本作を楽しんだ。近くのひとに語りかけるような発声で、時にドラマティックな歌詞を歌いこむゆっきゅんは実に独特な存在だ。[8]

◆しぐれうい『fiction』 ユニバーサル UPCH20678

イラストレーターやVチューバーとしても活動する才人、2年ぶりのフル・アルバム。1曲ごとに異なるクリエイターを起用し、一息つける暇などどこにもないほど賑やかなサウンドを繰り広げる。ビバップ調やマーチまで飛び出す「ハッピーヒプノシズム」のミクスチャーぶりが卓抜。[7]

AMEFURASSHI『Flora』

yomm『スクランブル・東京』

UTAHAI composed by HENTONA NAOKO『UTAHAI』

ⓅCRYSTAL『In A Cocktail Glass』 フラウ FLAU－103B

英国のDJからペット・ショップ・ボーイズを引き合いに出して評された、東京発ユニットの第3弾。"思い出の夏を引きずるシティボーイの悩みとアートな冒険"がコンセプトであるとのことで、澄んだシンセサイザーの音、さわやかな男声が心地よさに富む。「Winter Forever」に登場するシモンズ・ドラム風の音色も心憎い。ジャケット・デザインまで"疑似80年代感覚"なのも芸が細かい。[8]

◆UTAHAI composed by HENTONA NAOKO『UTAHAI』 ビクター VICL66014

2015年にピアニスト／作編曲家の辺土名直子と歌／踊りのCoccoを中心に始動したプロジェクトが待望の作品を発表。琉球古典音楽とピアノのハーモニーの融合にオヤと唸らされ、琉球風ファンキー・ラテン・ジャズ・オペラというべき「燎」(辺土名・作)に心躍らされた。ライヴが見たい。[9]

◆木村カエラ『F(U)NTASY』 ビクター VICL66010

本号が出ている頃には日本武道館公演も直前に迫っているはずだ。このデビュー20周年EPは、明朗快活なポップスの盛り合わせという感じ。全曲の歌詞を担当(「Twenty」では作曲も)、ファンへの感謝のメッセージと感じられる語句も多々ある。フル・アルバムの登場も期待したい。[7]

◆BEGIN『ビギンの盆マルシャ』 インペリアル TECI－1831

来年デビュー35周年を迎える3人組が、盆踊りと、ブラジルの"マルシャ"の融合に取り組んだ一枚。とはいえ、浮かび上がるのはケミストリーが生み出す刺激的な面白さよりも彼らの卓越した咀嚼力と力強いポップ・センス。「お祭りマンボ」や「自動車ショー歌」等カヴァー曲も実に快活だ。[7]

Ⓟ竹内まりや『Precious Days』 ワーナー WPCL－13607

なんと10年ぶりのオリジナル・アルバムであるという。ポップスの普遍を改めて示すかのような音作りが快い。山下達郎のデュエットではエヴァリー・ブラザーズ「夢を見るだけ」をカヴァー、ほか低音域のすごみが光るブルース・ロック的な「TOKYO WOMAN」も実に印象深い。[8]

CamScannerでスキャン

ジャズ
村井康司

Ⓟサマラ・ジョイ『ボートレイト』ヴァーヴ／u UCCV1204

若きスター歌手の3作目は、管楽器4本を含むビッグ・コンボ編成での録音。スタンダードを中心にオリジナルも交えた演曲で、若き日のサラ・ヴォーンをアップデートしたような圧倒的な歌唱を聴かせる。静かに始まってクライマックスで爆発するパワーがすごいんだけど、東京でのプレス向けライヴで体験した鳥肌ものの感動は、スタジオ録音ではなかなか再現できない。一日も早い来日を希望！ [9]

Ⓟロイ・ハーグローヴ『グランド・テール』UCCV1205

98年に『ハバナ』でグラミーを獲得した直後、ダアドループのスタジオで録音したアルバムがまさかの発掘。見事なまでにストレートなラテン・ジャズで、ロイのプレイも素晴らしいけどメンバーたちの働いがすごい。『ハバナ』を上回る傑作です。ぜひ！ [9]

Ⓟイマニュエル・ウィルキンス『ブルー・プラント』ブルーノート／u UCCQ-[illegible]

注目のアルト奏者の新作はミシェル・ンデゲオチェロとの共同プロデュースで、セシル・マクローリン・サルヴァント、ガナヴィヤなどのヴォーカルをフィーチャー。ブルース（痣＝bruiseとblueをかけている）と、血という重いテーマを持ちつつも、サウンドはメロウで静謐な美しさを湛え、しかも不穏な気配が漂う。 [9]

Ⓟトルド・グスタフセン・トリオ『シーイング』ECM／u UCCE1210

ECM10作目となるノルウェーのピアニストのトリオ作。バッハの宗教曲や讃美歌（沈みゆくタイタニック号の楽団が演奏したという「主よ御許に近づかん」も）の間にゴスペル的でもあるオリジナルが挟まり、清廉な演奏が並ぶ。心が洗われる美しさなんだけど、ノルウェーの田舎の教会にでも行かないと本当のよさは分からないかもなあ、という気もしますね。 [8]

Ⓟ渋さ知らズ『渋帆』渋さ知らズ35 SOO1F

『渋樹』以来8年ぶりのアルバムは、長いメドレーを中心とした三つのトラックを収録。ビクトル・ハラの「平和に生きる権利」など3曲に玉井夕海の歌がフィーチャーされていて、それが全体の核になっている。ツワモノたちのソロはどれも聴き応えがあり、特に加藤一平のカラフルなギターがバンドにポップさを加えている。 [8]

ⓅTigran Hamasyan "The Bird Of A Thousand Voices" Naïve

アルメニアの「千の声を持つ鳥」の伝説をモティーフとしたトータル・アルバム。アナログ・シンセを多用し、複雑な変拍子と古楽的なヴォイスが印象的なサウンドで、不思議な英雄譚をスケール大きく描写する。大作だが、トラックごとに工夫が凝らされているので冗長な感じはしない。英語テキストがティグランのサイトで読める。 [9]

◆山中千尋『Carry On』ブルーノート／u UCCJ9249

1曲目のドライでパワフルなドラムのサウンドにびっくり。ピアノの音より断然目立つ、このドラムスは実にかっこいい。ピアノ・トリオ編成で、生誕100年にあたるバド・パウエルとヘンリー・マンシーニの曲もやっているのだけど、楽器の音やミックスがトラックごとに微妙に変えられていて、さりげないセンスのよさがとても現代的。 [8]

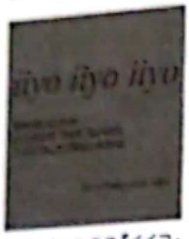
◆サム・ウィルクス『イイヨ・イイヨ・イイヨ』アストロラージュ／dw AS GE65

ベース奏者ウィルクス率いるバンドの日本でのライヴ録音。ギター2本、キーボード、ベース、ドラムスの5人で、カントリーやブルース風味も感じられるギターを中心としたゆるい音作りが心地よい。ビル・フリゼールの音楽を下世話にしたみたいなところもありますね。スネアをブラッシュで叩く音にディレイがかかって、一瞬遅れて左上で鳴るのが個人的ツボです。 [8]

◆畠山地平&石若駿『Magnificent Little Dudes Vol. 2』ギアボックス 番号なし

畠山が作り出す引き延ばされたアンビエント・サウンドに、石若のドラムスやパーカッションが繊細かつ奔放に絡む。10分を超える長いトラックが多いのだが、さまざまな音が入り混じった音の雲をミクロ的に解析するつもりで聴いても面白いし、「環境音楽」としてマクロ的に聴いてもいい。 [8]

山中千尋『Carry On』



サム・ウィルクス『イイヨ・イイヨ・イイヨ』

畠山地平&石若駿『Magnificent Little Dudes Vol. 2』

CamScannerでスキャン

ラップ／ヒップホップ

日本　二木信

◆Siero『THE GOAT TAPE 3』シエロ　番号なし

23年4月に活動を開始したという新進気鋭のラッパーの最新ミックステープのパワフルさは色んなものを古く感じさせてしまう。ヒップホップのサブジャンルであるレイジからさらに派生したとも言われる"ニュー・ジャズ"の粗削りで刺々しいサウンドとメロディアスだが歪んだ音像のラップが耳に突き刺さる。彼の他の多くの曲はサウンドクラウドでも聴ける。 7

◆SUIKEN『THE MOMENT』トーキョー　番号なし

14年ぶりのベテラン・ラッパーのソロ・アルバムは自身の歴史を踏まえつつ、新鮮な風を吹かせる。PUNPEEのサイプレス・ヒル"How I Could Just Kill A Man"を彷彿させるトラック、ラッパーBenjazzyの起用、MUROやD.Lの名曲の続編の9曲目、SHAKKAZOMBIEとの「共に行こう」を意識したであろうヒデボウイとの10曲目。物語は続く。 7

◆NARISK『INTO DEEP』ブロズ・アンド・コンズ　番号なし

パーカッシヴで、ジャジーで、メロウで、スクリューやずっしりとしたブーム・バップもある。フライング・ロータスやオリーヴ・オイルから影響を受け、KOJOEや仙人掌へのビート提供でも知られる福岡のビートメイカーの13曲入りのビート集がとても良い。過剰な派手さに頼ることなく、繊細な手さばきで折衷的なサウンドを作っている。 7

◆田我流『藤沢2021』バック・シティ・ブルース　番号なし

活動25周年をこえたラッパーがユニークなビートメイカー／DJであることは一部では知られている。21年に完成していた本作は、彼のニューエイジ／アンビエント／シティ・ポップを独自解釈したビート集。彼のミックス作品『HOLY NATURE』（傑作！）と地続きにある。2曲目はファーサイド「Runnin'」の変奏のようだ。 7

◆Carz『For The Street』ヤック　番号なし

横浜が拠点というイメージもあるかもしれないが、「ラップスタア2024」でも話題をさらった新進気鋭のラッパーの鋭く、太く、エモーショナルなラップはMACCHOを想起させる。また、成功への渇望を歌う力強さと、客演ラッパーのguca owlとの「Hood Melody」を聴けば、彼が次のスターになる日は遠くないと思える。 8

◆Number_i『No.I』トゥーピー　TBCT0743

3人組のダンス・ヴォーカル・グループの登場は24年の国内のヒップホップ／ラップにとって重要な出来事。故に過去作はJポップで取り上げていたが、初のフル・アルバムをここで紹介。ベース・ミュージック、ハイパーポップ、ラップの過剰な混淆「GOAT」、盆踊りや民謡を導入した「BON」、チャイルディッシュ・ガンビーノ'Redbone'を想起する「なんかHEAVEN」は必聴。 7

◆Kamui『RAFRAGE2』マッドリー　番号なし

Kamuiという激情のラップ・アーティストに洗練という言葉は似つかわしくないかもしれない。が、今作のレイジを基軸としたサウンドとメロディアスなラップは、自分より若いTOKYO世界やShowyVICTORといったラッパーとの出会いと共作なども通して、より広く伝わる普遍性を獲得しつつあるように感じられる。 7

◆野崎りこん『群像』アワーラングウィッジ　番号なし

ノストラダムスと9・11への言及から保健室にいた女の子の描写にワープする「n月」を聴くと、ゼロ年代初頭の志人（降神）を思い出す。「marble」にはECDへのオマージュがある。ラップとポエトリーを行き来する演劇的とも言えるラッパーの最新作からは、かつては豊饒だったが、現在は失われつつあるかに見える、日本語ラップの逸脱する自由が感じられる。 7

◆me2『Filtration』ミツ　番号なし

ここでもダンス・ミュージックとラップの蜜月を示す作品をたびたび紹介しているが、東京出身のラッパーのセカンドEPもまた現在のの熱量を反映。彼女の前作はドープな作品だっただけにより興味深い。特にpoivreによる2、3曲目、Stones Taroによる5、6曲目などは、ダンスフロアのピークタイムに照準を合わせている。 7

Carz『For The Street』

Number_i『No.I』

Kamui『RAFRAGE2』

CamScannerでスキャン

R&B／ソウル／ブルース

林剛

●John Legend "My Favorite Dream" Republic

2年ぶりの新作は子供向けの曲を歌ったユニークなアルバム。我が子へのピアノ弾き語り映像を手掛けてスフィアン・スティーヴンスと共同制作した、セレブリティらしい余裕と愛の深さを感じさせる作品だ。オリジナル曲のほかボブ・マーリー「3羽の小鳥」などのカヴァーを含む心温まる内容だが、クリスマス盤ほどの高揚感はない。R&Bとは別文脈で推したい。[7]

●パーラー・グリーンズ『イン・グリーン・ウィ・ドリーム』コールマイン／[illegible] CLMN-22027CD

それぞれが名門グループで活動する腕利きたちからなるオルガン・トリオ。アダム・スコーン(kbd)、ティム・カーマン(ds)、ジミー・ジェイムズ(g)の3人で、ブッカー・T＆ザ・MG'ズ的なメンフィス・ソウル路線のファンキーなグルーヴィーなインストを展開。唯一のカヴァーとなるジョージ・ハリソンの名曲はビリー・プレストンへの憧憬がベースにありそうだ。[8]

●ミニー・ベイカー・ブルックス『ブルース・イン・マイ・DNA』BSMF／BSMF-[illegible]

シカゴ・ブルースのギタリスト／シンガーによる7年ぶりの新作は、亡きロニー・ブルックス所縁のアリゲーターから。制作は名匠ジム・ゲインズで、デイヴ・スミス(b)やスティーヴ・ポッツ(ds)らを迎えて力強くファンキーなブルースを屈託なくプレイする。嗚咽を含めてオーティス・レディングに似せたバラードも。父の後継者たらんとする意気込みを感じる。[7]

●エリック・ビブ『イン・ザ・リアル・ワールド』BSMF／BSMF-[illegible]

グラミー賞ノミネート作から1年半ぶりの新作。録音場所のピーター・ゲイブリエル主宰スタジオに因んだと思しき表題の今作でも長年の相棒であるUKソウルのグレン・スコットと組み、ロビン・マッキントッシュのスライド・ギターも交えて素朴なフォーク～カントリー・ブルースをマイルドでコクのあるシブ声で聴かせる。佳作リリー・ジェイムズとのデュエットも。[7]

●ジェロン・パクストン『シングス・ダン・チェンジド』ライス／SS FLR-[illegible]

スミソニアン・フォークウェイズから、SP盤の復刻のような新譜が登場。米南部がルーツのLA出身、NYで活動する35歳のブルースマンが、いわゆる戦前ブルース（テキサス、デルタ、カントリー）を再現した文化遺産継承目的の作品だ。ハーモニカ、バンジョー、スライド・ギターの音色で100年前にトリップさせるが、現代の黒人社会を歌い、未来も見据えている。[8]

パーラー・グリーンズ『イン・グリーン・ウィ・ドリーム』

ジェロン・パクストン『シングス・ダン・チェンジド』

Aleo Suzuki『KA I KI』

ラップ／ヒップホップ

海外　長谷川町蔵

●Blackstarkids "Saturn Dayz" Dirty Hit

カンザスシティ出身のZ世代男女混合トリオによる、3年ぶりセカンド。ファレル・ウィリアムスやタイラー・ザ・クリエイターからの影響を隠しきれなかった前作から一転、90年代クラブ・ミュージックの探究を推し進め、ドラムンベース（断じてドリルではない！）のビートを大胆に導入。この3人ならではの個性を確立している。ジャジーなテイストや女子ラッパーの出番が増えたこともあり、ディガブル・プラネッツを想起する瞬間も。[8]

●Future "Mixtape Pluto" Freebandz／Epic

メトロ・ブーミンとのコラボ作2連発から早いペースで発表されたミックステープ扱いの新作。ゲストを招かずに全編ひとりで淡々とラップしているのが特徴で、その地味さが正規作を銘打つことを躊躇させたのかも。ただし気心の知れたサウスサイドとウィージーが大半を手がけたトラックは本人の不穏で不遜な存在感を引き立たせており、寧ろフューチャー入門作に相応しいアルバムと言えるかもしれない。[8]

エレクトロニック・ミュージック

坂本哲哉

●Fred again.. "Ten Days" Atlantic

フレッド・アゲインの新作は、"Actual Life" 3部作にあった、生々しい音楽日記のような流れを汲みつつ、さらにメランコリックさを際立たせてい

る。'Places To Be'のようなバンガーは多幸感をもたらすが、それ以上に、'Fear Less'のようなビートの推進力と哀愁漂う旋律がマーブル状に混ざった曲の方が我々に寄り添ってくれる。新鮮味はないが、彼の作品の中で最も親密感のある作品だと思う。 7

Ⓟアンダーワールド『Strawberry Hotel』 ヴァージン／u UICB1030

アンダーワールドの新作にはダンスへの情熱があり、何より物事を自由に展開することを恐れない精神がある。それを象徴するのが、名曲「Moaner」を彷彿させる「Denver Luna」であり、アシッド・シンセが唸る「And The Colour Red」であり、壮大なアンビエント・テクノ「Gene Pool」だ。彼らは何度目かのピークを迎えようとしている、という物言いはまったく大袈裟ではない。 9

◆Akio Suzuki『KA I KI』 エクスペリメンタル・ルームス／br ERLP005

新潟の内の倉ダム堤体内の40秒超の残響に惹かれて録音を行なったという、日本のサウンド・アートの先駆者の新作。それ自体が共鳴装置となる堤体内の空洞の中で、ガラス瓶を転がす音やスポンジを擦る音などが無限に反響し、繊細な音響タペストリーを織りなす。聴いていると身体が拡張されていくような感覚になる。 9

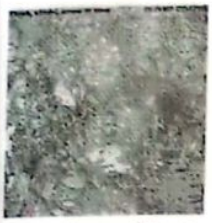
◆JITZUWA FINDER『Nature of the Universe』 イントロデューシング！／br ITDC131

平塚を拠点にする宅録ユニットの新作。軸にあるのはヒップホップというよりミニマル音楽への憧憬のように感じるが、奇を衒わないビートや音の鳴りを大切にした生楽器の響き、水彩画のような電子音を交えることで、アンビエントも射程に入れたメロウなサウンドスケープを生み出しているのが魅力的だ。 7

◆イーライ・アンド・ファー『ドリームスケープス』 PIAS／bg PIAS E0045CDJ

英ロンドン出身で米LA在住の気鋭デュオの新作。メロディックなピアノのアルペジオや陶酔感のあるシンセ、柔らかな歌声を交えた高揚感のあるハウスが主体となっているが、パーティーの熱狂だけでなく、その背後にある内省や孤独を描こうとしているのが本作の個性。緩急のあるアルバム構成も良い。 7

Cahill//Costello『II』



Oliver Coates『Throb, shiver, arrow of time』

ケイティ・ペリー『143』

◆Cahill//Costello『II』 ギアボックス GB1599

グラスゴー出身のアンビエント・デュオの新作。ウィリアム・バシンスキーを思わせる没入感のあるテープ・ループが印象的だが、疾走感のあるドラムやリヴァーブを効かせたギターを即興的に交錯させ、先を全く予測させないようにサウンドを展開しているのが見事。ポスト・ロックからの影響も強く感じられる。 8

◆Oliver Coates『Throb, shiver, arrow of time』 プランチャ／br ARTPL223

世界から耳目を集めるチェロ奏者の新作。叙情的で繊細なストロークはそれだけでうっとりするが、彼はドローンのように音を引き伸ばしたり、強烈に歪ませてノイズ化したり、電子音を螺旋状に纏わせたりすること——自らの手からオーソドックスなチェロ演奏を遠ざけること——で、我々の心に内在するノスタルジーを強く刺激する。彼が誠実にチェロに向き合っていることを証明する快作だ。 9

ポップ
久保太郎

Ⓟケイティ・ペリー『143』 ユニバーサル UICC10057

米カリフォルニアのポップ・スターによる5作目のアルバム。もともとこの人の過剰なキャラクターがあまり好きではないのだが、今回も派手でキャッチーな作風と押しの強いヴォーカルは健在。しかし、ケシャへの虐待で法廷闘争していたドクター・ルークの起用で批判を浴びていることもあり、醒めた耳でしか聴くことができない。 6

◆ホールジー『ザ・グレート・インパーソネーター』 コロンビア／sr SICP6593

1曲リリースするたびに音楽性がころころ変わる印象の、米ニュージャージー出身のシンガーによる5作目。その特徴を逆手に取ったかのように、各曲ごとに60〜00年代の音楽へのオマージュを捧げたという18曲入りの大作だが、範囲が広すぎてどれがどの時期に当たるのかあまりピンとこない。「E

CamScannerでスキャン

GO」のMVの、アン・レノックス並みの美麗な男装には惹かれたが。 [7]

ラテン
山本幸洋

◆キケ・シネシ『Melodias Aereas / ソラノオト』バー・ブエノス・アイレス／jp RCIP0365

1960年ブエノス・アイレス生まれの現代ギター名手。19年の『Cora-Zón Sur』『ライヴ・イン・トーキョー』からバンデミックを経た新録。ライナー・マリア・リルケの書簡集からインスピレイションを得た、漂うメロディ、漂う幻想曲といったオリジナル組曲。期待通りのギター類インスト、アクースティックな響きが美しい。 [7]

ブラジル
栗本斉

Ⓟマリア・ジョアン&アンドレ・メマーリ『コットン』ライス／os GLR3283

リスボン出身ジャズ・シンガーとブラジルを代表するピアニストの共演作。ジョアンの独特の声質はユニークだが、クラシック、現代音楽、フォルクローレ、ファドまで網羅する音楽性はさらに鮮烈な印象。メマーリのピアノが猛獣使いのように奔放な音楽を美しくまとめている。そこかしこに工夫があってじっくり聴きたい逸品。 [8]

Ⓟマルコス・ヴァーリ『トゥネル・アクスティコ』ユニミュージック／dw UNCD087

おなじみのヴェテランによる5年ぶりのスタジオ作。ファンク、ソウル、ディスコ、ブギーといったみんなが聴きたいマルコス節と言ってもいいだろう。79年にリオン・ウェアと共作したデモをもとに、AI技術を駆使して再構築した楽曲などもあってびっくり。80歳を過ぎてもこんなにフレッシュな音楽を作り続けるとは驚異的だ。 [8]

ワールド・ミュージック
原田尊志

Ⓟヌスラット・ファテ・アリー・ハーン&パーティー『チェイン・オブ・ライト』リアル・ワールド／bg CDRW256J

なぜ、今になってと、不思議に思う反面、なんという僥倖！　嬉しい限りだ。リアル・ワールド社の倉庫スペースの奥底から発見されたという故ヌスラットによる1990年4月のセッション4曲、イスラム教スーフィーズムに発した宗教音楽でありながら、聴く者を嫌が上にも巻きこむ身体的なグルーヴ、北米ジャズにも通じる自由な即興性を備えたヌスラット一代のダイナミズムが横溢する素晴らしい録音で、やっぱり、そのパフォーマンスは唯一無二と実感。 [10]

Ⓟ**Etran De L'Aïr "100% Sahara Guitar"** Sahel Sound

ニジェールはサハラの交易中継地ガデスで、90年代半ばから活動して来た4人組老舗グループ新作。現地に伝わるタカンバの変拍子ビートを軸に、ギミックなしの砂漠のブルースを聞かせる。ラフなコーラスによる歌、反復に徹したギター・バンド演奏など、全体に中高音域において、サハラ・スタイルを順守するかのような現地スタイルは貴重か。かえって飽かせない？ [9]

◆サンディー『HULA HULA VOL.18 リーワードサイド、ウィンドワードサイド 代 山内〝アラニ〟雄喜』マナ・パシフィカ／os MP8038

シリーズ〝フラのココロを感じて踊るフィットネス・プログラム〟18枚目となる過去録音編集盤。山内雄喜の書き下ろし新録を1曲含む。変わらず、スラックキー・ギター、ウクレレ等による生音伴奏において、たおやかさの中にもどこか妖艶な雰囲気のサンディーの歌声が、存分に楽しめる内容。 [8]

東アジア
関谷元子

Ⓟダルム『コーエグジスタンス〜共存』ライス／os INR3304

韓国ソウルを拠点に伝統楽器のカヤグムとコムンゴを奏するデュオの2作目。カヤグムは25弦を手で優しく弾き、コムンゴは6本の弦を竹の棒で叩いて荒々しく演奏する、そのコントラスト。全曲自作でこの2台だけで奏しているというストイックさ。ダイナミック、ドラマティック、ロマンティックな、まさに韓国音楽の美だ。自然との共存を奏でながらもポップさを持ち合わせていて、引き込まれる。 [9]

ホールジー『ザ・グレート・インバーソネーター』

キケ・シネシ『Melodias Aereas / ソラノオト』

サンディー『HULA HULA VOL.18 リーワードサイド、ウィンドワードサイド』

CamScannerでスキャン

ヴィデオ・レヴュー 大鷹俊一

イラストレイション＝norahi

◆フェイセズ『コンプリート・BBC・コンサート&セッション・レコーディングス（1970〜1973）』 ワーナー WPZR31020〜8

ロッド・スチュアートを中心に70年代前半、ごきげんなロックを聞かせてくれたフェイセズがBBCに残した音源をまとめたボックスに、72年4月のTV番組 "Sounds For Saturday" に出演した時の映像が入っているのだが、これが実に楽しい。この後、抜けてしまうスモール・フェイセズ時代からのメンバー、ロニー・レインも張り切ったプレイぶりだし、ローリング・ストーンズ加入以前のロニー・ウッドやイアン・マクレガン、ケニー・ジョーンズのまとまり具合もばっちりで、本当にこの頃、世界最高のロック・バンドだったと痛感させてくれる。 9

◆Remi Wolf "Tiny Desk Concert" YouTube

人気番組 "タイニー・デスク" に、残念ながらフジロックはキャンセルとなってしまったレミ・ウルフが登場。キャラクター的にこの番組にはぴったりで、彼女自身も気持ちよさそうにファンキーかつグルーヴィーなパフォーマンスを繰り広げる。アコースティック・ギター2本を含む計6人のバンドも緩やかなノリを生み出し、"Big Ideas" のナンバーが心地よい。 8

◆Linkin Park "From Zero (Livestream)" YouTube

7年ぶりに復活したリンキン・パークがすぐさまライヴ映像を公開してくれた。アリーナ中央、360度に向けられたステージでマイク・シノダや新メンバーのエミリー・アームストロングらが気合いの入ったライヴを展開する。メタル度の高いエミリーのヴォーカルはヒップホップやエレクトロニクス系のサウンドとも絶妙のミクスチャーを聞かせて新時代への期待を高めるし、11月に予定の新作が楽しみ。 9

◆Slowdive "Bilbao BBK Live Festival" YouTube

英シューゲイズ・バンドの雄。スローダイヴが今年7月スペインのビルバオBBKライヴ・フェスに出演した時の模様。夕方くらいからスタートの感じで、彼らの音楽性からするとちょっと気の毒な感じもするが、工夫をこらしたライティングでダークな世界への陶酔感を高めていっている。すっかり貫禄のついたレイチェルだが、これもまたバンドの歴史である。ただ音質にもう少し気を遣ってほしかった。 7

◆Mdou Moctar "Tiny Desk Concert" YouTube

ニジェール、トゥアレグ族のエムドゥ・モクターが "タイニー・デスク" に出演。サウスポーのせいか、ジミ・ヘンドリックスを出して語られたりもするが、フィンガー・ピッキングが基本のギター・プレイは独特なスピード感にあふれ、セミ・アコースティックでのプレイも魅力的。ただし曲調が似ているのでここらは課題だろう。 8

◆Hurray For The Riff Raff "Field Recordings x Aspen Ideas Festival" YouTube

ハレイ・フォー・ザ・リフ・ラフの女性アーティスト、アリンダ・セガーラが、ツアー仲間のジョニー・ウィルソン(g)と共に米コロラド州のアスペンでフィールド録音した様子の動画で、気持ちよさそうな空気までも一緒に伝わってくる。環境を上手く活かした音楽性、パフォーマンスは、静謐な音だが強いインパクトを残す。 9

◆Reyna Tropical "Full Performance (Live On KEXP)" YouTube

シンガー&ギタリストのファビ・レイナがベース&パーカッションなどサウンドメイクのネクタリ "スモヘア" ディアス（22年死去）と始めたユニット、レイナ・トロピカルがKEXPで行なったパフォーマンス。メキシコや南米、アフロなどの要素を巧みに融合して聴かせるファビのギターは開放感に満ちていて聴きこませる。 8

◆Glass Beams "Full Performance (Live On KEXP)" YouTube

今年のフジロックにもやってきた覆面トリオ、グラス・ビームスがKEXPに登場。インド系オーストラリア人のラジャン・シルバが中心となってメルボルンで結成されたバンドで、サイケ+ラーガを現代的に展開したサウンドは耳馴染みもよく、自然なグルーヴに包みこまれていく。 8

CamScannerでスキャン

INDEX

B Michel Banabila→212
Alexandra Bounatsa→214
C Etienne Charles→213
Steve Cropper & The Midnight Hour→209
D The Dare→206
The Kris Davis Trio→207
Bryce Dessner→205
Leah Dou→215
F Roberto Fonseca→213
Fu Manchu→206
FunkyMo→215
G Dave Guy→208
K Jaz Karis→209
Kombilesa Mi→214
L Lutalo→207
M Ibrahim Maalouf→208
Terrace Martin→209
MC Lyte→210
Ben Monder→208
Mortimer→211
Carlos Moscardini→213
N Nada Surf→205
Nidia & Valentina→212
O Or:la→211
P Hayden Pedigo→207
Derek Piotr→212
R Tim Reaper & Kloke→211
Rex Orange County→205
S Shovels & Rope→206
Sitio Rosa→215
T Ebo Taylor, Adrian Younge, Ali Shaheed Muhammad→214
The The→204
Tyrese→210
W Wiseboy Jeremy & Kirty Pandey→210

輸入盤紹介

イラストレイション＝玉川桜

Rock [UK]

The The

不安感や緊張感が支配する実に24年ぶりとなる復活作

"Ensoulment"
Cinéola / Ear [UK]

なんと24年ぶりとなる新作。80年代、傑作"Soul Mining"、"Mind Bomb"などで充実した活動を続けたマット・ジョンソンのプロジェクト、ザ・ザだが、00年を最後に表立った活動は停止していた。兄弟の死や自身の病、さらにやり尽くした感が何年もギターを持つ気さえ失わさせたというが、復活の狼煙となったのが本欄でも取り上げたライヴ"The Comeback Special: Live At The Royal Albert Hall"(21年)で、ついに待望のオリジナル・アルバムが届いた。

全12曲、どんなものとも違うこの人ならではの不安感や緊張感が全体を支配する作品だが、それが楽曲への高い集中を求め、極めて心地よい。かつてのナンバーを思い出させる'Zen & The Art Of Dating'や無常観が伝わってくる'Life After Life'などどれもマットらしいクールな熱が込められたナンバーが揃っており、派手なアレンジはないが丁寧なコーラスの盛り込み方など素晴らしい復活の一枚だ。 大鷹俊一

CamScannerでスキャン

Rex Orange County

Rock [UK]

ヒットした前作を凌駕する豊かでスケールの大きい傑作

"The Alexander Technique"
RCA [US]

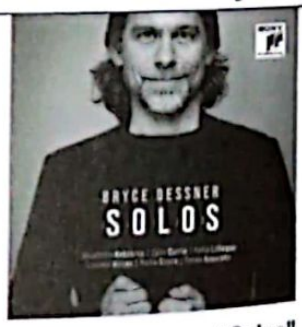
英国出身のアレクサンダー・オコナーのソロ・ユニットの5作目。ベニー・シングスが共同プロデュースを担当し、全英1位を記録した前作を軽々と凌駕する、年間ベスト10級の傑作である。アコースティックで柔らかな質感のポップ・ソングが並ぶが、ゴスペル風のコーラスやジャズ寄りのアレンジがアルバムに幅をもたせている。ホーンやストリングスを多用した室内楽的なアレンジはヴァン・ダイク・パークスを想起させるし、清涼感溢れるメロディはビートルズ直系。ソフト・ロック風の曲もある。ヴォーカルに大胆にエフェクトをかけてみたり、生のドラムとプログラミングされたビートを混ぜてみたり、遊び心もたっぷりで曲想は豊か。空間的な広がりを活かした音像も風通しが良く、立体的なサウンドが味わえる。ジェイムス・ブレイクとのデュエットも全く違和感がない。前作より遥かにスケールが大きく、音楽的なヴォキャブラリーも増大した一枚。

土佐有明

Bryce Dessner

Rock [US]

ザ・ナショナルのギタリストのクラシック音楽作品



"Solos"
Sony Classical [US]
＊2LP

単独で、またはザ・ナショナルを一緒に結成したアーロン・デスナー等と共に、ロック以外のクラシックや映画音楽も作ってきたブライス・デスナー。本作は、現在パリに住んでいる彼が過去数年間に作曲したクラシック系の曲から成る。友人のカティア・ラベックのピアノ、ペッカ・クーシストのヴァイオリン、ナディア・シロタのヴィオラ、アナスタシア・コベキナのチェロ、ラヴィニア・マイヤーのハープ、コリン・カリーのマリンバ、そしてブライス自身のクラシック・ギターと、各々の演奏家のソロのために書かれた作品が、組曲を含めて1〜4曲ずつ。前記の演奏家たちの中には、もともとクラシックを中心にジャンルを横断しているタイプが多い。本作も同様で、たとえばDJなら、ラヴィニアのハープによるミニマル・ミュージック風の曲などは、ナラ・シネフロの曲と繋げたくなるだろう。また、ブライスの流麗なギターの独奏には、うっとりさせられた。

渡辺亨

Nada Surf

Rock [US]

新味に貪欲なヴェテランによる憂いや哀愁が沁みる新作

"Moon Mirror"
New West [US]

故リック・オケイセックに捧げた前作から4年、デビュー30年を経た米ニューヨーク拠点バンドによる新作。先行シングル "In Front Of Me Now" が発表されてから期待を高めて待っていたが、その期待は裏切られなかった。甘さも、ほろ苦さも、やるせなさもすべて、洗練味のあるポップなメロディに落とし込み、曲に宿るフィーリングをアレンジやコーラスの妙で表現するマシュー・カーズの職人技には、ますます磨きがかかっている。ザ・バーズ風のハーモニーにはセンチメンタリズムが漂い、エフェクターを用いたワイルドな味付けは新鮮、厳かなストリングスを導入して重厚感を演出するなど、ヴェテランらしい安定感の上にあぐらをかかず、新味に貪欲な職人であるのが、またいい。

57歳のマシューは、なおも未熟な自分や新たな気づきを示唆に富んだ歌詞に綴り、しなやかなテナー・ヴォイスで歌うが、そこにある憂いや哀愁がじんわりと沁みる。

赤尾美香

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Fu Manchu

デビュー30年目を迎えたストーナー・ロック・バンドの新作

"The Return Of Tomorrow"
At The Dojo [US]

米カリフォルニアのストーナー・ロック系のバンドが、アルバム・デビュー30年目の年に放った13作目。疾走ナンバーも魅力のフー・マンチューだが、ミディアム～スロー・テンポが中心の曲で迫る仕上がりである。ハードコア・パンク以降の強靱な音でドゥーム・ロックを展開しているようでもあり、ギター、ベース、ドラムのパーカッシヴなアタック感が格別。ボディ・ブローにようにジワジワ効いてきてヤられるのだ。ヒップホップのビート感やキング・クリムゾンっぽい3連のリズム、サイケデリック・テイストも隠し味。馬力十分の演奏だが、ゴリ押しに陥ることなく静かな抒情パートでは侘び寂びも滲む。ジョーイ・ラモーンからの流れを感じさせるヘタレな自然体ヴォーカルも、マッチョなメタルとは一線を画す素敵なポイントなのであった。二つ折り紙ジャケット仕様で、四つ折りのインサートと無地のインナー・スリーヴつきの約50分13曲入り。

行川和彦

Rock [US]

Shovels & Rope

自身の魅力を前半と後半で対比して聴かせる新作

"Something Is Working Up Above My Head"
Dulatone [US]

ガレージ・ロックの騒々しさとフォークの叙情。米サウス・カロライナ州チャールストンの農場で子育てしながら精力的に活動を続けている夫婦デュオの7thアルバムは、彼らが持つ大きな二つの魅力を前半と後半に分け、はっきりとした対比で見せつける。その前半と後半をそれぞれに象徴するのが、スリリングなマーダー・ソングの'Colorado River'と美しいカントリー・バラードの'Love Song From A Dog'なのだが、二人がデュエットするロック・バラード'I'd Be Lying'も聴き逃せない。情熱的な掛け合いが胸を打つ。ループやシンセも使いながら、曲ごとに楽器をとっかえひっかえする二人の演奏はいつも以上にライヴを意識したそうだ。アルバムを締めくくるのはヒッピー文化の象徴と謳われる故ラム・ダスに捧げた'Dass Hymn'。シンセ・パッドのアンビエントなサウンドと二人の子供達の歌声が耳に残る同曲は、彼ら流のゴスペルと言えるだろう。

山口智男

Rock [US]

The Dare

今日的な主題の歌詞がノスタルジックなサウンドに乗る

"What's Wrong With New York?"
The Dare Is A Business / Polydor / Republic [US]

ザ・デアーはLA出身のハリソン・パトリック・スミスのソロ・プロジェクトで、以前はタートルネックッドと名乗っていた。現在はNYに拠点を移し、まさに00年代のNYで鳴り響いていたダンス・パンク～エレクトロクラッシュを展開し、リアルタイムのミレニアル世代と、都市生活の幻滅や享楽主義を主題にした歌詞にも共感するZ世代に支持されている。一見するとモッズのアルバムと思われがちだが、キャッチーなバキバキのエレクトロで、LCDサウンドシステムやヤー・ヤー・ヤーズをお手本にしながらも、プロデュースを手がけたチャーリーXCXをはじめとする現在のエレクトロ・ポップからの派生形とも理解できるアプローチを見せる。ノスタルジーを帯びたサウンドと現代社会への問題提起の組み合わせは今に始まったことではないし、アルバムで夜の始まりから終わりまでを描く構成も陳腐ではあるが、全10曲27分に彼の感情をうまく注入している。

油納将志

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Lutalo

アメリカーナな匂いが漂う自作自演歌手のデビュー作

"The Academy"
Winspear [US]

米ヴァーモントを拠点に活動するシンガー・ソングライター。フル・ネームはルタロ・ジョーンズで、エンドリアン・レンカー（ビッグ・シーフ）の従兄弟だとか。ファースト・アルバムとなる本作は、ルーツ・ミュージック色が強い曲に打ち込みやエレクトロニックな要素を加えたり、シューゲイザー風のギター・サウンドを響かせたりと多彩な音作りで味付け。トム・ヨークやエイフェックス・ツインから刺激を受けたらしいが、曲を聴いて最初に連想したのはウォー・オン・ドラッグスやカート・ヴァイルだ。オルタナティヴな実験性やモダンさを持ちつつ、曲にはアメリカーナな匂いが漂っている。本人の顔を見るまではアフリカ系アメリカ人とは気づかなかったくらい、ヴォーカルはロック寄り。自分の青春時代を曲の題材にした本作をルタロは「第1章」と呼んでいるそうだが、ロード・ムーヴィーのワン・シーンのように曲に物語性を感じさせる語り口も魅力的。村尾泰郎

Rock [US]

Hayden Pedigo

会場の音響を見事に捉えたギタリストのライヴ・アルバム

"Live In Amarillo, Texas"
Mexican Summer [US]

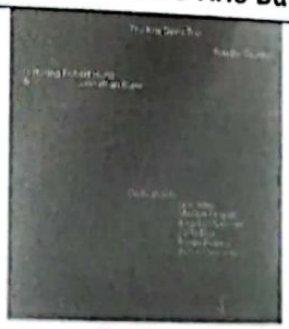
これは素晴らしいライヴ・アルバムだ。おそらくは天井の高い会場での音のこだまが、この米テキサス拠点のアメリカン・プリミティヴ系ギタリストの繊細で瞑想的なプレイの余韻を見事に表出。スタジオ録音盤よりジョン・フェイヒーやタウンズ・ヴァン・ザント、ジム・オルークからの影響を受けているこの人の本質を伝えている。場所は地元アマリロのコンサート・ホール。昨年12月23日に開催されたショウから、最初の挨拶（1曲目）を含めた7曲が収められているが、いくつかの曲は2曲以上が組み合わされていて、構成力の高さを見せつけているのも本作の魅力だ。過去作でモチーフにもしていたヘヴィ・メタルの要素についても、その死臭漂う様式美をホールならでは残響の中で幻想的なギター・アンビエントに鮮やかに溶け込ませている。たった一人、ギターだけで改めてメタルとアメリカン・プリミティヴの共通点を炙り出しているのはすごい。

岡村詩野

Jazz

The Kris Davis Trio

鬼才率いるトリオによる女性ピアニストに捧げた作品集



"Run The Gauntlet"
Pyroclastic [US]

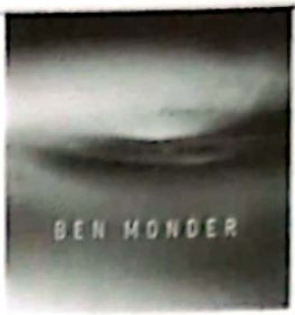
鬼才、クリス・デイヴィスのピアノ・トリオによるスタジオ録音盤。ドラムにジョナサン・ブレイク、ベースにロバート・ハーストを迎えたこの新しいトリオは、人選だけをみるとこれまでのトリオに比べてアヴァンギャルドな要素は少なくなりそう。これまでのクリスの作品に比べるとわかりやすいモチーフと構造で展開される曲が多く、この人選にいたったのも頷ける。女性ジャズ・ピアニストのジェリ・アレン、カーラ・ブレイ、マリリン・クリスペル、アンジェリカ・サンチェス、シルヴィー・クルボアジェ、リニー・ロスネスへのトリビュート・アルバムとなっており、それぞれのピアニストを想定した楽曲をクリス・デイヴィスが作曲。どの曲が誰へのトリビュートというのは明示されていないが、プレイや曲タイトルから予想しながら聞くのも楽しい。伝統的なジャズとアヴァンギャルドの新しい架け橋として、あるいはクリス・デイヴィス入門としてもおすすめ。花木洸

CamScannerでスキャン

Jazz

Ben Monder

表現の幅と広さに圧倒されるジャズ・ギタリストの新作



"Planetarium"
Sunnyside [US]

ECMからのソロ作のように、ロング・サスティーンがひたすら続く、アンビエントとしても聴けるアルバムを作ることもあれば、コンテンポラリーなジャズ・ギタリストらしく端正なフレーズを弾くこともあり、一筋縄ではいかないのがベン・モンダーだ。新譜はCDで3枚組で、その表現の幅と深さに圧倒される。テオ・ブレックマンらをヴォーカルに配し、テッド・ブアと武石聡らをドラム、クリス・トルディーニをベースにフィーチャーしているが、中心はあくまでギターだ。正確なピッキングで高速のフレーズを20分以上に亘って展開したと思えば、デレク・ベイリー並みの無調の落ち着かないフレーズを持続してみせたりもする。アコースティック・ギターを使って現代のブラジル音楽のような複雑なアンサンブルを作り出す曲もある。「これまでで最も個人的かつ広範囲に及ぶプロジェクト」とインフォにあるが、遂にモンダーがその全貌を見せた作品かもしれない。原雅明

Jazz

Dave Guy

美しいフレーズの数々が贅沢なトランペット奏者のデビュー作

"Ruby"
Big Crown [US]

ザ・ルーツの一員として日々ジミー・ファロンのTV番組に出演、マーク・ロンソンとブルーノ・マーズの"Uptown Funk"をはじめ、ノラ・ジョーンズやリゾやファレル・ウィリアムスなどの音源に参加し、さらに本作のリリース元であるビッグ・クラウンでもエル・マイケルズ・アフェアーなど多数の作品で演奏する、(実は)誰しもが一度は音を聞いたことがあるヴェテラン・トランペット奏者のデビュー作。〝ソウルやヒップホップが軸のジャズ作〟と書くともはや定番の組み合わせに見えるが、彼自身のキャリアを反映したようなビート/楽曲重視のバランスは独特。基本的に生演奏でありながらビート・テープのような雰囲気で、起伏が抑えられた展開も含めてメロウな質感が心地よい。そんな円熟味のプロダクションの一方で、メロディはどの曲も驚くほどポップでフレッシュだ。ソウルフルで美しいフレーズがこれでもかと出てくる贅沢さが楽しい。高橋アフィ

Jazz

Ibrahim Maalouf

微分音トランペットを用いてその魅力にフォーカスした充実作

"Trumpets Of Michel-Ange"
Mister Ibé [France]

レバノン出身のジャズ・トランペット奏者として活躍し、フランスのパリでは1万7000人を動員するアリーナ公演を成功させるほどの人気を誇るイブラヒム・マーロフの通算18作目。今回は、父親が開発した四分音まで表現できるトランペットの魅力に改めてフォーカスしたような原点回帰的な作風となっており、本人を含む5本のトランペットとサックスで構成された重厚な管楽器セクションを軸に、ジプシー・ブラスに通じるような明快かつグルーヴィーな楽曲が多めなのが嬉しいところ。マーロフ以外のトランペット奏者も四分音トランペットを用いることでアンサンブル面での違和感も解消され、ひと回りしてより理想とするサウンドに近づいた印象を受ける。後半には、微分音トランペットとの掛け合いが面白い効果を生んでいるトロンボーン・ショーティ、故トゥマニ・ジャバテとその息子のシディキとの共演曲も収められ、最後まで聴きどころが多い充実作だ。吉本秀純

CamScannerでスキャン

Terrace Martin

浮遊感と奥行きが心地よい
今年2枚目の新作

"Nintindo Soul"
Lowly [US]

JAZZ

米LAを代表するプロデューサー／マルチ奏者のテラス・マーティンが発表した今年2枚目のアルバム。近年は、伝統的なジャズやニュー・エイジなど多様な作品をコンスタントに発表している彼の最新作は、ロバート・グラスパーやカマシ・ワシントンらとのディナー・パーティの延長線にあるようなネオ・ソウル、ジャズ、R&Bを基調とした全8曲。アリン・レイとエレーナ・ピンダーヒューズのデュエットが素晴らしい‘Solo’、エモーショナルなメロディ・ラインが印象的なインスト曲‘The Possibilities Of Impossible’など、どの曲も浮遊感と奥行きを感じる彼のシグネチャー・サウンドが心地よく響く。ライヴ・セッションの空気感までリアルに伝わってくるジャズ曲‘Love (Crenshaw Mix)’で最後を締めくくっているのが素晴らしい。ナインス・ワンダー、コーシャス・クレイ、ジェイソン・マーティン、バディ、808ヴィック等がゲスト参加。

上神彰子

Steve Cropper & The Midnight Hour

余裕ある熟練の技が楽しめる
83歳のギタリストによる新作

"Friendlytown"
Mascot / Provogue [US]

R&B/Soul

60年代にスタックスの主力ハウス・バンド、ブッカー・T・アンド・ザ・MGズのギタリストとして、泥臭くも印象深いテーマ・リフやカッティングで貢献したスティーヴ・クロッパー。本作は10年ぶりのソロ名義作だった3年前の‘Fire It Up’に続く新作。スタックス時代のウィルソン・ピケットのヒット曲にあやかった名前のバンドを率いた名義だが、ロックンロール、ソウル、カントリーなどの要素が混ざったブルース・ベースの泥臭いロックという基本姿勢は、前作と何ら変わらない。元来、超絶テクニックとかが売りの人ではないので、心と体の赴くままに、余裕綽々で繰り出す熟練の技が最高だ。珍しく歌も歌うブライアン・メイ、表題曲を共作したZZ・トップのビリー・ギボンズなど、意外なゲストとの共演も楽しい。余談ながら今年83歳で、先ごろ来日したジョージ・クリントンと同い年。近年は高齢アーティストの元気な活動に目を見張るばかりだ。

河地依子

Jaz Karis

サウス・ロンドンのシンガーが
グローバルな共演者を迎えた新作

"Safe Flight"
Carmen / MNRK [UK]

R&B/Soul

英サウス・ロンドン出身のシンガーの2年ぶり2作目。最近はUKとLAを行き来しているそうで、制作陣も客演陣も前作以上に幅広いラインナップ。よりグローバルな活動をしたいという心意気が窺えるが、中でもDJキャンパーやトーン・スティス等とのコラボは本作の大きなトピックだろう。キャンパー作の夢心地なミディアム‘Talk About It’、トーンとのムーディーなデュエット‘Met You At A Bar’、トーン作の穏やかなスロウ‘2242’など、彼らとのコラボ曲はどれも彼女の甘酸っぱい歌声を活かした良曲ばかりだ。UK共演となったマヘリアとのヒーリング・ソング‘Nice Girls’もナイス。一方で、アフロ・ライクな曲が本作のキモでもあり、ナイジェリアのリーカド・バンクスが参加した‘Tequila’、イギリス系ガーナ人のジュルスが手掛けたスムース・ダンサー‘Castaway’などが、本作の柔らかいムードを上品、かつ華やかにもり立てている。

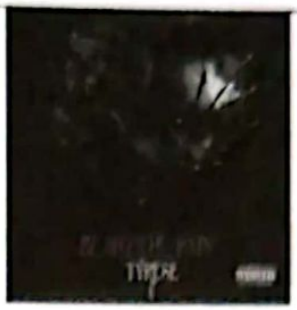
川口真紀

CamScannerでスキャン

R&B/Soul

Tyrese

引退宣言を撤回し痛みを綴った大作



"Beautiful Pain"
Voltron / Create [US]

歌手引退宣言を撤回して発表した9年ぶりの新作。レニー・クラヴィッツのギターとリアンドリア・ジョンソンの燃えるような声を絡めた先行のバラードで抱いた大作の予感は、スケールの大きいストロング・ヴォイスでニュー・バース版に倣って歌った"Wildflower"のカヴァーで確信に変わった。B.A.M.と共同で制作したのは、原曲の演者であるスカイラークにいたデヴィッド・フォスター。彼は総指揮も務めている。離婚や養育費トラブル、母の他界に起因する痛みを綴った本作は、そのテーマも含めてマーヴィン・ゲイ『離婚伝説』を想起させ、曲にもその影響が色濃く滲む。ゲストのオクトーバー・ロンドン、エル・デバージ、ケニー・Gもやるせないムードに加担。2曲採り上げたグラディス・ナイト&ザ・ピップスの名曲は、テイマー・ブラクストンとのデュエットと、ダニー・ハサウェイ版を踏まえてのカヴァー。懐古に沈まずソウルを叩き込んだ力作だ。　林剛

Rap/Hip Hop

MC Lyte

攻めの姿勢と豪華ゲストが売りのレジェンド・ラッパーによる新作

"1 Of 1"
My Block [US]

フル・アルバムをリリースした初のフィメール・ラッパーとしてヒップホップ史に名を残すMCライトが、9年ぶりの新作をリリースした。プロデュース陣はノッツ、DJスクラッチ、イージー・モービーという、まるでバスタ・ライムズの90年代作品のような布陣だが、トレンドに迎合せずに彼女本来の良さを出すという意味においてちょうど良い塩梅のチョイスかも。予想以上に覇気があるラップを披露しており、レジェンドの座に安住していない攻めの姿勢に感心した。ただしレジェンドだからこそ呼べる豪華ゲストも本作の売り。メアリー・メアリーとマニー・ロングを従えて神に感謝を捧げ、クイーン・ラティファとはエールを送りあい、Qティップとはレゲエ調トラックの上でマイクを交わしている。同期と言えるビッグ・ダディ・ケインやソルトの客演も嬉しいが、スティーヴィー・ワンダーの参加（しかもハーモニカではなく歌ってる！）には腰を抜かした。長谷川町蔵

Rap/Hip Hop

Wiseboy Jeremy & Kirty Pandey

ままならぬ日常を詩的に映し出すニュージャージーのラッパー

"Pumpkin Seeds"
Jerimiah Ochoa [US]

ヒップホップの新譜で最近ハマったのが、このワイズボーイ・ジェレミーとキルティ・パンディのアルバム。ジェレミーは米ニュージャージーで活動するラッパーで、これが2作目だが、トラックメイカーのパンディと組んで一皮向けた。パンディはメロウなコードに管楽器のループも絡ませたジャジーなトラック作りを得意とする。対して、ジェレミーはルックスもラスタみたいだし、ラップもガンジャ乗りっぽい、だらしない感じ。とどめなく言葉を詰め込んでいき、フックらしきものはほとんどない。ある意味、一本調子なのだが、パンディのトラックの洗練美とジェレミーのダメキャラがなぜか絶妙のマッチングを見せる。ままならぬ日常を詩的に映し出した映画のような感触がアルバムにはある。ロー・ブーストしたり、アタックを効かせたりしない、くぐもった質感のサウンドも今っぽい。ジェレミーは他所での客演も増えているが、声を聴けば一発で分かる。　高橋健太郎

CamScannerでスキャン

Mortimer

内省を詩的言葉を悲痛ながらも甘美な歌声で表現

"From Within"
Easy Star [US]

レゲエ・リヴァイヴァル〜モダーン・ルーツの最重要プロデューサー、ウィンタ・ジェイムスが高く買う才能、モーティマーの初フル・レングス。冒頭の"In My Time""Bruises(あざ)"は、黒人の純粋な苦難の記憶を、ときにショッキングですらある表現を用いて呼び覚まし、人種差別、奴隷制、植民地主義を糾弾する。その歌はしかし声を荒らげず、悲痛なのにそこにはかなさ以上、その相反するトーンがこの歌手最大の特徴だろう。内省や後悔を伴いながら、抽象的で哲学的な思索や問いかけが積み重なっていく。精巧に組み上げ、調律された言葉の美しさ、強さは、優しい歌い回しと優しいファミキット、この若き黒人に結合して[illegible]着いた[illegible]サウンド・プロダクションに[illegible]され、[illegible]の[illegible]入っていく。[illegible]は[illegible]、人間の[illegible]さ、[illegible]る音[illegible]・[illegible]イデオロギーも[illegible]

Tim Reaper & Kloke

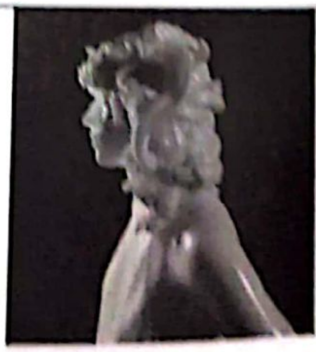
原初ジャングルの混沌を見事にすくい上げた一枚

"In Full Effect"
Hyperdub [UK]

フローティング・ポインツやジェイミーXXの新譜が先祖返りをして、オールドスクールに聞こえる21年。ハイパーダブが20年の歴史を経て、(ドラムンベースですらなく)ジャングルの作品を出すのだ。ティム・リーパーはフューチャー・レトロという示唆的な名前のレーベルを運営しており、ティムと何度もコラボしているメルボルンのクロークも、元は英国育ちであの時代に洗礼を受けた生粋のジャングリスト。高尚さを目論み、商業化していく前の原初の混沌を見事にすくい上げ、様々なフィルターを通して抽出している。懐かしいよねと当時のサウンドを聴き直してみると、本作とは洗練度や作り込みなど全然違って、現代最高峰の密林探検者たちの探究心に気付かされる。例えば4曲目の、不気味で背筋に冷たいモノが走るようなドープさは鳥肌もの。ダブステップ以降の[illegible]

Or:la

中毒性のある特異な魅力を持つアイルランド出身の電子音楽家



"Trusting Theta"
Fabric Originals [UK]

オル・ラはアイルランド出身、UK拠点の電子音楽家。2014年ごろから音楽を発表し始め、レオン・ヴァインホールのDJミックス・アルバム"Fabric"でプレイされて注目を集めた。これがファースト・アルバムとなる。

最初はあまり特徴のないディスコテークなディープ・ハウスといった感じだったが、本作はトライバルなリズムを強調したミニマルなテクノになって格段に洗練度を増した。古代アイルランドやギリシア神話をモチーフにセクシャリティやフェミニズムに言及したという本作は、音数を抑えたストイックな構成だが、聴くうちに中毒になってハマってしまうような特異な魅力がある。曲によってはクラフトワークを想起させるエレクトロや、ヴォーカルをフィーチャーしたフライング・リザー[illegible]

Electronic Music

Michel Banabila

架空の言語による交流が描かれるオランダの作曲家の新作

"Unspeakable Visions"
Knekelhuis [Netherlands]

80年代前半から活動を続けるオランダのサウンド・アーティスト、作曲家の新作。民族音楽と電子音楽の融合によって、想像力を拓くアンビエント・ミュージックの基本を肉体的に熟知していることがよくわかる充実作。架空の言語による交流が数々展開される。詠唱あり会話あり独白あり。フィールド・レコーディングのように響く背景に人工的な歌唱と実体感のある合いの手とが何層にも重なり合っていく。シンプルなビートは静かにポリリズミックに変容していくが、基本的にはシンプルなグルーヴが保たれている。交差するチャントのループが入り乱れても全体の構図はゆるがない。随所にアフリカ各地の断片が入り込んでいる。夢想の中の闇を音響で探っていく体験。ではあるが、音の多くに既聴感を覚えるのは、本作が想像力の淵に接する現実の曖昧領域を具体的な音で拡張する試みだからではなかろうか。ジャケット画に故・亀山巌さんの絵を思った。

湯浅学

Electronic Music

Derek Piotr

複雑怪奇な音世界を繰り広げる米国の研究家／実験音楽家

"Divine Supplication"
DPSR [US]

デレク・ピョートルはポーランド生まれ、米国育ちのクィアの実験音楽家で33歳。Pi.tr名義でのデビュー作も含めてこれまでに出した10枚以上のアルバムの大半は、コンピューターやサンプラーを用いたノイジーな電子音楽だったが、アパラチアに伝わるブリテン諸島系伝統音楽との出会いをきっかけにフォークロア研究に没入し、数年前から声／歌にフォーカスするようになった。フォーク系演奏家たちの生演奏で伝承曲をガチで歌った前作『The Devil Knows How』(22年)を経た今作でも声／歌が軸になっている。しかし、フェネスやノルウェイのマヤ・ラクチャ、フランスのオリヴィエ・アラリなど電子音楽系の才人多数を招いての音作りは複雑怪奇なミクスチャー・ワークとなっており、自身のキャリアの中間決算報告書といった趣。リコーダーによる13世紀の曲とグリッチ・ノイズとヒップホップとフォークが地続きとなった新型プランダーフォニックス。

松山晋也

Electronic Music

Nídia & Valentina

プロデューサーと打楽器奏者が生み出す野心的なダンス作品

"Estradas"
Latency [France]

ポルトガル・リスボンのゲットー・サウンドを代表するレーベル＝プリンシペの核となるプロデューサーの一人であるニディアと、ホーリー・タンやヴァニシング・ツインの一員でもある気鋭の打楽器奏者、ヴァレンティーナ・マガレッティがマッチ・アップ。物憂げなマリンバのシンコペーションが次第に速度を上げていき、地を這うようなベース・ラインと絡み合う冒頭曲もユニークだが、それ以上に鮮烈なのが次の"Rapido"だ。ニディアが仕込んだ官能的なヴォーカル・サンプルと獰猛なビートの交錯はそれだけでもリスボンのクドゥーロの最新形と言うことができる。だが、そこにヴァレンティーナがクラップやコンガ、タムなどを無軌道に加えていき、リズムのズレが輻輳することで、どこに着地するか全く予測がつかない異形のダンス・ミュージックを生み出した。トラックの整合性、あるいは調和というものに抵抗するような、歪で野心的なダンス・アルバムだ。

坂本哲哉

CamScannerでスキャン

Carlos Moscardini

8月に来日も果たしたアルゼンチンのギタリストの新作

"El Juego"
Epsa [Argentina]

Latin

8月に日本で初ソロ・ツアーを実現させたアルゼンチンを代表するギター・ソリストの9年ぶり最新作。欧州や日本のギター・ファンからも絶大なリスペクトを集める彼の楽曲は多くのギタリストに演奏されている。本作は全国6公演で限定発売し、完売した音源（配信もあり）。表題曲は、遊び心も試合もゲームもスペイン語で"juego"だが「楽しみながら真剣に取り組む」という点で音楽との共通性を感じると名づけた。ジャズ・ヴォーカリストの愛娘、フリアが歌うフォルクローレ（3、8、10曲目）や亡き父を思った12曲目で自身の歌も披露、過去作とは一線を画す珠玉の出来栄えに。インスピレーションが下りて来ぬ限り曲は生まれないと語り、コンサートではエチゼン・ギターによる澄み切った美しい音色と躍動に富んだ熟達の演奏で母国の自然や人々、家族を表現した。唯一無二の演奏と世界観は聴く人の心を震わせ、その片鱗に触れることが出来る作品集だ。谷本雅世

Roberto Fonseca

古風でどこか懐かしさを覚えるキューバのピアニスト

"La Gran Diversión"
3ème Bureau / Wagram [France]

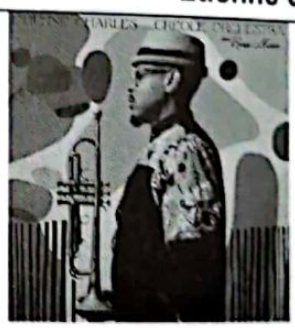
Latin

世界的ヒット『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』（BVSC）のワールド・ツアー後期のピアニスト。デビュー当初はフュージョン風味のキューバン・ジャズだったので、BVSCへの参加には驚いたけれど、そこはさすがにキューバのミュージシャン。トラディショナルもばっちりで、BVSCラスト・ツアーまで超ヴェテランたちをサポートした。その後、フランスを拠点にし、16年作『Ibue』など自身のアルバムは、ちょっとエクゾティックな風合いを強めにしたオールドファションなキューバン〜マンボとなっている。本作もその路線上にある。

全10曲38分ながら聴きごたえ満点。すべて自作かそれに準ずる共作で、どこか懐かしさとケレン味を持つ。'Mani Mambo'では英語ヴォーカルでクラレンス・ペッカーが参加。ジャケットに見るパーティ風景とマッチしたゴタ混ぜ感が楽しい。ピアノ&ボンゴの'Oscar Please'、のピアノ、すばらしっ！　山本幸洋

Etienne Charles

トリニダード音楽を深掘りする音楽家のビッグ・バンド作品



"Creole Orchestra"
Culture Shock [US]

Latin

トリニダード島出身のトランペット奏者エティエン・チャールズは、ロバータ・フラック、マーカス・ロバーツ、カウント・ベイシー・オーケストラ、グレゴリー・ポーターなど数多くのアーティストのサイドマンとして活動するかたわら、自身のソロ作ではトリニダードの音楽文化を深掘りしている。カーニヴァル史をテーマとした17年作は、カリブ音楽の重要作といえる力作だった。そのエティエンの新作はビッグ・バンドに挑戦。マイティ・スパロウのカリプソやジミー・フォレストの「ナイト・トレイン」のほか、ジャングル・ビートやラグタイム・ピアノを援用してアーサ・キットの持ち歌をスウィング・ジャズに仕立てるなど、趣向を凝らしている。ニュー・ジャック・スウィングを変奏する90年のヒット曲「ポイズン」を取り上げ、DJロジックのターンテーブルをフィーチャーしてスウィング・リズムに連結したビッグ・バンド・アレンジには脱帽させられた。荻原和也

CamScannerでスキャン

Latin

Kombilesa Mi

コロンビアの伝統リズムとアフリカ音楽を重ねるバンド

"Asina Gué"
Kombilesa Mi [Colombia]

コロンビアのアフロ系音楽で、個人的に一推しなのが今回紹介するコンビレサ・ミ（パレンケ語で「マイ・フレンド」を意味する）。南米で最初の黒人自由都市として知られるパシリオ・デ・パレンケで11年に結成され、自分たちの音楽をRFP（＝Rap Folklórico Palenquero）と名付け、コロンビアの伝統的なリズムとアフロ系音楽とラップなどをミックスさせることで、過去と現在をつなぐ活動を続けている。

サウンドを支えているのが、マリンブラやタンボーラといった楽器で、ビンビン響く低音やリズムがマシーンのように刻まれていく。パレンケ語をはじめとする様々な言語でコール・アンド・レスポンスが繰り返され、そこに次々とラップで言葉がつながれ、重ねられていく。3曲入りのミニ・アルバムだが、1曲目は彼らのマニフェスト・ソングとも言える内容で、アフリカの様々な文化がパシリオ・デ・パレンケに受け継がれて、ら

rld Music [Africa]

Ebo Taylor, Adrian Younge, Ali Shaheed Muhammad

ハイライフ～アフロビートのパイオニアを再解釈

"Ebo Taylor JID022"
Jazz Is Dead [US]

米LAの人気イヴェントとしてスタートし、今ではリリースの動向が常に注目されるプロジェクトとなった"Jazz Is Dead"シリーズ。22番目となる今作ではガーナにおけるハイライフ、アフロビートのパイオニア、エボ・テイラーが登場。ハイライフの蒐集をライフワークとする筆者としては実に感慨深いニュース。サンプリング・ソースとしても有名なテイラーのヒット曲'Love And Death'をリビルドしたような'Obi Do Woa (If Someone Loves You)'などを筆頭に、全編にわたってエイドリアン・ヤングとアリ・シャヒード・ムハンマドを筆頭とするバンドによる先人達へのリスペクトに溢れた演奏はタイトかつスリリングで、どこかサイケデリックなテイラーのヴォーカルとの融合は中毒性を帯びる。テイラーが発展させた独自のハイライフやアフロビートとジャズの親和性を実感させ、先人達との音

Music [Europe]

Alexandra Bounatsa

多彩な音楽の要素を下敷きに歌うギリシャの女性シンガー

"Ena Giro Ton Kosmo"
Panic [Greece]

ギリシャはテッサロニキ出身、男性二人のバックで歌ったトリオ、仏語でサヨナラの複数形〝レゾルヴォワ〟というグループで17年にデビュー、CD&配信でアルバム3作を残している。国立音楽院で西洋古典も学んだ才媛らしいが、当方としてはデビュー作『古時計』のレトロな雰囲気が好きだった。オスマン・トルコからの独立後、小アジアからの帰還移民達が特に好んだという、20世紀半ばの〝ライコ・パルコ〟ムードそのまま、ラテンやスウィングとライカが入り混じったような曲調の中、通り良く澄刺とした哀愁歌謡?を聴かせていた。本盤は、そんなアレクサンドラ・ブナッツァ自己名義初作。レトロ風味は後退し〝アラウンド・ザ・ワールド〟の表題通り、バチャータやサルサ、バルカン風、フラメンコやレゲエ等を下敷きとした多彩な曲が並んだ。

CamScannerでスキャン

Sitio Rosa

コロナ禍の隔離期間に作られたインティメイトで力強い音楽

"Sitio Rosa"
Sítio Rosa [Brazil]

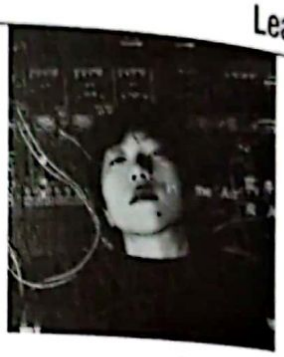
Brazil

ブラジルのミナス州で活動するジェニフェル・ソウザが、自身が所属するムーンズのバンド・メイトをはじめとする音楽仲間たち、さらにはメンバーの子供やペットなど、広義の家族とともにコロナ禍に録音した作品。ライヴができず、人々と直接触れ合う機会が制限されたこの時期は、多くのミュージシャンにとっても極めて苦しい時間であった。ジェニフェルにとっても、本作の制作過程はある種の自己セラピーのようなものだったようだ。フェスやライヴを存分に楽しめる世界が戻り、コロナ禍の鬱屈した雰囲気を完全に払拭したかのような昨今のムードとは相反する音楽かもしれないが、だからこそ、史上まれに見る隔離期間に生まれたこの作品は、ふと振り返ったときに特別な価値を持つのではないかとも思う。最も身近な存在である家族がそれぞれを励まし、支え合う。その輪は小さいが、それゆえに真にインティメイトで力強い音楽が収められた作品だ。

江利川侑介

Leah Dou

自身の作詞作曲／プロデュースで世界を自由奔放に広げた一枚



"空中飛人"
Grey Waters [Hong Kong]

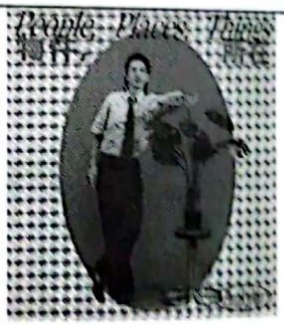
East Asia

中華圏のポップ・ミュージックの現在を象徴する存在となったリア・ドウの新作。日本では父はドウ・ウェイ、母はフェイ・ウォンという血筋について注目されることが多いが、もはやそうした出自は重要ではないだろう。本作は前作『春遊』に続く中国語アルバム。全曲の作詞作曲、プロデュースを自身が手掛けており、過去の作品でも重要な役割を果たしていた香港のアーネスト・チョイがサポート的に関わっている。過去の作品では現代エレクトロニック・ミュージック的な作風も打ち出していた彼女だが、今回は生演奏が中心。"空中ブランコ"を意味するタイトル通り、ネオ・ソウルのニュアンスも感じさせる浮遊感あるポップ・サウンドを展開している。インディー・ロック的なバンド・サウンドを従えてラフに歌う「California Baby」や「我」などの楽曲がある一方、現代ジャズとも共振する「Lift Off」などもあって、自身の世界を自由奔放に広げている。

大石始

FunkyMo

チルでローファイで遊び心のある台湾ポップス



"物件,所在"
顏露 [Taiwan]

East Asia

今年の台湾ものの中でも、個人的に相当高位置にあるアルバムが登場した。台北出身のファンキーモーは、台湾で大学を中退した後、米バークリー音楽大学に留学し、電子音楽制作を学ぶ。そして台湾に戻ってリリースした19年の「Alb」が音楽賞を獲り、同年、藤井風の「きらり」をアジア各地のアーティストがリミックスした『Kirari Remixes (Asia Editions)』にも参加している。そして本作は9月のリリース。以前の電子音満載とは全く装いを変え、チルでローファイで居心地のよい作品だ。60〜70年代ソウル音楽への愛、古き良きポップスやシティ・ポップを加えて今時のアジア風にしつつ、台湾語ポップスの泥臭さも魅力的。力まずハッピーで遊び心もあるし、なんといっても音楽を楽しんでいるのが伝わる。昨今の台湾のバンド、力が入ってるのが多いしそれはそれでいいんだけど、本作を聞いて、こういうのが台湾から出てよかったなあとしみじみ思う。

関谷元子

CamScannerでスキャン